

念佛林遺跡

小松短期大学建設事業に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

1988年3月

石川県小松市教育委員会

念佛林遺跡正誤表

頁	行(箇所)	誤	正
例 言	上から4行目	昭和60年に計画が変更となり、昭和60年度以降は～	昭和61年に計画が変更となり、昭和61年度以降は～
本文中 14ページ	上から8行目	1・4・151・169・189の各個体	1・143・161・162・180の各個体
14ページ	上から8行目	227の浅鉢	218の浅鉢
18ページ	第12図(土器No.)	175 4	164 162
19ページ	第13図(土器No.)	4	162
29ページ	第20図	Pit No.欠落	別図のとおり
31ページ	第22図 Pitセクション3列目	P 6 P 9 P 10	P 6 P 8 P 9 P 10
32ページ	第23図(土器No.)	106 107	105 106
38ページ	下から9行目	連華状文	連華状文
46ページ	下から6行目	半隆起文	半隆起線
61ページ	第44図(浅鉢の土器No.)		218
69ページ	上から17行目	b群は2の土器で	đ群は2の土器で
々	下から1行目	I類は	i類は
78ページ	下から11行目	H:222~229	H:222:229
114ページ	第18表(器種名)	石匙	石匙
図版2	上から2段目右	1号住居跡pit1	1号住居跡pit 1
図版3	上から2段目右と左	2号住居跡pit1	2号住居跡pit 1 2号住居跡pit 2
図版3	上から3段目右	3号住居跡pit1	3号住居跡pit 1

序 文

念仏林は、小松市符津町と月津町にまたがる6万坪にも及ぶ広大な官有林のことですが、ここには大木が鬱蒼と茂り、昼でも薄暗いところで、この地を通るものは誰でも恐怖感と薄気味悪さのため、念仏を唱えたことからそう呼ばれるようになったと聞きます。

念仏林遺跡はこのように古くから伝承されて来た地名からつけられたのですが、昭和24年に小松高等学校地歴クラブの顧問をされていた上野与一先生によって発見され、命名されました。そして、この調査の途中に、偶然にも古墳の主体部が発見され、その中から須恵器や鉄刀、鉄鎌、金環などの遺物が出土しました。この古墳の発見は、これ以後続く、借屋古墳、狐森塚古墳などの三湖台古墳群と呼ばれる大きな古墳群の調査の発端となつたわけです。この古墳群からは多くの出土品が発見され、貴重な埋蔵文化財として多くの研究者たちに評価を受けました。なお、この古墳群のうちの幾つかは、現在でもその姿をとどめ、当時の様子を偲ばせています。

このような自然と文化財に恵まれた地に文化の中心とも呼べる大学を建設することになり、この地域を3年間かけて発掘調査することとなったのです。

発掘調査では3軒の竪穴住居跡や石器を作ったと思われる場の他に、多くの縄文土器や石器、土偶、県内では出土例の少ない縄文時代草創期の石器なども発見されました。小松市はもとより、県内でも有数の遺跡として多くの諸先生、市民の方々の注目を集めた遺跡で、近隣の小学校を対象とした見学会を数回実施しています。また、調査によって発見された出土品は、今後、小松市立博物館に展示し、市民の方々、多くの研究者に活用して戴く所存ですので、本書の活用とも併せて、小松の原始時代を知る一つの手掛かりになればと思っています。

末尾になりましたが、発掘調査及び報告書をまとめるに当り、温かいご指導を賜りました小松市埋蔵文化調査委員の諸先生方、石川県教育委員会文化課、石川県立埋蔵文化財センターの職員の方々、そして、暑い日も寒い日も毎日発掘調査に従事された地元作業員の皆様に厚くお礼申し上げます。

小 松 市 教 育 委 員 会
教 育 長 岡 山 玑 彦

例　　言

1. 本書は石川県小松市四丁町に所在する念佛林遺跡の、昭和60年度～昭和62年度に実施した発掘調査およびそれに先立って実施した試掘調査の報告書である。
2. 本遺跡の発掘調査は、調査着手時においては小松市が実施する栗津運動公園整備事業とともに市単独事業として実施したものであるが、昭和60年に計画が変更となり、昭和60年度以降は小松短期大学建設工事に伴って、小松短期大学設立準備委員会より小松市教育委員会が依頼を受けて実施したものである。なお、主たる整理作業と報告書作成は昭和62年度発掘調査経費の中で実施した。
3. 発掘調査は、昭和59年度の試掘調査を宮下幸夫が、昭和60年度の発掘調査を宮下・樋田　誠が、昭和61年度の発掘調査を望月精司が、昭和62年度の発掘調査を望月・石田和彦がそれぞれ担当した。
4. 本遺跡の整理作業は、一部を石川県埋蔵文化財整理協会に委託し、他を小松市教育委員会が実施した。なお、報告書作成に伴う石器の計測及び分布図、表、図版作成には打田外喜代、宮田佐和子、江野直子、河井秀樹、土屋宣雄の各氏の協力を受けた。
5. 遺物の写真撮影は、土器を望月が、石器を樋田がおこなった。
6. 石器の石質鑑定及び土器の胎土内鉱物の鑑定については、石川県立小松工業高等学校校長　関戸信次氏の御指導を受けた。
7. 本書の編集は小村　茂、宮下の指導のもと樋田、望月があたり、次の各氏が分担執筆をおこなった。
第Ⅰ章を石田が、第Ⅱ章第1節、第2節(2)(3)、第Ⅲ章第1節(3)(4)(5)、第2節、第3節、第Ⅳ章第1節を望月が、第Ⅱ章第2節(1)、第Ⅲ章第1節(1)(2)、第Ⅳ章第2節、第Ⅴ章を樋田が執筆した。
8. 本書で示す方位はすべて磁北である。なお、第1図の周辺の遺跡については、国土地理院発行25,000分の1地形図(昭和56年1月30日発行「小松」)を使用し、第2図のスパン配置・地区割図については、小松市発行5,000分の1国土基本図(昭和54年測量、昭和59年修正「四丁町・矢田野町」)を引用した。
9. 表の出土地とした項目で○住としたものは○号住居跡を、○集としたものは○号遺物集中を示す。
10. 調査の実施および報告書の作成にあたっては、以下の方々、機関、団体から御協力と御指導を得た。記して謝意を表したい。(敬称略　順不同)
上野与一、春日真実、加納他家男、北野勝次、北野博司、木下哲夫、工藤俊樹、酒井聖子、桜井甚一、諏訪間順、高堀勝喜、丹野雅人、堤　隆、土肥　孝、西井龍儀、西野秀和、橋本澄夫、浜岡賢太郎、平口哲夫、古川知明、本田秀生、麻柄一志、松井政信、島吉信、松山和彦、南　久和、三宅敦氣、山本正敏、湯尻修平、吉岡康暢、米沢義光、石川県立埋蔵文化財センター、石川考古学研究会、小松建設、小松建設工業、小松サンアビリティーズ

目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
第Ⅱ章 調査に至る経緯と経過	4
第1節 調査に至る経緯	4
第2節 調査の概要	6
(1) 昭和60年度調査の概要 (第1次調査)	6
(2) 昭和61年度調査の概要 (第2次調査)	7
(3) 昭和62年度調査の概要 (第3次調査)	8
第Ⅲ章 遺構	9
第1節 A地区	9
(1) A地区遺構分布の概要	9
(2) 1号住居跡	13
(3) 2号住居跡	22
(4) 3号住居跡	22
(5) 4号遺物集中	34
第2節 B地区	34
第3節 C地区	36
第Ⅳ章 遺物	38
第1節 土器	38
(1) 繩文時代中期前葉～中葉の土器群	38
(2) 繩文時代後期の土器群	62
(3) 土製品	64
(4) 胎土について	64
(5) 小結	68
第2節 石器	72
(1) 繩文時代草創期の石器 (2) 石錐 (3) 尖頭器・両面加工石器 (4) 石錐 (5) 石匙 (6) スクレイバー (7) 鋸歯縁石器 (8) 楕形石器 (9) 異形石器 (10) その他の石製品 (11) 打製石斧 (12) 磨製石斧 (13) 石錐 (14) 凹石 (15) 磨石 (16) 敲打器 (17) 石皿 (18) 石核 (19) 小結	79
第Ⅴ章 考察	115

表 目 次

第1表 繩文土器出土地点・胎土観察表	65	第10表 打製石斧属性表	104
第2表 石錐属性表	101	第11表 磨製石斧属性表	104
第3表 尖頭器・両面加工石器属性表	102	第12表 石鍬属性表	104
第4表 石錐属性表	102	第13表 凹石属性表	109
第5表 石匙属性表	102	第14表 鋸歯縁石器属性表	109
第6表 スクレイバー属性表	103	第15表 敲打器属性表	110
第7表 鋸歯縁石器属性表	103	第16表 石皿属性表	111
第8表 楕形石器属性表	103	第17表 石核属性表	111
第9表 その他の石器属性表	103	第18表 地点別組成表	114

挿図目次

第1図	周辺の道路と縄文時代の古地形	3	第41・42図	底部付近深鉢形土器相影図	57・58
第2図	スパン配置及び地区割り図	4	第43~45図	浅鉢形土器拓影・実測図	60~62
第3図	試掘調査トレント配置図・試掘調査全体図	5	第46図	縄文時代後期の土器拓影図	63
第4図	A地区年次別調査区域	7	第47図	土製品実測図	63
第5図	A地区遺物分布密度図	10	第48図	器種別胎土組成グラフ	67
第6図	A地区遺物集中概念図	11	第49図	石鏃長幅比	73
第7図	A地区住居跡・竪穴状構造を伴う遺物集中分布図	12	第50図	石匙摩滅部位	74
第8図	1号住居跡内石錐集積状態	14	第51図	石錐重量分布	76
第9図	1号住居跡平面図	15	第52図	石錐長幅比	76
第10図	1号住居跡土層セクション・エレベーション図	16	第53図	石核分類模式図	78
第11図	1号住居跡ピットセクション図	17	第54図	旧石器・繩文草創期石器実測図	80
第12図	1号住居跡土器ドットマップ	18	第55図	石鏃実測図	81
第13図	1号住居跡床面遺物出土状況図	19	第56図	石錐未製品・尖頭器・両面加工石器実測図	82
第14図	1号住居跡石器ドットマップ	21	第57図	石錐実測図	83
第15図	2号住居跡平面図	23	第58図	石錐・石匙・スクレイバー実測図	84
第16図	2号住居跡土層セクション・エレベーション図	24	第59図	スクレイバー・鋸歯縁石器・楔形石器実測図	85
第17図	2号住居跡ピットセクション図	25	第60図	楔形石器・異形石器・玉類・石斧実測図	86
第18図	2号住居跡石器ドットマップ	26	第61図	打製石斧実測図	87
第19図	2号住居跡土器ドットマップ	27	第62図	磨製石斧実測図	88
第20図	3号住居跡平面・土層セクション図	29	第63~66図	石錐実測図	89~92
第21図	3号住居跡エレベーション図	30	第67図	石錐・凹石実測図	93
第22図	3号住居跡ピットセクション図	31	第68図	磨石実測図	94
第23図	3号住居跡土器ドットマップ	32	第69図	磨石・敲打器実測図	95
第24図	3号住居跡石器ドットマップ	33	第70図	敲打器・石皿実測図	96
第25図	4号遺物集中平面・土層セクション図	35	第71・72図	石核実測図	97~99
第26図	C地区調査区域図	36	第73図	遺物集中区細分概念図	119
第27図	古墳時代の土坑平面・土層セクション図	37	第74図	遺物集中類型分布	123
第28図	土坑出土上須器実測図	37	第75図	礫石器集中類型分布	123
第29~36図	文様帶をもつ深鉢形土器拓影・実測図	41~50	第76図	剥片類集中類型分布	123
第37~40図	粗製深鉢形土器拓影・実測図	52~55	付 図	念佛林道路A地区遺物出土状況図	

写真図版目次

図版1	念佛林道路周辺の地形と景観	図版15	縄文時代後期の土器と土製品及び古墳時代の須恵器
図版2	1号住居跡	図版16	縄文時代草創期の石器・石鏃・石錐未製品
図版3	1号住居跡遺物出土状況	図版17	尖頭器・両面加工石器・石錐・石匙・スクレイバー
図版4	2号住居跡・3号住居跡	図版18	スクレイバー・鋸歯縁石器・楔形石器・異形石器・玉類 ・石斧
図版5	4号遺物集中とA地区遠景及びC地区土坑	図版19	打製石斧・磨製石斧・石錐
図版6~10	文様帶をもつ深鉢形土器	図版20	石錐・凹石・磨石・敲打器・石皿
図版11・12	粗製深鉢形土器	図版21	石核
図版13	粗製深鉢形土器と底部付近の深鉢形土器		
図版14	浅鉢形土器		

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

念仏林遺跡は、JR北陸本線粟津駅西側の四丁町南西部一帯に所在する縄文時代中期を中心とした集落遺跡である。念仏林という呼称は、符津町・月津町一帯の江戸期からの通称で、「能美郡誌」によると、念仏官山・御林とも呼ばれ、6万坪に及ぶ官有林であった。昭和30年、月津村大字月津新が四丁町と改称され、農・住混合集落を形成し、最近までは本遺跡を含む一帯は牧場として利用されていた。現在では、小松短期大学や小松勤労身体障害者教養文化体育施設「小松サンアビリティーズ」の建設、粟津児童公園等の整備がなされ、文教地区としての発展が期待されている。

さて、念仏林遺跡が所在する小松市南部地域についてであるが、この地域は地形の特徴において概ね3つに区分することができ、遺跡分布はこの地理的条件に適応するかたちで展開している。

まず、白山連峰の前山地帯から続く標高20~50mの低丘陵地には、戸津・二ッ梨・那谷金比羅山古窯跡などをはじめとした日本海側有数の規模を誇る南加賀古窯跡群がある。また、木場・今江・柴山潟に囲まれた洪積台地には、本遺跡をはじめとした縄文時代から中世に至る集落跡や、古墳時代後期の古墳・集落跡が見られる。そして残る地域は、加賀三湖の各々をとりまいて形成している渦埋積平野で、水田地帯となっている。

加賀三湖は、現在では今江潟が283ha全面を、柴山潟が576.2haのうち343.2haを干拓され、その景観を一変させてしまっているが、明治30年の国鉄北陸線開通までは小松加南地方の連絡水路として盛況を呈した。その形成過程をみてみると、まず第四紀最新世後期の間氷期に、加賀市と小松市の市境付近で月津台地・橋立丘陵が形成された。次にその丘陵部が最新世末期ウルム氷期（約12万年前）に侵食作用を受け、できた低地に完新世のフランドル海進（6000年B.P.頃に始まったとされるいわゆる縄文海進）時に海水が侵入した。木場潟の南側で、白山連峰の前山地帯が舌状にせり出している丘陵地の西側に縄文前期の津波倉町大谷山貝塚が所在することで、現在でも当時の海進の様子を窺うことができる。

縄文後期以後の相対的海水準の低下によって三湖が残ることになるが、その海退が進むまでは、三湖周辺にはそれぞれ入り江や湾が存在し、当時は格好の漁場となっていたと思われる。本遺跡をはじめとして三湖に囲まれた台地上の縄文中期遺跡は、こうした漁撈活動に好適な地であるという条件下に成立した遺跡群といえる。

小松市南部の地形の形成と遺跡分布の関係は以上の通りであるが、次にその具体的な名称を挙げてみる。

本遺跡周辺の縄文時代の遺跡（第1図網掛け部）には、本遺跡の西側に隣接する月津新遺跡、月津台地西端で柴山潟干拓地沿いに所在する茶臼山A遺跡・額見神社前A遺跡、南側の矢田野台地には矢田A・B遺跡がある。また、木場潟と今江潟の間の台地上には符津A・B遺跡が存在する。これらはいずれも本遺跡と同じ中期を中心とした遺跡である。また、干拓された柴山潟北東部をはさんで、月津台地の対岸の丘陵据

に存在する柴山貝塚も中期から後期にかけての遺跡である。

弥生時代になると確認されている遺跡は少なく、隣接する念仏林南遺跡のほか、古墳時代までの複合遺跡となっている額見神社B遺跡が存在するのみである。

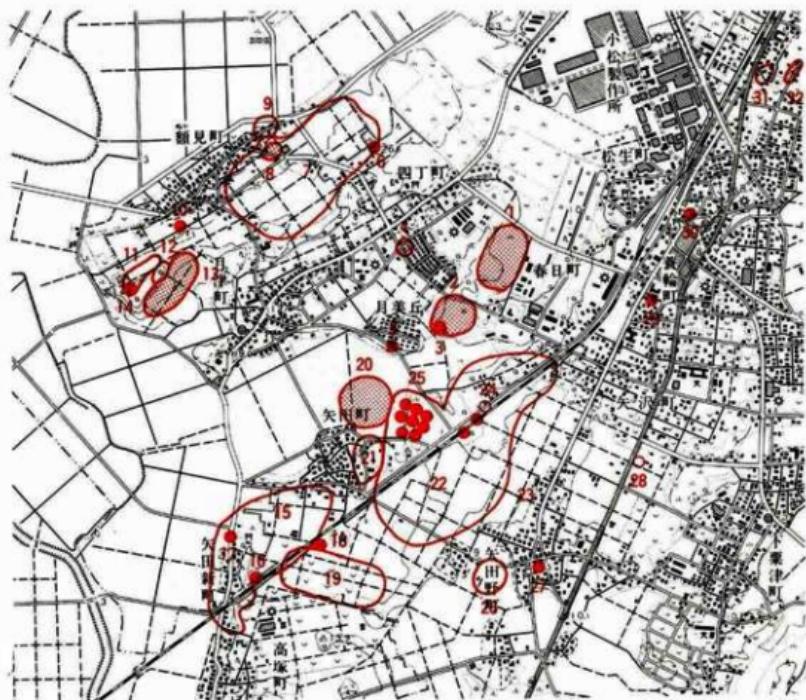
古墳時代には、加賀三湖によって囲まれた台地上の大小の起伏の多い地形を利用して、数多くの古墳が出現してくる。本遺跡に隣接する念仏林古墳は、礫敷粘土構の主体部をもつ末期の円墳である。また同地には、念仏林南遺跡（昭和59・60年度小松市教委調査）も所在している。同遺跡は、縄文時代から古墳時代に至る複合集落跡で、主な遺構として竪穴住居跡では縄文時代中期初頭のものが1軒、古墳時代初頭から前期が5軒、中期1軒、同後期21軒、掘立柱建物跡では古墳時代後期のものが17軒検出されている。また、それより南側の矢田町・矢田野町・矢田新町が位置する矢田野台地には、前方後円墳5基、円墳約30基が集中している。そのうち矢田僧屋古墳群は、1～6号が円墳、7・8号が前方後円墳からなる。2号墳は粘土構を主体部にもち直刀等を出土し、4号墳も同じく粘土構で、埴輪・須恵器・瓶等が出土している。7号墳は主体部が粘土折衷構で、碧石・ベンガラ・直刀・円筒埴輪片・形象埴輪片が出土し、8号墳は、主体部が箱形粘土構である。他に、円墳で箱形粘土構を主体部にもつ矢田無名古墳、円墳で子持勾玉出土の丸山古墳、円墳で石棺をもち金環出土の孤森塚古墳、円墳で銀環出土の中村古墳等がある。一方、月津台地の西端には後期円墳の茶臼山古墳が、北端には臼のぼぞ古墳等が、また本遺跡より木場洞寄りの台地上には、後期の切石積横穴式石室を主体部にもつ符津石山古墳が存在し、金銀環・馬具一組等が出土している。その他、本遺跡の東側で現在JR粟津駅より南400mの台地上には、念仏林古墳と同じく礫敷粘土構を主体部にもつ後期の前方後円墳の養輪塚古墳が存在し、鐵鎌・刀子・管玉等が出土している。

奈良時代以降になると、中世までの複合遺跡である額見町遺跡が月津台地北端に存在し、また、同台地南西側の茶臼山祭祀遺跡では土馬が出土している。その他、南側の市境付近には奈良時代後期の矢田新遺跡等が存在する。

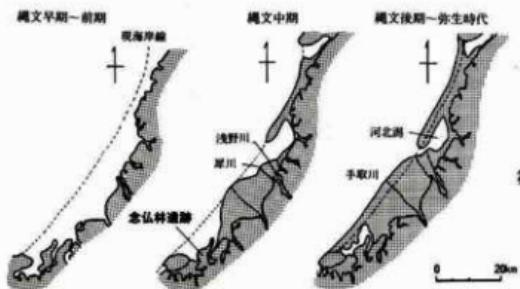
〔注〕 藤 则雄 1965 Palynological Study on the Alluvial Peat Deposits from the Hokuriku Region of Central Japan (I). Bulletin of the Faculty of Education, Kanazawa University. 北陸第四紀研究グループ 1969 「北陸地方の第四系」『日本の第4系』(地学団体研究会専報第15号より一部加筆及び修正により再掲載)

〔参考文献〕

- スチュアート・ヘンリ 1982「海進・海退(1)」「縄文文化の研究(1) 縄文人とその環境」 雄山閣
浅香年木・田川捷一 他 1981『角川日本地名辞典 17 石川県』 角川書店
石川県立埋蔵文化財センター 1980『石川県遺跡地図』
上野与一 他 1965『考古編』『小松市史(4) 風土・民俗編』 小松市教育委員会



1. 念仏林遺跡 2. 念仏林南遺跡 3. 念仏林古墳 4. 月津新遺跡 5. 念仏塚古墳 6. 白のはぞ古墳 7. 須見町遺跡
 8. 須見神社前A遺跡 9. 須見神社前B遺跡 10. 左衛門殿古墳 11. 茶臼山B遺跡 12. 茶臼山祭祀遺跡
 13. 茶臼山A遺跡 14. 茶臼山古墳 15. 矢田新遺跡 16. 無名古墳群 17. 丸山古墳 18. 亂森塚古墳 19. 刀何理遺跡
 20. 矢田A遺跡 21. 矢田B遺跡 22. 矢田野遺跡 23. 矢田野古墳 24. 百人塚古墳 25. 借星古墳群 26. 矢田野神社
 前遺跡 27. 中村古墳 28. 島経塚 29. 萩輪塚古墳 30. 石山古墳 31. 芳津A遺跡 32. 芳津B遺跡



第1図 周辺の遺跡 (1 / 25,000)：上
 (地図) と縄文時代の古地形：下

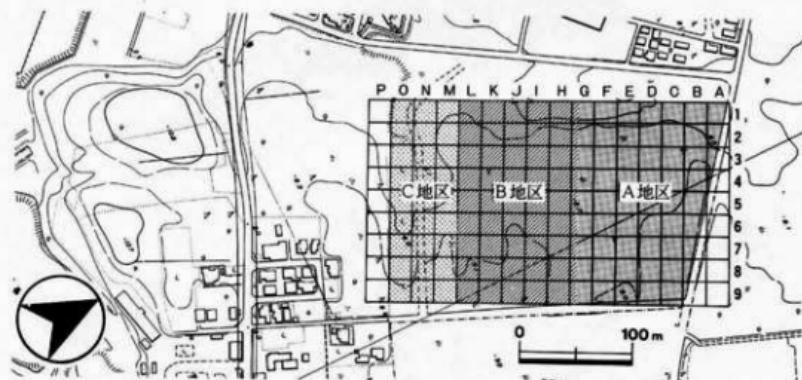
第II章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

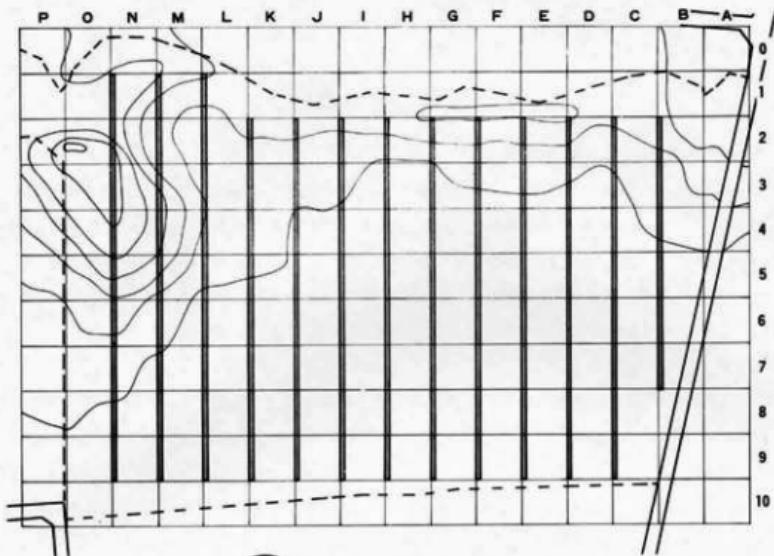
小松市符津町・四丁町・月津町には、通称念仏林と呼ばれる雑木林が南北に約150ha広がっている。この地域は、以前川西牧場があった場所で、前世に大きな掘削を受けていない地域であった。今回の調査区域は、川西牧場の中央に位置し、古くから縄文土器や土師器が採集できる地域として知られてきた。

小松市はこの川西牧場跡地を柱として、体育馆や運動公園、老人ホーム等の施設の充実を目的とした南部地区的総合開発計画を打ち出した。この開発計画の一端に栗津運動公園整備事業があり、昭和59年8月に、6,000m²を対象とした開発の協議が教育委員会保健体育課より提出された。申請地は、小松高等学校地歴クラブの縄文遺跡研究において、念仏林遺跡として縄文時代中期の遺跡の存在が周知されていたが、遺跡の範囲と内容を把握するため、昭和59年11月1日から11月16日に試掘調査を実施した。

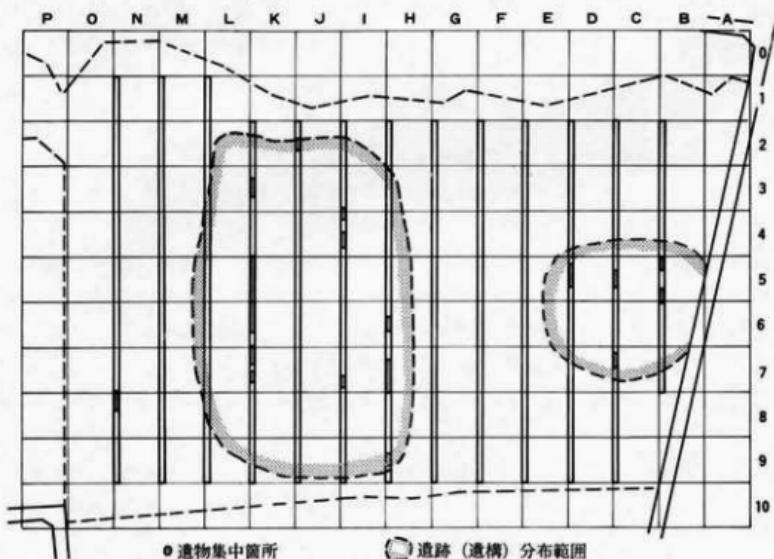
調査は南北20mに1本の割合で、長さ約170m、幅1.5mのトレンチを計13本設定し、包含層まで掘削して行った。その結果、縄文土器や石器が約150点出土し、17ヵ所の遺物集中箇所が確認され、大きく分けて南と北に2つの遺跡範囲が設定できた(第2図)。しかし、遺物集中箇所以外の区域は、遺物の出土が疎であり、濃密な遺構の分布がないと予想された。このような結果をもとに、昭和60年度から3カ年にわたって、発掘調査を実施することとなった。



第2図 スパン配置及び地区割り図 (1 / 5,000)



0 60m



● 遺物集中箇所

(○) 遺跡(遺構)分布範囲

第3図 試掘調査トレンチ配置図(上)・試掘調査全体図(下) (1 / 2,500)

第2節 調査の概要

(1) 昭和60年度調査の概要（第1次調査）

60年度調査対象を、C地区(9,600m²)・A地区西側(5,000m²)として調査を実施した。本調査開始にあたり、全体のグリッド区分を工事用測量のスパンに合わせて設定することとした。これによって、20×20mのスパンを大区画として、北東より南西方向へA～O、北西より南東方向へ0～10の記号を付して「1Aスパン」のごとく呼称した。また、小区画としては、5×5mのグリッドを基本として、1スパン内を右下図のように16区分し、「1A1グリッド」のごとく呼称した。

C地区の調査

60年7月8日より、C地区南東端90スパンから面的調査を開始したが、遺物の分布は極めて希薄なものであった。また、80スパン西側を掘り下げた時点で、地山面の西方向への傾斜がみられたため、60から6Nスパンにかけて、重機によるトレンチ深掘り調査を実施して旧地形の確認を行った。この結果、調査区北西側の大半が埋没谷並びに人为的埋立部に含まれ、遺跡が形成された張り出し状台地の西端縁辺部に位置していることが判明した。これらのことから、C地区での遺跡の拡がりはあまり期待できないとして、8月1日より千鳥掘り方式に変更した。調査の結果、縄文時代の遺構は検出されず、古墳時代後期の土坑と遺物を検出した。実質の掘り下げ面積は約2,200m²で、8月23日に完了した。

A地区の調査

C地区的調査中に、重機による表土除去を実施しており、C地区完了と同時に杭打ち並びに掘り下げを開始した。当初は、C地区同様、6Bスパンより千鳥掘りを実施したが、遺物分布が濃密で、たちに全面調査に切り替えた。また、開始後まもない8月27日に、5Bスパン北西寄りで遺物集中区域を確認した（1号遺物集中）。住居跡の可能性があるとして、遺物を残しながらのプラン確認を行ったが、明確な立ち上がりは検出されなかった。幸い最終的な地山面精査でもピット等の検出ではなく、住居跡ではないと判断されたが、地山への掘り込みが極めて浅い住居跡の存在する恐れが充分あるものと予想した。このことから、出土遺物を可能なかぎりドットマップ化し、まず遺物集中地点として把握するものとした。そして、それを住居跡覆土遺物と想定して、プラン確認以前の段階でセクションベルトを設定し、床面の確認から壁立ち上がりの検出へと進める方法をとった。この方法によって、9月18日には、1号住居跡を確認し、黒褐色土中にも及ぶ壁の立ち上がりの検出を得た。ただ、この1号住居跡の掘り下げに際して、最上層遺物を一括で取り上げた経緯がある。それは、土器集中として捉えた段階で、遺物の多くが地山土に近い色調の淡褐色土に混在

A

1	2	3	4
5	6	7	8
9	10	11	12
13	14	15	16

1

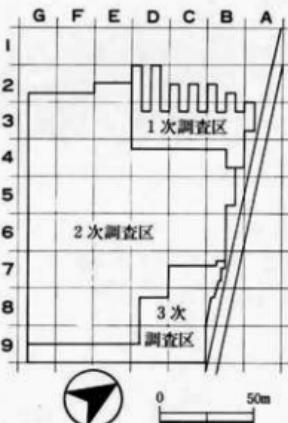
していたため、これを擾乱による天地返しと誤認したのである。その後の調査でこの土は、住居跡に限って認められる特徴的な堆積土であることが判明した。60年度に確認したものは、遺物集中13ヶ所（うち、1ヶ所は61年度調査に継続して、2号住居跡となっている）と、住居跡1軒である。早くに降雪があったため、12月7日、調査を打ち切った。調査面積も予定より縮小し、3,200m²を完了するのみであった。

(2) 昭和61年度調査の概要（第2次調査）

本年度、当用地の開発計画であった栗津運動公園整備事業にかわって、短期大学を建設する計画が打ち出され、昭和61年6月に調査面積や調査期間について、教育委員会と小松短期大学設立準備委員会とで協議をおこなった。その結果、大学建設用地33,000m²のうち、試掘調査によって特に遺物の集中がみられたB地区に関しては、計画がグランド用地であったため、盛り土施工によって現状保存することとした。このグランド用地15,263m²と、昭和60年度調査完了したA地区の3,200m²を除いた14,537m²を、昭和61・62年度の2ヵ年にわたって調査することとした。

調査は、昭和61年7月3日からA地区の8,500m²を対象として開始した。調査方法、遺構番号、グリッドの設定に関しては昨年度に継続するかたちを取った。A地区は比較的遺物の集中が見られたことから、全面調査を前提として、本年度と次年度の調査区域を重複で全面表土除去した。グリッド杭打ち作業は㈱日本海コンサルタントに委託して実施した。調査は昨年度未完了だった区域から開始し、7月14日から2号住居跡及び遺物集中箇所の調査を再開した。2号住居跡は昨年度に床面の検出はされていたが、再度、床面を精査し、ピット及び壁の立ち上がりを確認した。その結果、貯蔵穴状の大形ピット2基をもつ大形の住居跡であることが判明したが、北西側は16号遺物集中と重複しており、壁の立ち上がりは確認できなかった。また、住居跡の周辺に分布する遺物集中箇所は昨年度と本年度あわせて19ヶ所にのぼったが、いずれも壁の立ち上がりは曖昧で、柱穴、貯蔵穴等の遺構に伴うようなピットは確認できなかった。以上のように、昨年度調査区域から周辺を拡張するかたちで、調査を進めてきたわけだが、遺物集中の範囲は調査区域の北東側に限定され、南西側にゆくに従って、遺物の分布が希薄になる状況が看取できたため、当初の調査区域を拡張して、11,137m²を11月20日までに完了した。

昭和62年1月に、小松短期大学設立準備委員会より昭和62年度工事着手区域の変更が出され、新たに500m²の調査を昭和62年2月18日より開始した。比較的遺物の分



第4図 A地区年次別調査区域 (1 / 3,000)

布が希薄であり、遺物の集中も見られず、3月7日に追加分の調査を完了した。

(3) 昭和62年度調査の概要（第3次調査）

昭和62年10月5日から2,900m²を対象として開始した。調査方法は初年度の方法を踏襲するかたちをとった。調査は南側から進めて行ったが、調査区域の北西側で遺物の集中が見られた他は、分布は希薄で、1次、2次調査と同様の分布を示していた。遺構確認作業は遺物が集中する範囲を重点的に行った。その結果、1軒の竪穴住居跡（3号住居跡）と3ヵ所の遺物集中を検出し、昭和62年12月5日に調査を完了した。

本年度を以て、小松短期大学建設に伴う念佛林遺跡発掘調査は完了した。

念佛林遺跡発掘調査協力員名簿

（第1次調査）入口スズ子、笠谷キヨ、軽海清司、河岸洋美、川岸武雄、川原喜一、北出栄作、木本ツヨ、古野ソト、高藤ひとみ、田渡ユキ、中里一郎、中村伊佐次、原田伊作、松原脩一、

宮西鈴枝、宮本民子、室谷明子、山口あきみ、山田キミエ、山田金次郎、山西一栄、

（第2次調査）伊藤政男、大西助正、奥 義秀、笠谷キヨ、上出利男、軽海清司、川島 誠、川原喜一、岸本ハルエ、北方夏子、北口藤松、北口とめ、北出外雄、北村英子、雲井愛子、雲井章子、近藤なつ子、白江静子、園 理吉、築田武治、中江紗代子、中里一郎、中田 繁、中田重作、野口十一、野口スズ子、原田伊作、平桜康晴、舟津邦彦、牧 緯、丸田礼子、水元城三郎、南 貞子、南口 清、南出吉男、宮西鈴枝、宮西邦代、室谷明子、山口あきみ、山口真智子、山下キミ子、山下政直、山田 朗、山田キミエ、山田金次郎、山本直行

（第3次調査）大西助正、奥 義秀、表 孫藏、唐木一郎、軽海清司、川原喜一、木本ツヨ、土肥久雄、中坂四郎、中里一郎、中塙敏雄、中田 繁、中出正一、原田伊作、水口利男、水元城三郎、南口 清、南出秀雄、宮崎太市、宮西鈴枝、山下政直

念佛林遺跡出土品整理協力員名簿

（昭和60年度）山口あきみ、山田キミエ、山田金次郎

（昭和61年度）久保田夏子、竹本裕子、広瀬 泉、松原脩一

（昭和62年度）浅野豊子、小野澄江、勝島栄蔵、小林なお子、小間博文、新谷由子、前田すみ子、村沢仁雄（以上石川県埋蔵文化財整理協会）
上野昌子、打田外喜代、江野直子、大上千秋、河合秀樹、佐々木美佳、土屋宣雄、中田智子、宮田佐和子

発掘調査及び整理作業は、以上の方々の御協力を得て完了しました。尚、残念なことに、第3次調査中に北口とめさんが、そして報告書作成中に野口十一さんが他界されました。謹んでご冥福をお祈り致します。

第III章 遺構

第1節 A地区

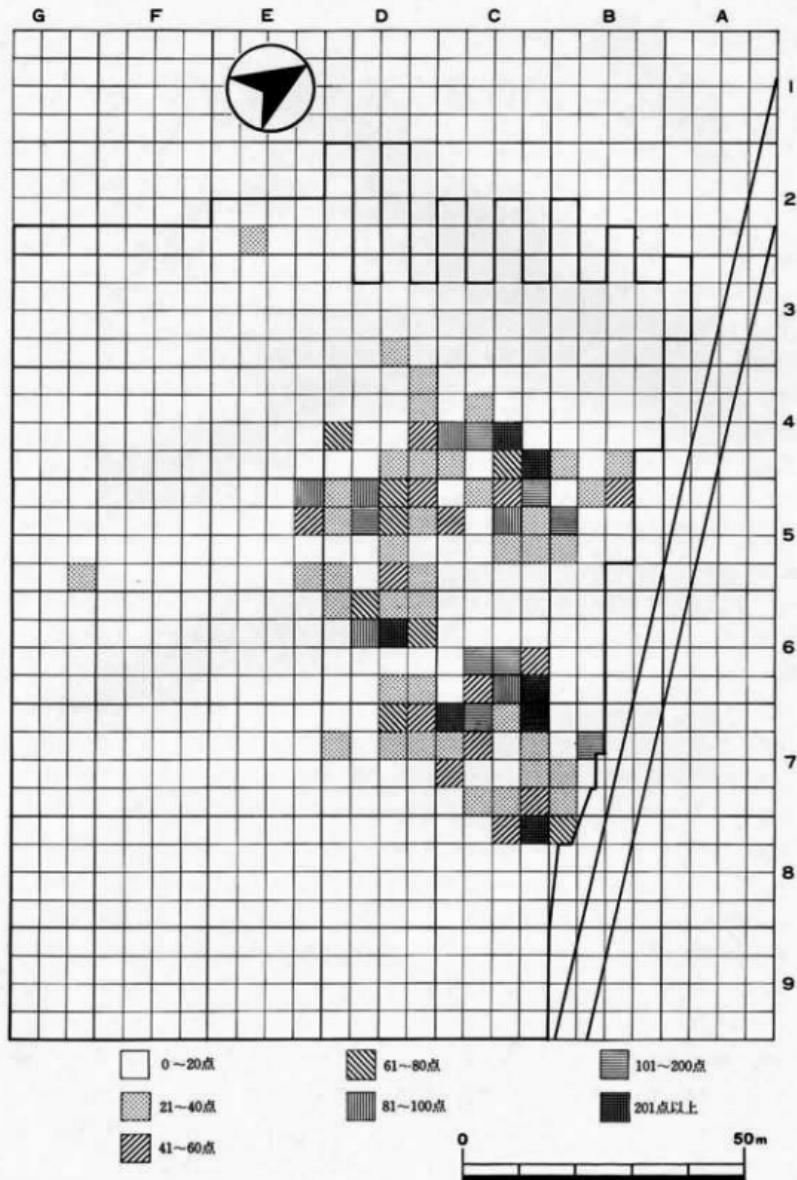
(1) A地区遺構分布の概要

A地区は、開発区域の北東部にあり、本遺跡の主要部を包括している。1・2ラインは埋立の施された谷地形部で、A3スパンでは、その谷部から枝分かれして東方向に向かって入りこむ小谷の存在を確認している。つまり、ほぼ台形を呈して張り出しているこの台地の北縁コーナーに近い平坦面に位置している区域である。

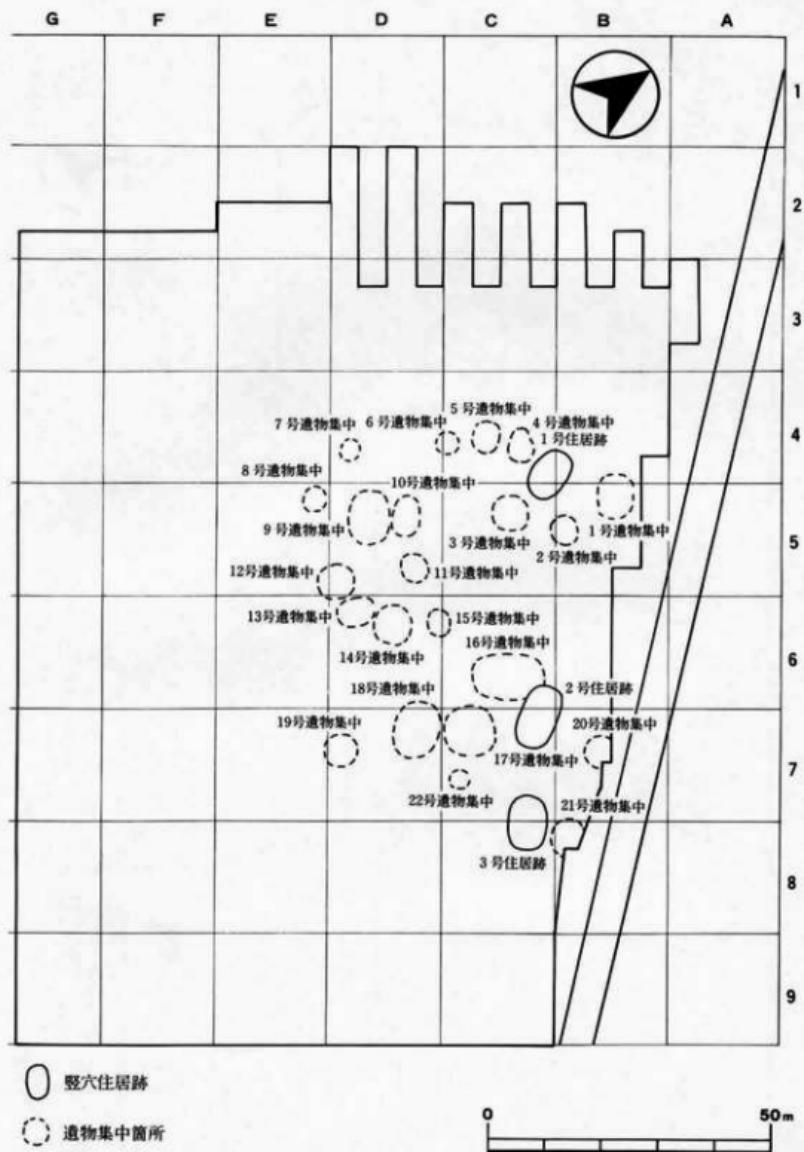
A地区の調査面積約17,700m²に対して、検出された遺構は竪穴住居跡3軒のみと、極めて乏しいものであった。しかしながら、包含層遺物の分布範囲は広域に及んでおり、尚かつそれらが、ある一定のまとまりをもって偏在する傾向が把握された。第5図は5mグリッド単位による全体の遺物分布密度図で、巨視的な分布の疎密がかなり明解に表現できている。遺物が集中するのは、調査区北東半の中央部で、E・F・Gラインでは空白地が形成されている。この空白地に隣接するB地区は、試掘調査のみの保存区域であるが、北東半部に匹敵するような濃密な遺物分布の存在が確認されている。従って、この台地上には、巨視的にみて少なくとも二つの集落単位が存在していると予想されるのである。さて、A地区的遺物密集区域をもう少し細かくみると、その中央部にもまた空白地が存在しており、分布の形状が馬蹄形を呈していることが判る。また、この馬蹄形分布内の密度は、決して一様というわけではなく、かなりのばらつきが見られる。実際のドットマップから微視的な遺物密集区域を概念化すると第6図のようになる。この遺物集中地点は、現地調査の段階すでに把握していたものであり、住居跡と同様の扱いで、各集中ごとの遺物の取り上げを行ったものである。確認した遺物集中は合計25ヶ所で、その内3ヶ所が住居跡内覆土遺物ということになり、最終的には、1~22号遺物集中と1~3号住居跡という構成になっている。

住居跡の位置は、調査区北東端寄りで、B・Cライン境界線上付近に三軒とも並ぶ位置にある。馬蹄形集中域内での位置としては、1号住居跡が北端部を、2・3号住居跡が空白部を介して南東端部を占有している。各住居跡の主軸は北北東方向にむけてほぼ一致しており、形態的にも、長楕円形を呈する類縁性に富んだものとなっている。

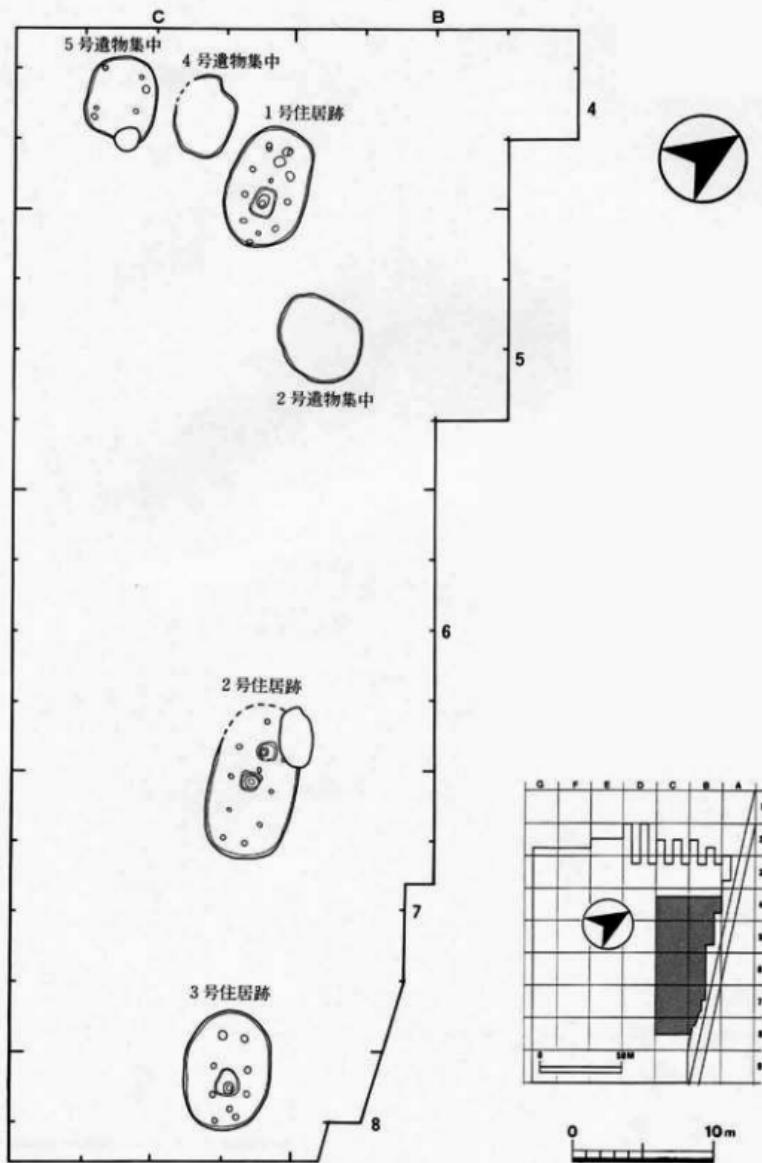
調査区の東側は舗装道路となっており、また、それを挟んだ向かい側は、雑草の繁茂する荒れ地となっているため、表面採集は無理であるが、当然、遺物分布の延長が予想されよう。



第5図 遺物分布密度図 (1 / 1,000)



第6図 A地区遺物集中概念図 (1 / 1,000)



第7図 A地区住居跡・豎穴状造構を伴う遺物集中分布図（1 / 400）

(2) 1号住居跡

A地区北西寄り4C-16, 5C-4, 4B-13, 5B-1にかけて位置し、北側に浅い埋没谷を有する台地縁辺部に近い平坦面で検出された。主軸方向はN-45°-Wで、8.6×5.6mの楕円形を呈している。プラン確認作業による壁立ち上がりの消失を防ぐため、上層において土器集中を確認した時点でセクションベルトを設定し、掘り下げを行った。このため、北西側の壁では、地山への掘り込みは5~10cmにすぎないが、漸移層及び黒褐色土中でも最高で20cmの立ち上がりを検出している。一方、相対する南半部では、壁高は概して低く明確にし難い部分も多かった。

土層の堆積状況は、ほぼレンズ状の自然堆積を示しており、最上層には、他の住居跡に共通する、遺物を多量に含む赤みを帯びた淡褐色土の堆積がみられた。

床面の把握は比較的容易で、貼床はないものの、北西半の主柱穴に囲まれた部分を中心に堅くブロック化した地山面として捉えることができた。

壁周溝状の浅いくぼみを一部で検出しているが、いずれも不明瞭で、積極的には評価できない。掘り方に起因するもので、本来は持ち合わせていなかったように考えられる。

検出されたピットの総数は21で、内主柱穴と思われるものはP2~P10の9本である。この奇数本の主柱が長軸を主軸として相似形の配置を示している。従って、北西妻側の柱穴は主軸を挟んで対峙する一方、南東妻は主軸上にのる構造を持っている。柱穴の形態は、総じて均一の属性を持っており、主柱としての認定は比較的容易であったと言える。上面部は浅い漏斗状となり、柱径と掘り方径とがほぼ一致するかのように、約20cmの均等径をもって筒状に下底に至る。深さは50~60cmと変異は少ない。殆ど例外なく柱根周囲には、根固めのためと思われる良く締まった暗黄褐色土の堆積が認められる(8層)。下底は総じて堅く締まっている。その他のピットでは、P12・P15・P21が相似した形状と深さを持っているが、本住居の建て替え等を示すには、いまひとつ根据に乏しい。なかでもP21は、妻側主柱としての認定も可能な位置にあるが、属性的にP6の方を選定したい。P1は、他の住居にも共通する内部施設で、弥生時代の特殊ピットを想起させる。貯蔵穴風の穴と称して該期の特徴的なものと位置付けられているが、本住居では内部への多量の剥片類の混入がみられる。形態は、まず、1.4×2mの長方形の浅い掘り込みを住居主軸に合致させるように一段形成した後、ほぼ中央部に不整形を呈する深さ80cmのピットを穿たるもので、主軸上北西寄りの中位にテラスをもっている。このテラス部分の覆土は、掘り方埋土様で堅く緻密であった。しかし、主要部の覆土は自然堆積状態を示し、柱穴とは性格の上で区別されよう。また、このピットの周囲にいくつかの小ピットが配されているが、関連するものかもしれない。特に住居中央のP18は、浅くて小規模ではあるが、内部は非常に堅く叩き締められており、ピット北西側周辺の床面は焼痕が著しい。

南西側長辺の中央部に張りだし状の土坑が検出されているが、本住居との同時性については、確信はもてない。堆積土の状況では、やや異質な感をもっており、底部の状態も一様ではなく不整である。

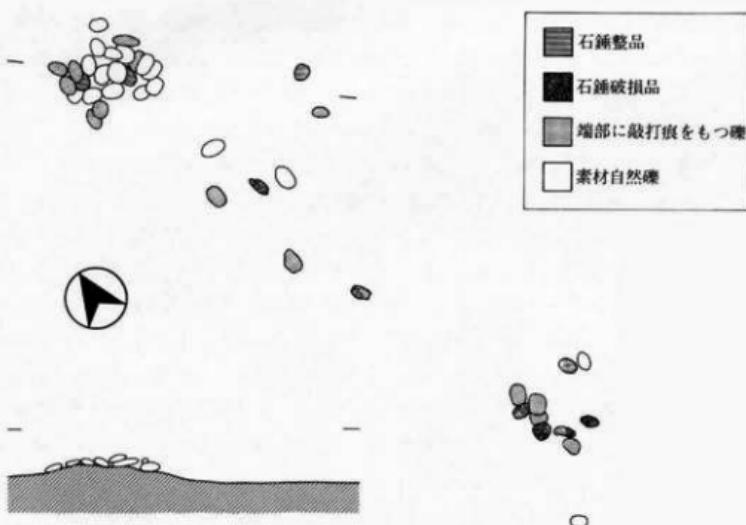
炉は持たないが、北西半中央部の主柱四本に囲まれた位置で、強く焼けた床面を検出している。

[遺物の出土状態]

第12・14図でみるように、上層部で多量の土器と石器や、その石器にかかわる剝片類を検出している。垂直分布とその接合関係で見るかぎり、レンズ状凹地への廃棄を伺わせる状況が看取される。従って、床面との間には、壁寄りで遺物の希薄な間層を把握できるが、中央部付近では、廃棄遺物が床面上直上に近いレベルに存する傾向にある。作団の関係上、床面上直上遺物でも実測されなかったものは、本図でドットとして表示せざるを得なかったが、石錘素材の多くと完成石器が床面上直上の遺棄状態で検出されており、明確なレベル差を認定することができる。

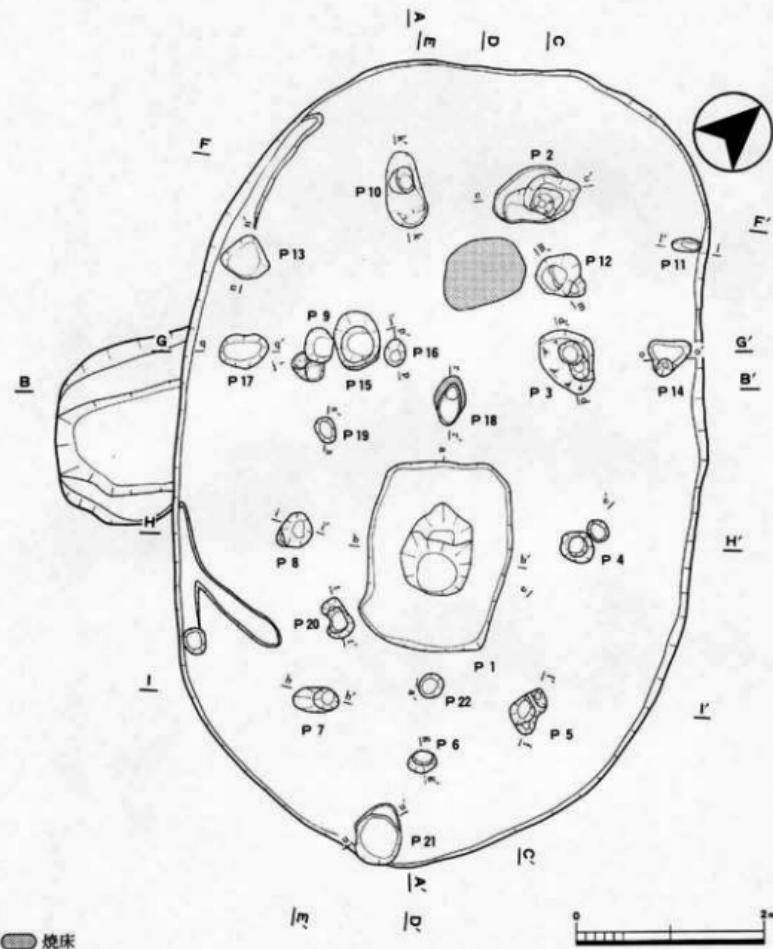
ほぼ遺棄状態を示すと思われる床面上直上遺物が検出された。土器は、殆んどが完形復元可能な個体で存在している。第13図で見るように、1・4・151・169・189の各個体は横転したままの状態を、227の浅鉢は伏せられた状態をそれぞれ維持している。一方、石器では、西側主柱穴の外縁で、石錘未製品の集積地点が検出されている。個別の属性ごとの分布は第8図に示したとおりであるが、敲打痕を有する確に素材としての位置付けをなすこと（第VI章第2節参照）により、破損品の位置を含めて場の機能がより明確に示される。また、剝片石器製作に伴う剝片類は、P1周辺から東寄り床面に多く分布しており、床面土の水浄選別によっても数百点のほるチップ類を検出した。ここにも一つの機能的場が設定されそうである。

以上の床面上直上遺物の分布状態を概観したとき、柱穴近くへの偏在傾向が指摘されそうである。住居内



第8図 1号住居跡内 石錘集積状態 (1 / 20)

行動を考えた場合、デッドスペースが柱付近にあったがゆえの配置ではないかという推測も成立しよう。他の住居では見られないこのような遺棄状態は、本住居の廃絶過程の特殊性を考えるうえで、多くの問題点を含んでいるものと言えよう。



第9図 1号住居平面図 (1 / 60)

土層柱

1層：暗褐色土。強く赤色を帯び
る。軟質、透水多

量含有。
2層：深褐色土。
若干砂利を含び
る。透水多量含有。

3層：暗褐色土。
透水多量含有。

4層：黒褐色土。
硬質鐵石、中央
付近で鉄質を含び
る。

5層：黒褐色土。
4層よりやや明
るい。若干砂質を
含びる。

6層：暗褐色土。
風味強い、硬質
鐵石。

7層：黒褐色土。
細粒。

8層：黒褐色土と黃土ブロックの混
合層。

9層：黒褐色土。
深く十む。

A

A'

B

B'

C

C'

D

D'

E

E'

F

F'

G

G'

H

H'

I

I'

J

J'

K

K'

L

L'

M

M'

N

N'

O

O'

P

P'

Q

Q'

R

R'

S

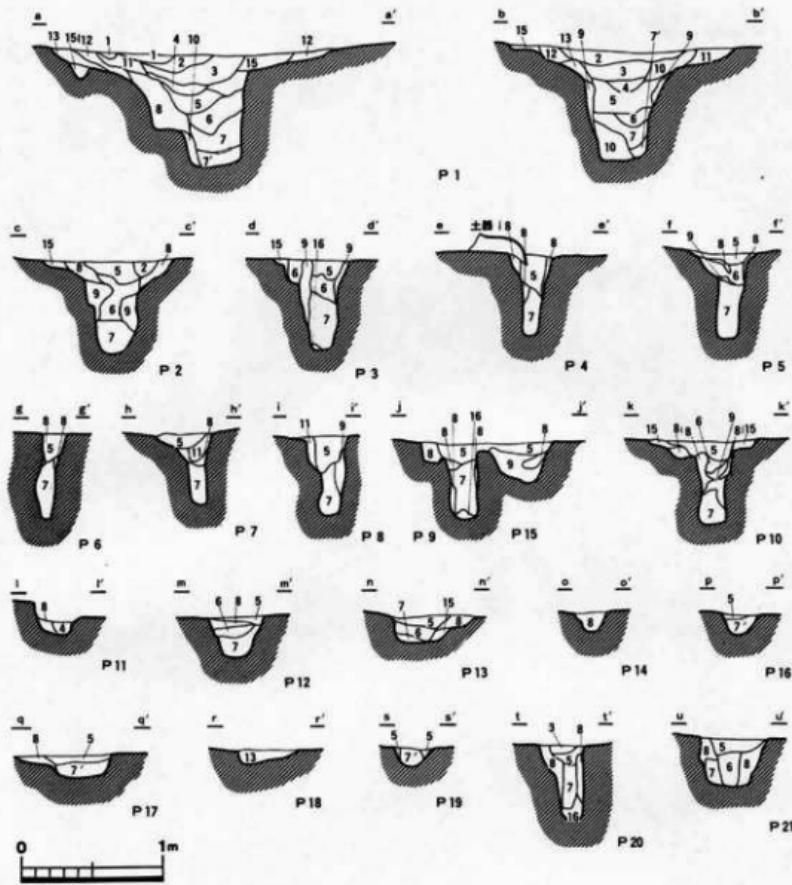
S'

T

T'

U

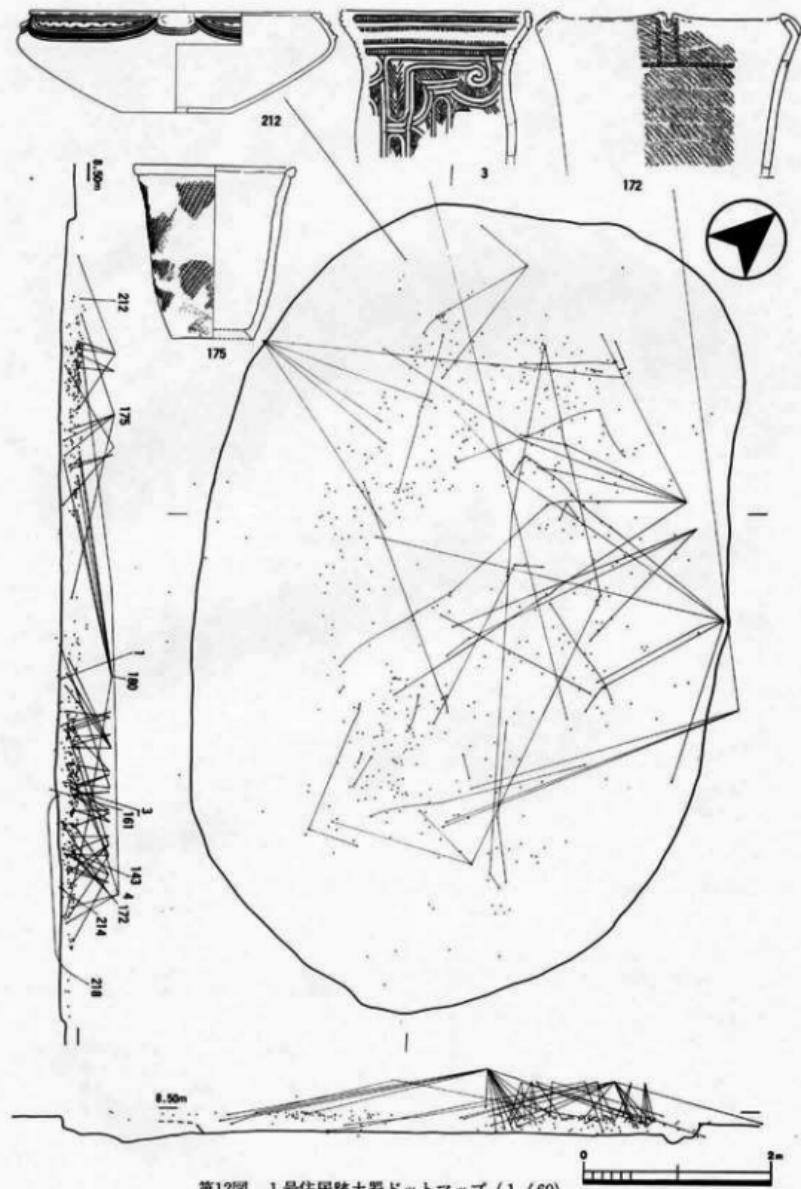
U'



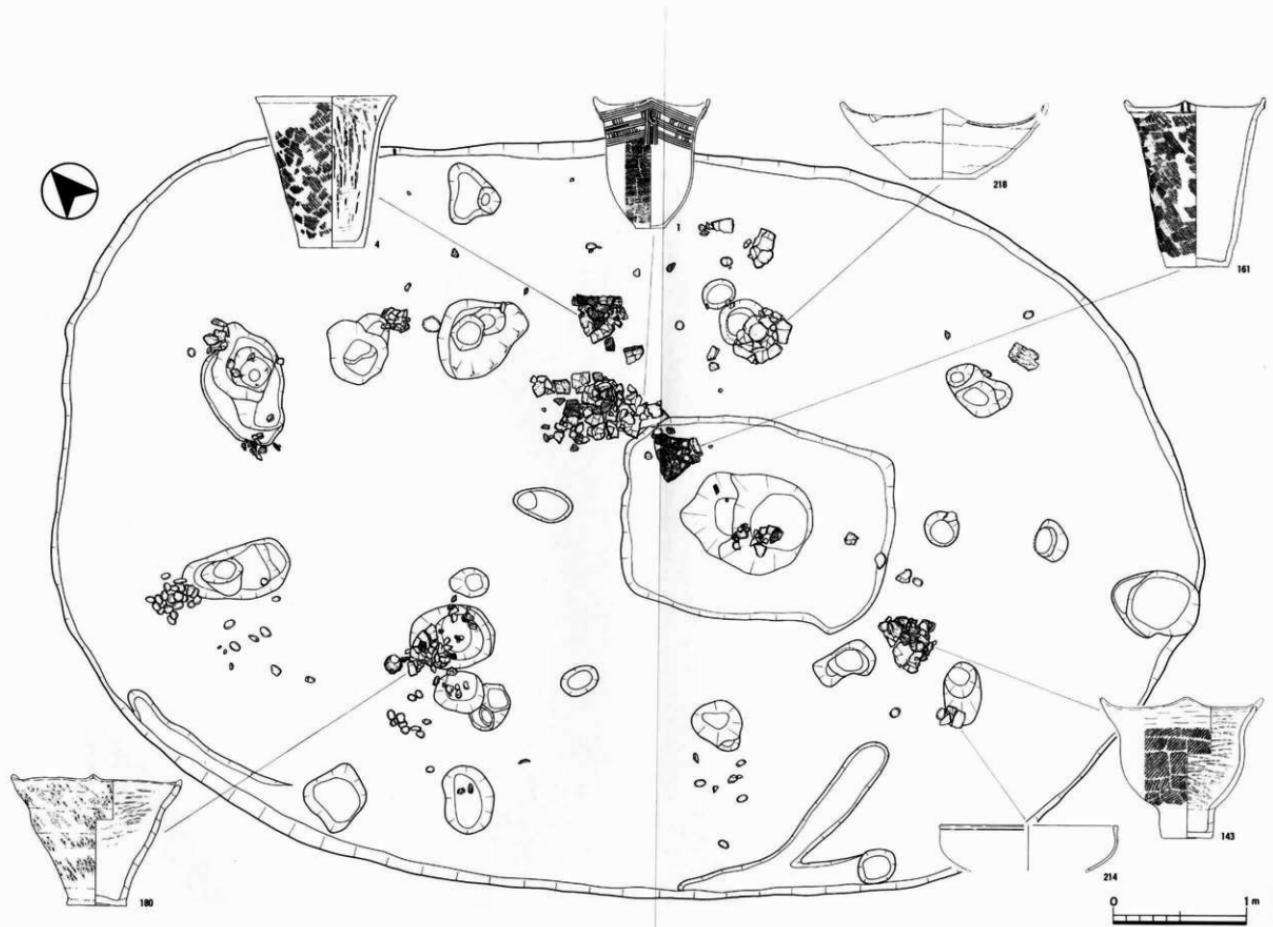
土層 註

- | | | | |
|------------|------------------------|-------------|-----------------------------|
| 1層：淡褐色土 | 赤味を帯びて、やや軟質。 | 9層：暗黃褐色土 | 8層と同列把握。黄土粒子をより多く含有。 |
| 2層：黒褐色土 | 3層より淡い、1層との中間層。 | 10層：暗褐色土 | ややくすんだ色調。 |
| 3層：黒(緑)色土 | [他色粒を殆ど含まず、真黒に近い。 | 11層：黒褐色土 | 黄土ブロック(1~3mm) 多量含有。粘性高み、軟質。 |
| 4層：黒褐色土 | 黄土粒子微量含有。 | 12層：淡褐色土 | 淡く灰色を帯びる。 |
| 5層：暗褐色土 | 黄土ブロック(5~10mm) 少量含有。 | 13層：淡灰黃褐色土 | 若干砂質。硬質緻密。 |
| 6層：(黒)褐色土 | 黄土ブロック(2~3cm) 少量含有。 | 14層：暗黃褐色土 | 黄土粒子多量含有。砂質。硬質緻密。 |
| 7層：黒褐色土 | 黄土ブロック(2~3cm) 少量含有。 | 15層：暗(黄)褐色土 | 黄土粒子・ブロック多量含有。硬質。 |
| 7'層：黒褐色土 | 7層より黒く、黄土ブロック減少。 | 16層：暗(黄)褐色土 | 黄土粒子・ブロック多量含有。硬質。 |
| 8層：暗(黄)褐色土 | 黄土粒子・ブロック(1~2cm) 多量含有。 | | |
| | P 1のみ燒土・カーボン少量含有。 | | |

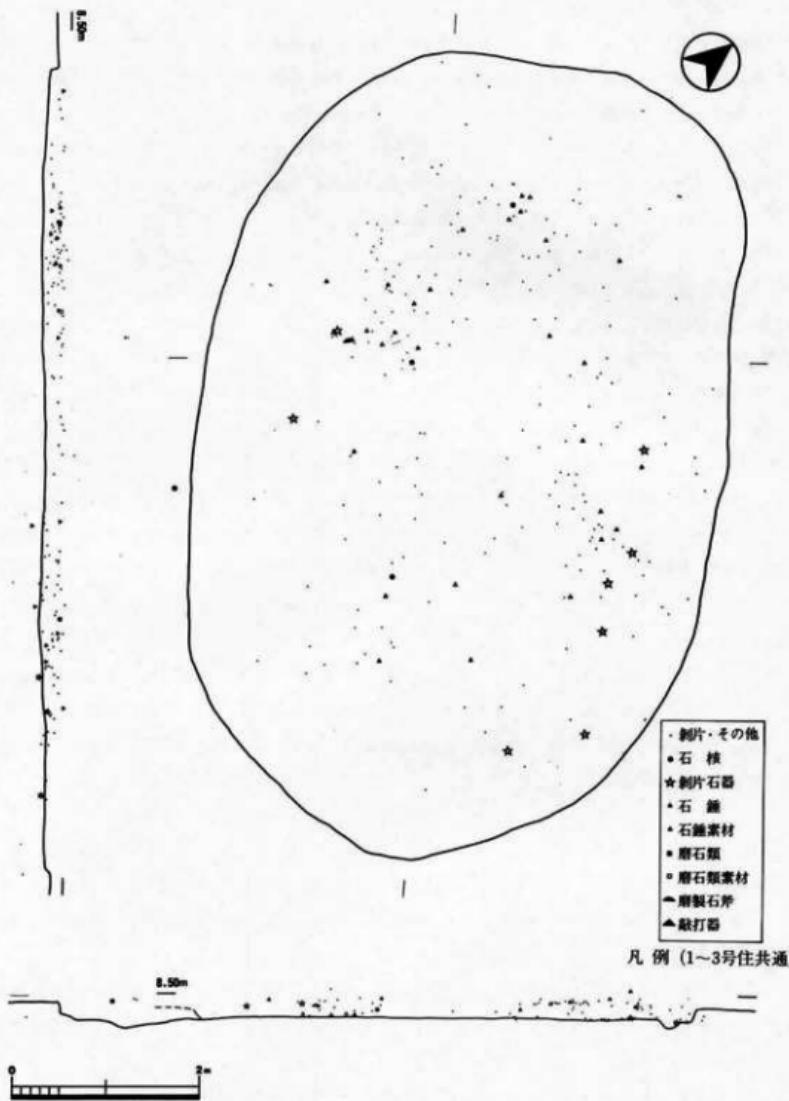
第11図 1号住居跡ピットセクション図 (1 / 40)



第12図 1号住居跡土器ドットマップ (1 / 60)



第13圖 1号住居跡床面遺物出土状況図 (1 / 30)



第14図 1号住居跡石器ドットマップ (1 / 60)

(3) 2号住居跡

1号住居跡から南東へ40m行った6C-16、7C-4付近に位置する。主軸方向はN-44°-Wを示し、1号住居跡とほぼ同一の主軸方向を示す。規模は、北西側が16号遺物集中と重複しているため推定値ではあるが、長軸で10.9m、短軸で6.1mを測り、楕円形プランを呈する。

床面の状況はP5・6・8・9に囲まれた部分でブロック状に堅くしまっていたが、他は軟弱な地山であった。また、壁の立ち上がりは不鮮明で、地山への掘り込みが5cm程度と浅く、北西側が重複によって壁を検出できなかったこともあわせて、プラン確認には困難をきたした。

検出できたピットの総数は44を数えたが、うち木痕状のものを取り除いて住居跡に伴うと思われるピットは20であった。主柱穴と思われるものはP3～P10の8本で、P4～P10は深さ50～70cmを測るが、P3では35cmと浅い。形態は上端径で40～55cm、下端径で15～30cmとややすばまったもので、ピット内覆土は柱痕状に入り込んだ黒褐色土と根固め状の暗黄褐色土を、ほぼどのピットからも検出することができた。柱穴の配置は北西妻と南東妻で主軸にのせ、その間を主軸を挟んで対峙する形態を示す。このほかに、P13・14・19が主柱穴と似た形態と覆土を示す。これらのピットはP6と結べば主軸をやや北側に向けた方形の配列を示すが、住居の建て替えによるピットなのか、他の構造が重複していたのかについては、判断に難しい。P1・2は柱穴とは覆土、形態の異なるやや大型のピットで、ほぼ主軸上に2つ掘られている。P2は1号住居跡のP1と同じ形態をもつもので、上部の浅い掘り込みで1.3×1.3m、中央のピット径で1m、深さ50cmの規模をもつ。P1は1.4×1.3mの不整方形の浅い掘り込みをもち、その左端に径65cm、深さ45cmの方形に近いピットをもつ。覆土は1号住居跡のものと同様の特徴をもつもので、性格も同じものと考えたい。

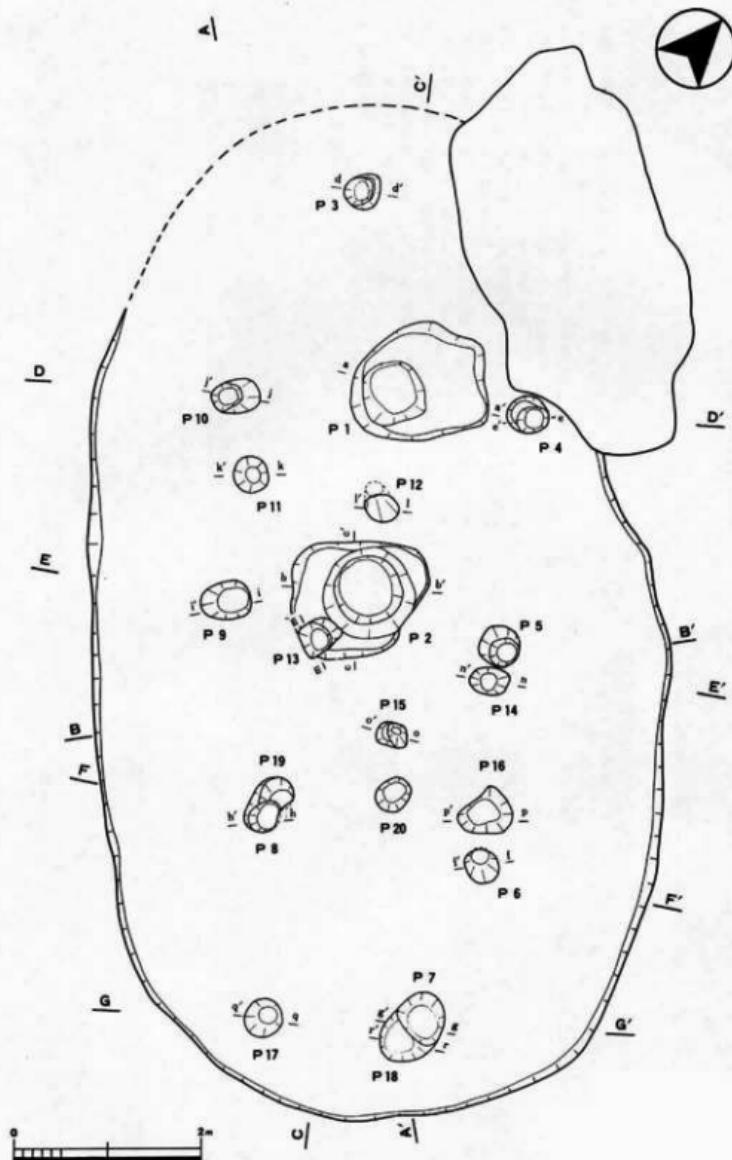
遺物出土状態については、第18・19図で示したとおり、土器はP2から南西側に集中する傾向が見られ、石器類は主柱穴間に、特にP1とP2の間で集中する傾向が見られる。しかし、断面形で見るといずれもレンズ状の堆積を示しており、中層と床面上とが接合関係にあることを考えた場合、2号住居跡廃棄後の遺物と考えることができる。

(4) 3号住居跡

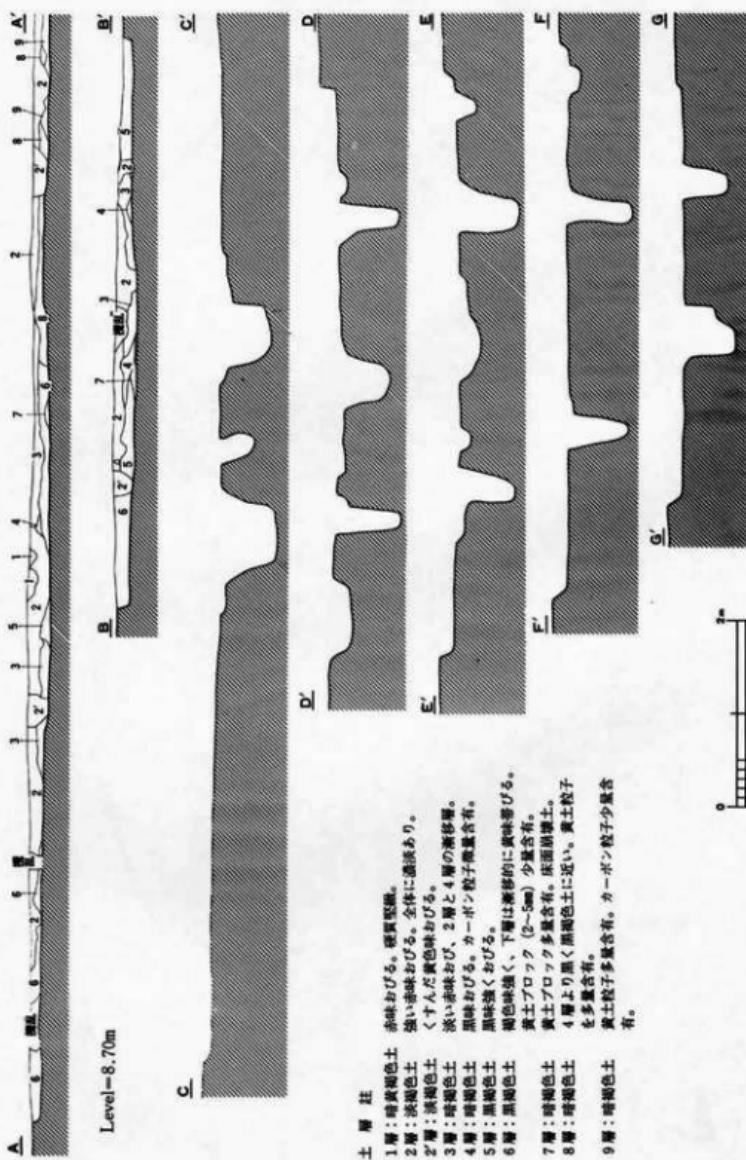
3号住居跡は2号住居跡より南東へ15m行った、7C-16、8C-4に位置する。主軸方向はN-53°-Wを示し、1・2号住居跡よりやや西側にふる。規模は長軸で8.4m、短軸で6.2mを測り、楕円形プランを呈す。

住居内覆土は比較的擾乱のはいりが少なく、明瞭にレンズ状の堆積が看取できる。遺物の出土状態も、この覆土の堆積の仕方に呼応するかたちで見られ、住居跡廃棄後の遺物の流れ込み、または、遺物廃棄として捉えられるものである。

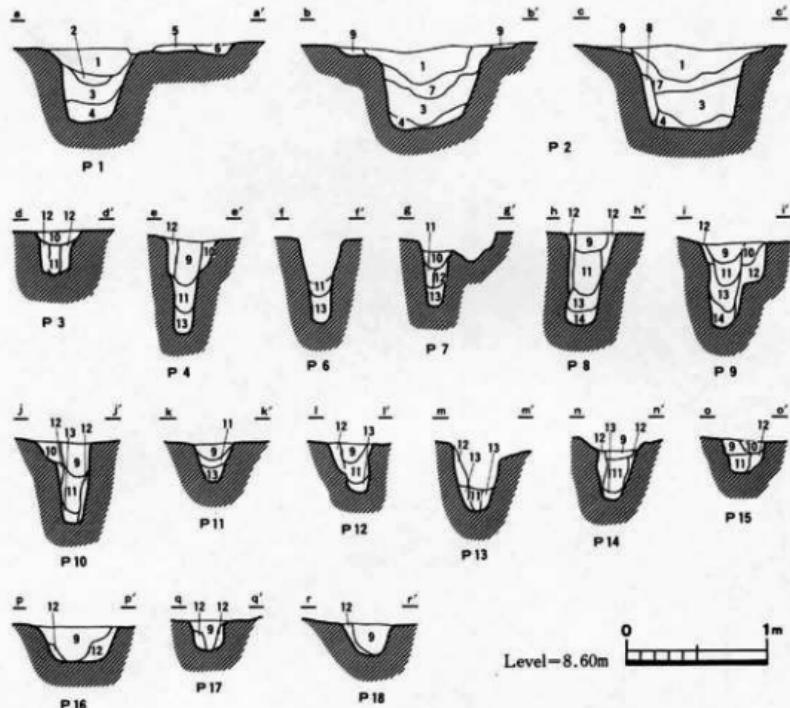
住居跡の地山への掘り込みは浅く、深いところで10cm、浅いところでは2cm程度であり、壁の大半を黒



第15図 2号住居跡平面図 (1 / 60)



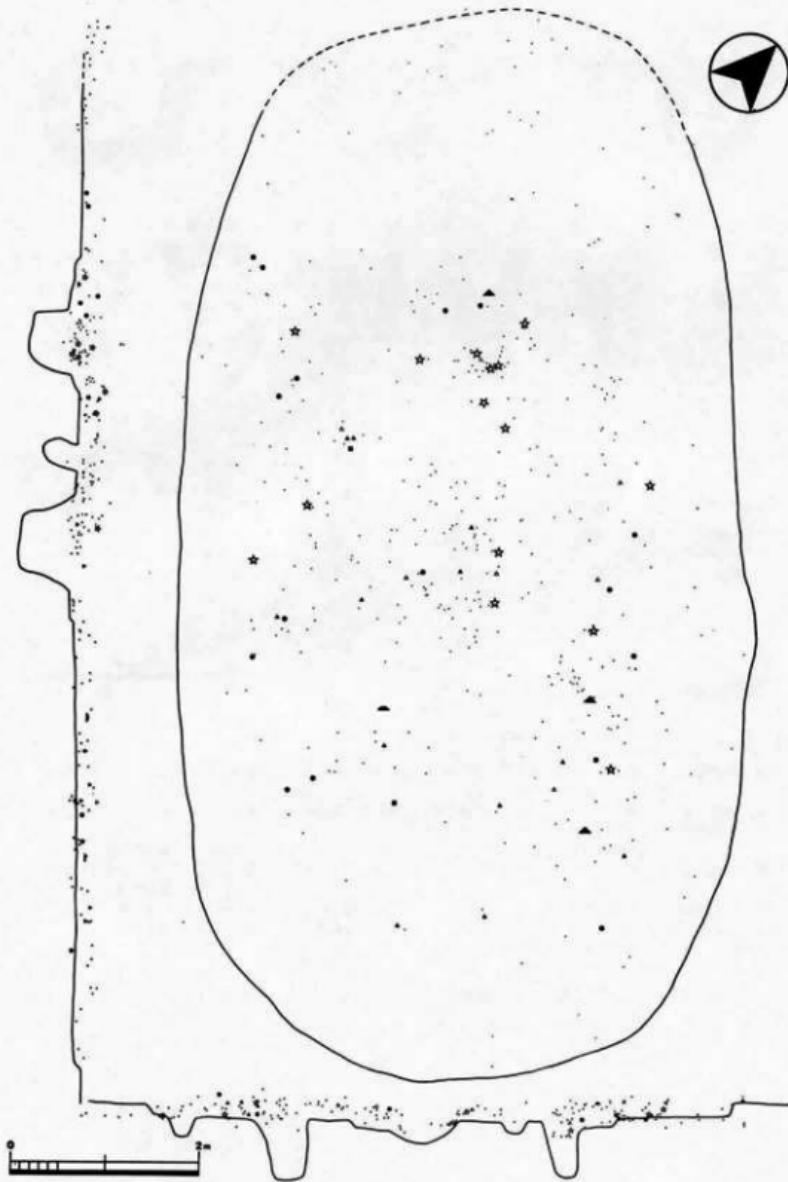
第16図 2号住居跡土層セクション・エレベーション図 (1 / 60)



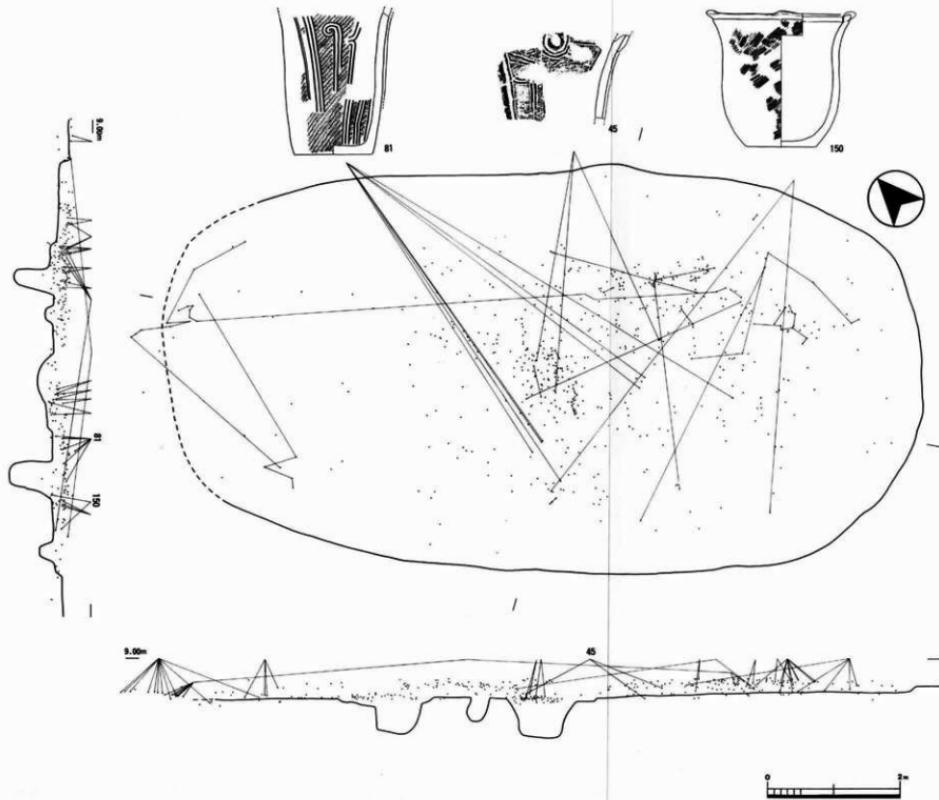
土層注

1層：黒褐色土	黄土粒子・褐色土粒子・カーボン 粒子微量含有。	8層：暗褐色土と暗黃褐色土、黄褐色土ブロックが混在 した土層。	
2層：黒褐色土	黄土ブロック(1~3cm)が多量混在。	9層：黒褐色土	黄土微粒子・カーボン粒子少量含 有。
3層：暗褐色土	黄土粒子(1~5mm)・カーボンブ ロック通有量含有。	10層：暗褐色土	黄土粒子(2~5mm)通有量含有。
4層：暗(黄)褐色土	黄土粒子・カーボン粒子通有量含 有。	11層：暗褐色土	黄土ブロック・褐色土ブロック・ カーボン粒子通有量含有。
5層：(暗)黄褐色土	硬質緻密。	12層：暗(黄)褐色土	黄土ブロック多量含有。
6層：暗褐色土	硬質緻密。	13層：暗黄褐色土	カーボン粒子微量含有。
7層：暗(褐)色土	黄土粒子・カーボン粒子少量含有。		

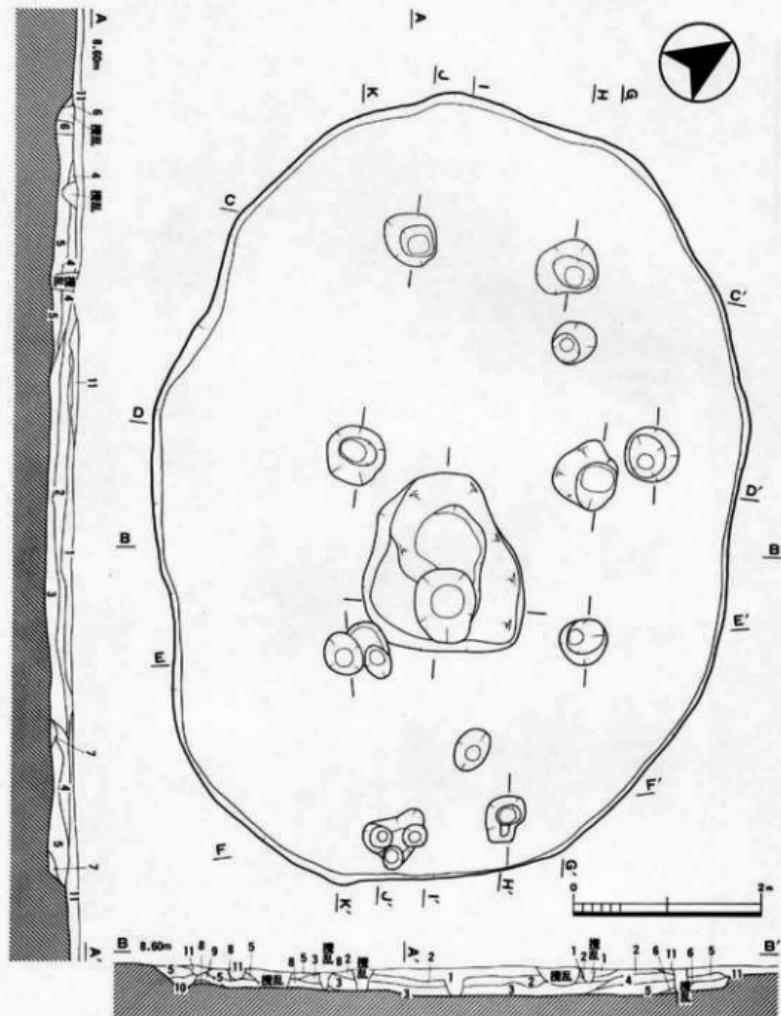
第17図 2号住居跡ピットセクション図 (1 / 40)



第18図 2号住居跡石器ドットマップ (1 / 60)



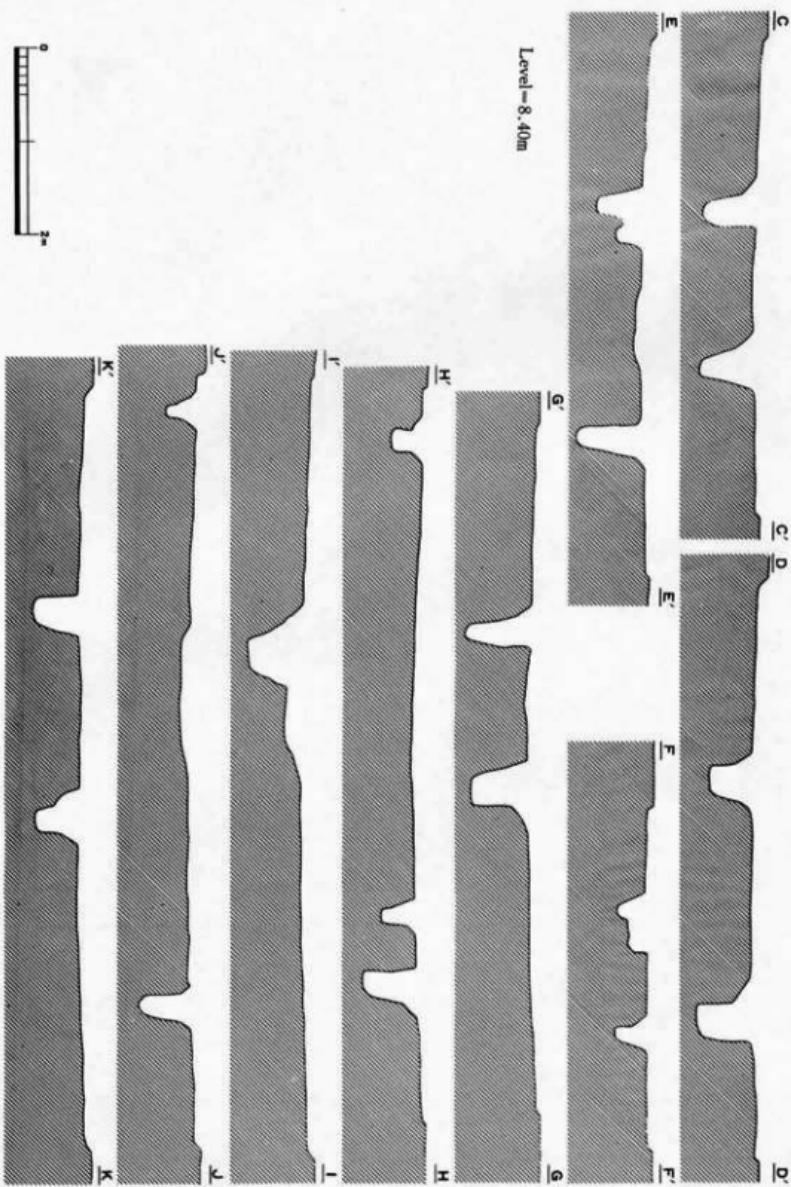
第19図 2号住居跡土器ドットマップ (1 / 60)



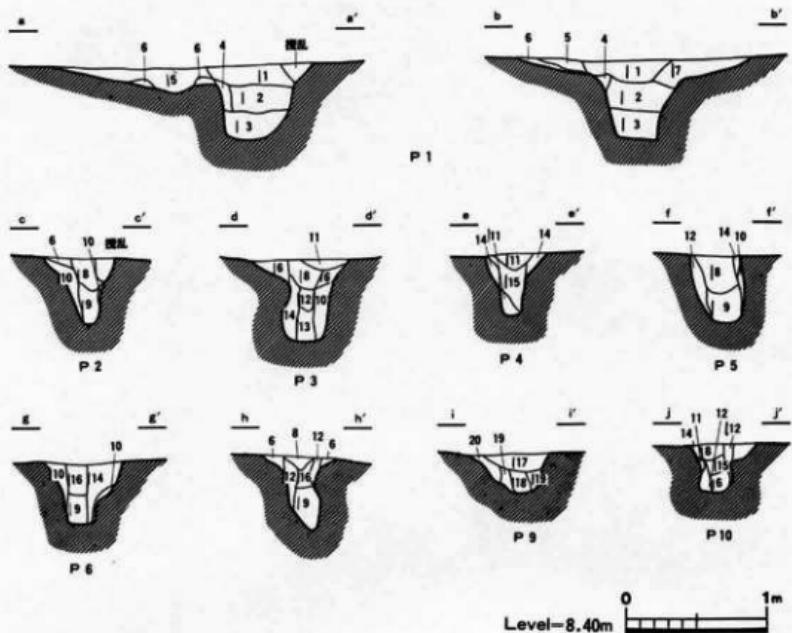
土層 註

- | | | | |
|------------|------------------|-------------------------------|------------|
| 1層：(暗)褐色土 | 遺物多量含有。 | 7層：暗黃褐色土 | 黃土粒子多量含有。 |
| 2層：暗(褐)褐色土 | 遺物多量含有。 | 8層：暗褐色土中に暗黃褐色土が3対1の割合で混在した土層。 | |
| 3層：暗褐色土 | 黃土粒子・カーボン粒子少量含有。 | 9層：(暗)黃褐色土 | 暗褐色土が少量混在。 |
| 4層：暗褐色土 | 褐色味強い。 | 10層：暗褐色土 | 黃褐色土が多量混在。 |
| 5層：黒褐色土 | 黃土粒子少量含有。 | 11層：淡(暗)褐色土 | 硬質。耕作土。 |
| 6層：黒褐色土 | 黒味強い。黃土粒子少量含有。 | | |

第20図 3号住居跡平面・土層セクション図 (1 / 60)



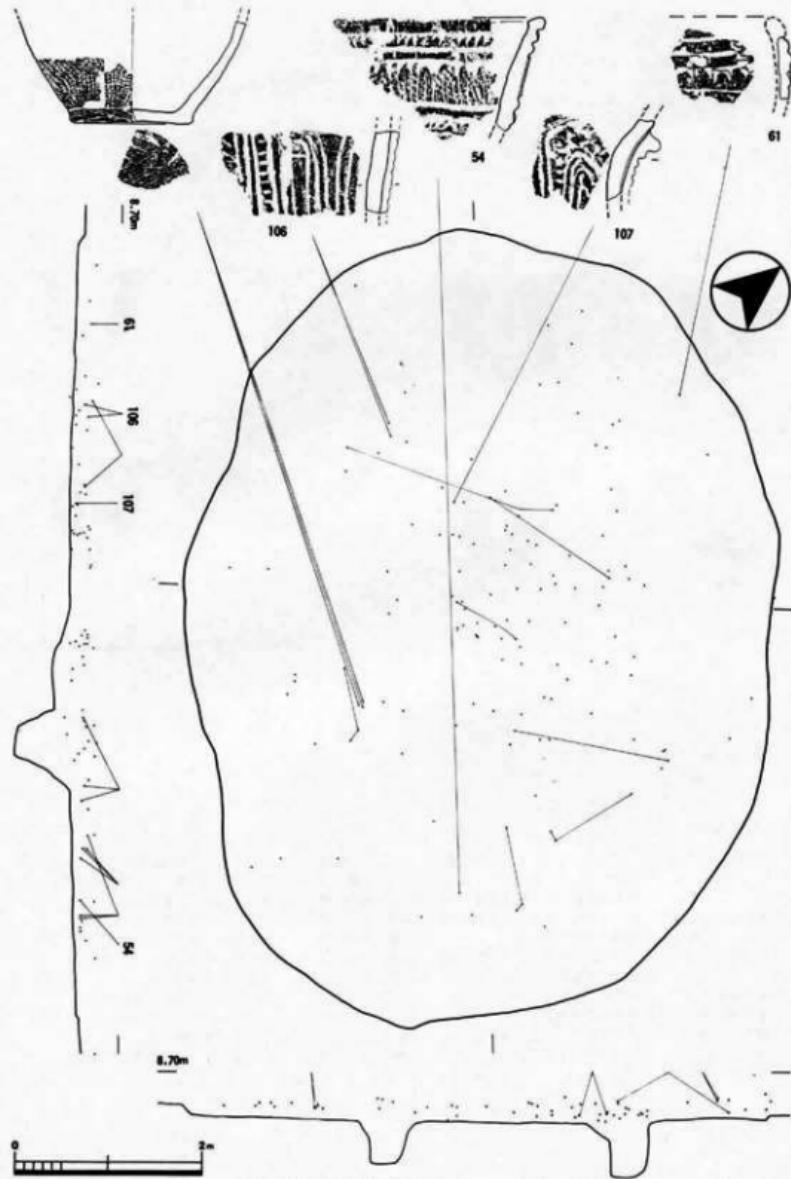
第21図 3号住居跡エレベーション図 (1 / 60)



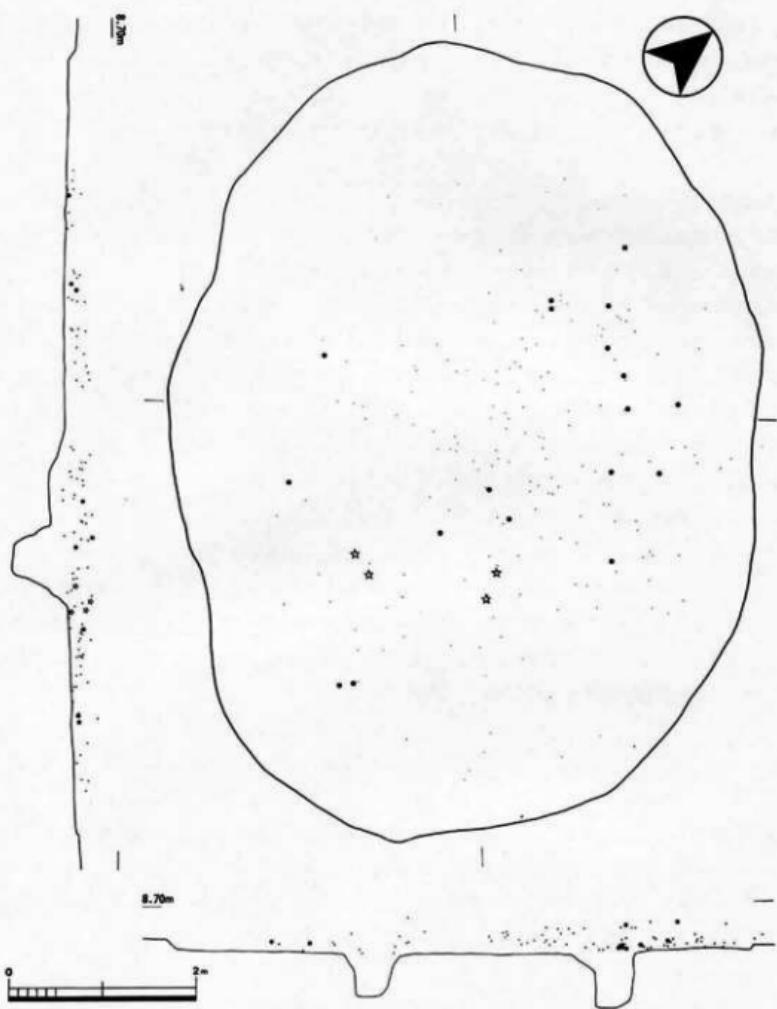
土層註

1層：暗褐色土	カーボン粒子・ブロック多量含有。	10層：暗(黄)褐色土	黄土ブロック多量混在。
2層：黒褐色土	褐色味有り。カーボン粒子・ブロ ック多量含有。黄土粒子含有。	11層：黒褐色土	褐色味有り。黄土粒子過有量含有。
3層：黒褐色土	カーボン粒子・ブロック多量含有。 黄土粒子多量含有。	12層：暗(黄)褐色土	黄土ブロック少量含有。軟質土。
4層：暗褐色土	カーボン粒子・ブロック多量含有。 黄褐色土多量混在。	13層：暗黃褐色土	黄土粒子・黒土粒子少量含有。
5層：暗褐色土	黄褐色土多量混在。	14層：暗褐色土	黄土粒子多量含有。
6層：暗黃褐色土	黄褐色土多量混在。	15層：黒褐色土	黄土粒子多量含有。
7層：暗褐色土	カーボン粒子・黄土粒子少量含有。	16層：暗褐色土	黒味強い。黄褐色土多量混在。
8層：黒褐色土	黄土粒子・黒土粒子少量含有。	17層：黒褐色土	黒味強い。黄褐色土少量混在。
		18層：黒褐色土	黒褐色土多量混在。
		19層：黄褐色土	黄色味おびる。黄褐色土多量混在。

第22図 3号住居路ピットセクション図 (1 / 40)



第23図 3号住居跡土器ドットマップ (1 / 60)



第24図 3号住居跡石器ドットマップ (1 / 60)

褐色土中で立ち上がらせている。

住居内で検出されたピットは13を数える。そのうち、柱穴と考えられるものはP 2～P 8で、南東妻で主軸上にのる他は、主軸に対峙するかたちで、2本づつ配置する。柱穴の深さは40～65cmと、ややばらつきが目立つが、形態は同じ特徴をもっており、1・2号住居跡に共通する。P 1は1.6×1.9mのおむすび形の深い掘り込みをもち、その手前側に径2mの円形のピットをもつ。このピットも他の住居跡と同様の形態を示すが、覆土中からの石片の出土は少なく、1号住居跡のそれとはやや異っている。

(5) 4号遺物集中

1号住居跡の西側に隣接して位置する。遺物の集中は5C-11付近に直径4mの範囲で分布している。この遺物集中には、深さ5cm程度の地山の掘り込みが見られ、4.6×5.6mの規模の不整形形を呈す。しかし、地山面が床状の硬い踏み固めをもっていなかったことや、柱穴や貯蔵穴状のピットが検出できなかつたことにより、住居跡として考えることは難しく、竪穴状遺構を伴う遺物集中として取り扱った。

住居跡の覆土は上層で赤味を強くおびた褐色土がのり、下層で黒褐色土が入る特徴を示しており、3軒の住居跡と共通するものである。

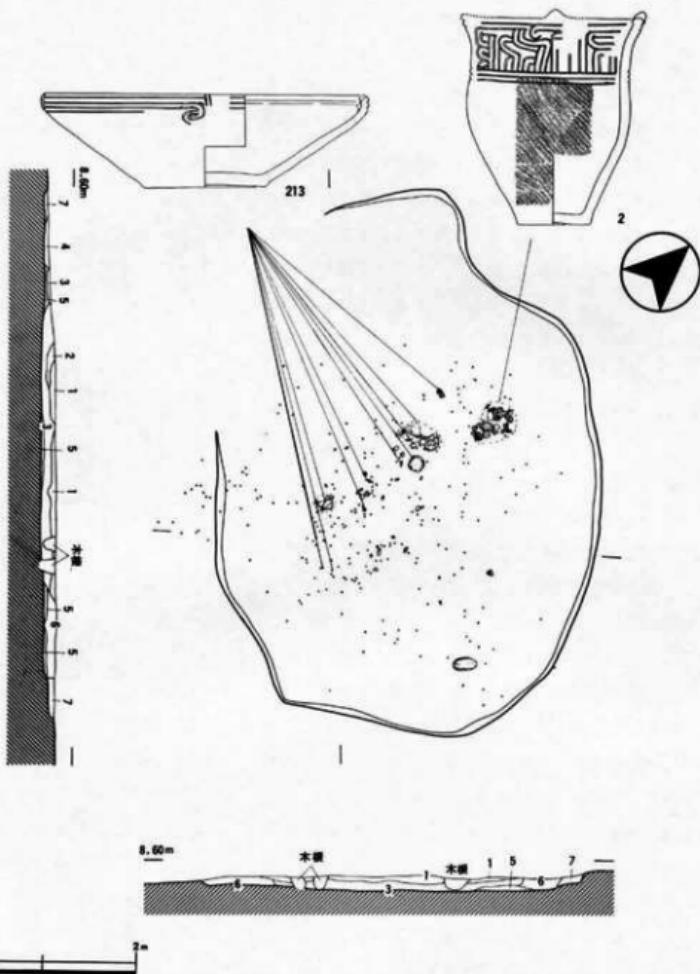
遺物の出土状態は地山面から覆土上層まで分布する。また、地山面には深鉢形土器と浅鉢形土器がほぼ完形で2個体、上から圧し潰された状態で出土している。遺物の接合関係については、遺構内での接合は少ないが、1号住居跡の特に上層遺物と接合されるものがあり、興味深い。

以上のような竪穴状遺構をもつ遺物集中は、このほかにも幾つか存在しており(1・2・3・5・6・9・10・14・16号遺物集中)、いずれも同様の竪穴状の深い掘り込みをもつ。特に1号住居跡を取り囲むようにして存在する2・4・5号遺物集中は、いずれも同様の覆土の堆積を示しており、地山直上で遺物が一括性をもって出土する点や竪穴プランの形態も比較的しっかりしていることなどから、生活の場としての性格を強くおびた遺構として考えられるのではないだろうか。

第2節 B地区

当地区の調査は昭和59年に実施した試掘調査のみで、発掘調査は実施していない。試掘調査の方法は、1.5m幅のトレンチを20mに1本の割合で東西に160m設定し、調査している。掘削は遺物包含層のレベルまでとしているため、この調査での遺構の検出は不可能であった。遺物の出土は各トレンチからあったが、特に3I・4IスパンおよびKラインからの出土が多く、かなりまとまりをもって出土していることから、遺構の存在が予想される。

3I・4Iスパン出土の遺物は、当遺跡の中では比較的古い様相をもった土器が多く、ここにもう一群集落を設定できれば、同じ台地上で当遺跡の南側に存在する念佛林南遺跡(昭和59年度～昭和60年度発掘調査、縄文時代中期前葉の遺構存在)との関連から興味深い。また、3Jスパンから土偶が出土している。



土層 誌			
1層：淡褐色土	赤味を強くおび、明るい。	5層：暗褐色土	黄土粒子・ブロック少量含有。小ブロック化している。
2層：暗褐色土	やや赤味をおび、くすんだ色。	6層：暗褐色土	褐色味強く、黄土粒子微量含有。
3層：黒褐色土	黒味強い。	7層：暗(黄)褐色土	黄土粒子多量含有。黄土ブロック含有。
4層：黒褐色土	濁った色。黄土ブロック含有。		

第25図 4号遺物集中平面・土層セクション図 (1 / 60)

第3節 C地区

当地区は昭和60年度に発掘調査した区域で、南東側台地上の8N-5グリッドから古墳時代の土坑を1基検出している。

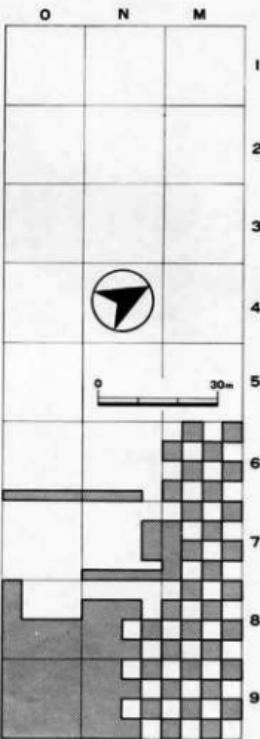
古墳時代の土坑は、95×45cmの規模をもつ梢円形プランで、完成形の須恵器環蓋と坏身が2セット、土坑の上層から伏せた形で出土した。しかし、土坑の覆土が包含層の土層と同様である点や須恵器环の出土状態が上層である点を考えて、土坑の遺構としての信憑性は極めて薄いと言えよう。しかし、須恵器环4個体は極めて一括性の高いものであり、土器のもつ性格については興味深いものがある。

次に、須恵器について説明を加えたい。第28図に挙げた环は1と2、3と4がセットとなると考えられる。法量は1で口径13.8cm、器高4.8cm、2で口径12.2cm、器高4.5cm、3で口径13.2cm、器高3.6cm、4で口径11.8cm、器高3.7cmを測る。环蓋は口唇部で丸味をもち、天井部の丸い器形を呈し、ナデのみの調整を施す。环身は、立ち上がりが短く内傾し、受部の短い器形を呈し、ナデのみの調整を施す。

1と2のセットがやや深身なのに対し、3と4のセットが偏平な特徴をもつが、器形・調整の特徴は同様であり、同時期のものと考えて差し支えないであろう。胎土については、いずれも白色微砂粒を多めに含む特徴をもっており、南加賀地域で生産される須恵器と共通点をもつ。

次に、須恵器の時期について若干触れておこう。当道跡の須恵器は、上記のように口径の縮小化と立ち上がりの矮少化、そして調整技法の簡略化の傾向をもつものである。このような特徴は、^(注1)加賀市分校3号窯跡最終床の一括土器に類似性を求めることがで

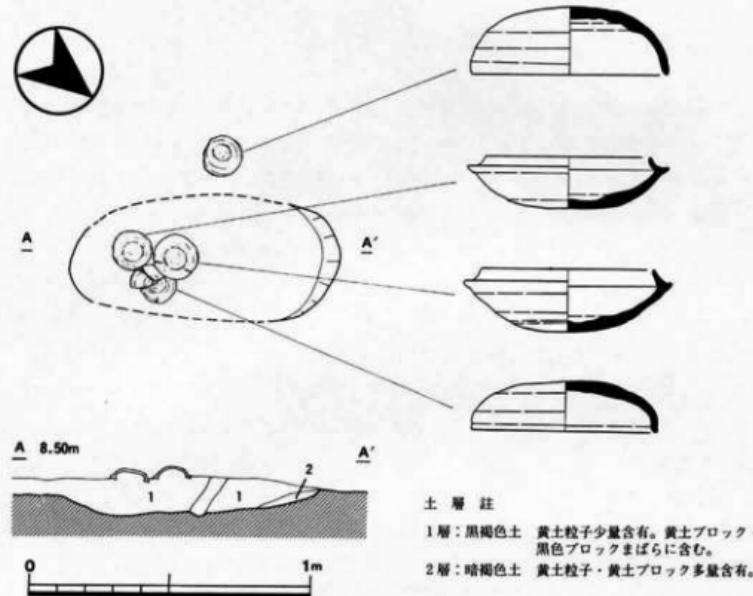
^(注2)き、田嶋編年における法皇山第II型式を当てることができる。陶邑にあてはめてみれば、田嶋編年におけるTK209窯式、中村編年におけるII-5段階に相当する。また、当道跡に近接する念佛林古墳出土の須恵器に対比してみれば、念佛林古墳の須恵器は2時期存在するのであるが、新しい様相の土器と比べても2型式新しく位置付けられるものであり、念佛林古墳との関連性はないと言えるであろう。



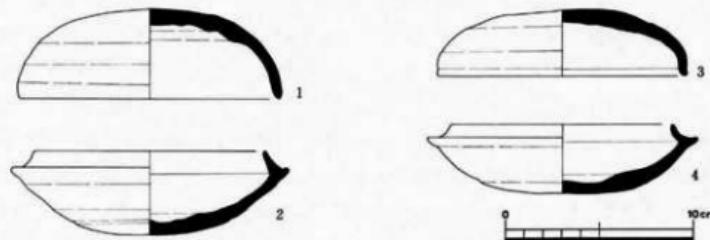
グリッド及びトレーンチ掘削箇所

第26図 C地区調査区域図 (1 / 1,500)

- 注 (1) 分校3号窯跡最終床土器群は、环身の口径分布が11.5~12.2cmに、环蓋の口径分布が12.6~14cmにそれぞれ集中する点や丸味をもつ器形や調整に削りが入らない等の特徴をもっており、当遺跡出土須恵器のものとかなり近い特徴を示す。
 (大型寺高校郷土研究会 1972「分校窯址発掘調査報告」『郷土』11)
 (2) 田嶋明人 1971「補論 I 須恵器の編年」「法皇山横穴古墳群」加賀市教育委員会
 (3) 田辺昭三 1981「須恵器大成」角川書店
 (4) 中村 浩 1981「和泉陶邑窯の研究」柏書房



第27図 古墳時代の土坑平面図・土層セクション図 (1 / 20)



第28図 土坑出土須恵器実測図 (1 / 3)

第IV章 遺 物

第1節 土 器

出土した縄文土器は、総数でパンケース65箱を数えるが、その大半が縄文を施文する破片で粗製完形土器を含めて、全体の約65%を占める。有文深鉢形土器の胴部に縄文だけを施文するものが多いため、一概には言えないが、深鉢形土器のなかで縄文施文の粗製土器の占める割合はかなり高いと言えるであろう。

これらの土器の時期については、大半が中期前葉から中期中葉に位置付けられるものであり、一部後期に位置付けられるものも存在する。以下、中期前葉から中葉の土器群及び後期の土器群について分類を試み、述べて行きたい。

(I) 縄文時代中期前葉から中葉の土器群

まず、器種により深鉢形土器と浅鉢形土器とに分類し、その中で、深鉢形土器を文様帶をもつものと縄文施文または無文の粗製土器、文様帶をもつものか粗製土器か不明である底部付近の土器とに区分した。

(A) 深鉢形土器

(a) 文様帶をもつ深鉢形土器

文様帶をもつ深鉢形土器は、まず、在地的な文様構成をもつ土器群（I群）と外来的な文様構成をもつ土器群（II群）とに大別した。さらにI群土器を分類するにあたっては、大半が破片であるため、全体的な器形による分類は困難であり、よって、口辺部と胴部に分けて分類を試みた。

口辺部は文様構成により、山田芳和氏の言われる横位楔形無文帯をもつもの（1類）、横位無文帯をもつもの（2類）、横位縄文帯をもつもの（3類）、半隆起線を縦横に組み合わせて文様を構成するもの（4類）、横走する半隆起線文によって構成されるもの（5類）、連華状文をもつもの（6類）、隆帯により半円と三角形の組み合わさった区画を形成するもの（7類）とに区分できる。また、器形により波状口縁を呈するものの（A種）と平口縁を呈するものの（B種）に分けられる。胴部は器形を窺えるものが僅少であったため、文様構成でのみ分類した。半隆起線により縦横の区画文を構成し、区画内を正格子目文で充填するもの（1類）、縄文を地文として半隆起線で縦横の区画文を構成するもの（2類）、縄文を地文として半隆起線による曲線、渦巻きを主体とする文様を構成するもの（3類）、半隆起線により縦横を基本とする区画文を構成し、区画内は無文または連続刺突・刻目を施すもの（4類）、半隆起線で縦横及び曲線、渦巻きを構成し、区画内は無文または連続刺突・刻目を施すもの（5類）、半隆起線で区画文様を構成し、区画内を範・備描きによる斜線・横線・綾杉文で充填するもの（6類）、地文の縄文をそのまま残すもの（7類）の7類に分類可

能である。以上が文様をもつ深鉢形土器の分類項目であるが、項目順に以下に個々の土器について説明を加える。

1群（口辺部）

1類（第30図3・7～13、第31図14～34）

いわゆる横位楔形無文帯をもつ土器を一括した。この文様は半隆起線によって区画された横位無文帯に半隆起線に沿って連続の刻目・刺突を加えたもので、刻目・刺突の方法には幾つかのタイプがある。棒状工具によって刺突を施すもの（3・22・23・28）、籠状工具によって刻目を施すもの（21・27・32・33）、先端が角状の工具を押し付けたもの（25・29）があるが、この施文方法の違いが時間的な変遷につながるものであるかは不明である。以下に口縁部形態によって分類したA種とB種について述べていきたい。

1類A種（第30図7～13、第31図14～20）

波状口縁を呈するものは、波頂部の位置に合わせて、隆帯や半隆起線による縱位文様を構成するものが一般的で、戻手状の隆帯を頭部以下まで垂下せるもの（7）や逆U字状の隆帯を貼付するもの（19）、半隆起線で逆U字状に区画し、方形の区画文様を構成するもの（14・15）、楔形無文帯のなかに半隆起線による渦巻文を施文するもの（16～18）がある。楔形無文帯から上の文様構成は、爪形文+半隆起線を2段施文するもの（7～9）、半隆起線+爪形文+半隆起線を施文するもの（10・20）、半隆起線を3条施文するもの（11～18）がある。器形については、キャリバー状に内渦する口縁部をもつもの（14～18）、頭部から外反して立ち上がり、口縁端部で内渦するもの（7～10・13・19・20）が存在する。

1類B種（第30図3、第31図21～23）

3はやや膨らみをもった胴部から頭部で外反して立ち上がり、口縁部で短く直立する器形を呈する。文様は口縁部から半隆起線+爪形文+半隆起線を、楔形無文帯を間に挟んで2段施文する。胴部文様については胴部文様の項で述べる。

21はキャリバー状に内渦する器形を呈するもので、爪形文+半隆起線を3段施文した後、楔形無文帯を配する。

22はキャリバー状口縁を呈する可能性をもつもので、口縁端部で内屈する器形を呈する。文様は爪形文+半隆起線+半隆起線を施した後、楔形無文帯を配する。

23は頭部から外傾して立ち上がり、口縁端部で外屈する器形を呈するもので、口縁端部からやや幅広の無文帯をもった後、3条の半隆起線を施し、楔形無文帯を配する。

2類（第30図4、第31図35）

4は口縁部形態A種を呈する。器形は筒状の胴部から頭部で屈曲してキャリバー状に内渦する。文様は爪形文と3条の半隆起線を施した後、幅広の無文帯を配し、頭部で2条の半隆起線を施して区画する。胴部については後述する。

35は幅広の無文帯をもった後、頭部で半隆起線を施す。

3類A種（第30図5・6）

5・6ともに底部から筒状に立ち上がり、口縁部でやや内渦する器形を呈するもので、口縁部形態はA種を呈す。文様は口縁部から3条を1単位とする半隆起線を横位繩文帯を挟んで、2~3段施し、2段目以降は波頭部にあわせて、半隆起線と隆帶で構成された縦位文様帯によって分断されている。

4類B種（第29図2、第30図36・37）

2は底部からやや膨らみをもった胴部へ移行し、頸部でゆるやかに外反して口縁部に至る器形を呈する。口縁端部には小突起が4つ付されている。文様は半隆起線を縱と横に組み合わせたB字状文的な文様を構成する。胴部は繩文の地文をそのまま残す。

36は細い半隆起線を縦横に施文するもので、方形の区画を構成する可能性をもつ。

37は口縁端部で内屈する器形を呈するもので、口縁端部内面に平坦な面をもち、玉抱三叉文が付される可能性をもつ。文様は爪形文を施した後、半隆起線で方形の区画を施す。

5類A種（第31図38~41、第32図43~45）

器形は40でキャリバー状に内渦するほかは、頸部で外反して口縁端部でやや内渦するものである。文様は1条の爪形文を施した後、3条の半隆起線を施すもの（38・40）、1条の爪形文を施した後、逆V字状に隆帶を貼付し、その隆帶に沿って半隆起線を施すもの（39）、隆帶で区画した中に半隆起線で充填するもの（41）、口縁端部から2条の半隆起線を施し、波頂部の位置に刺突文を施したもので、その下を渦巻状文と区画文を構成するもの（43~45）がある。

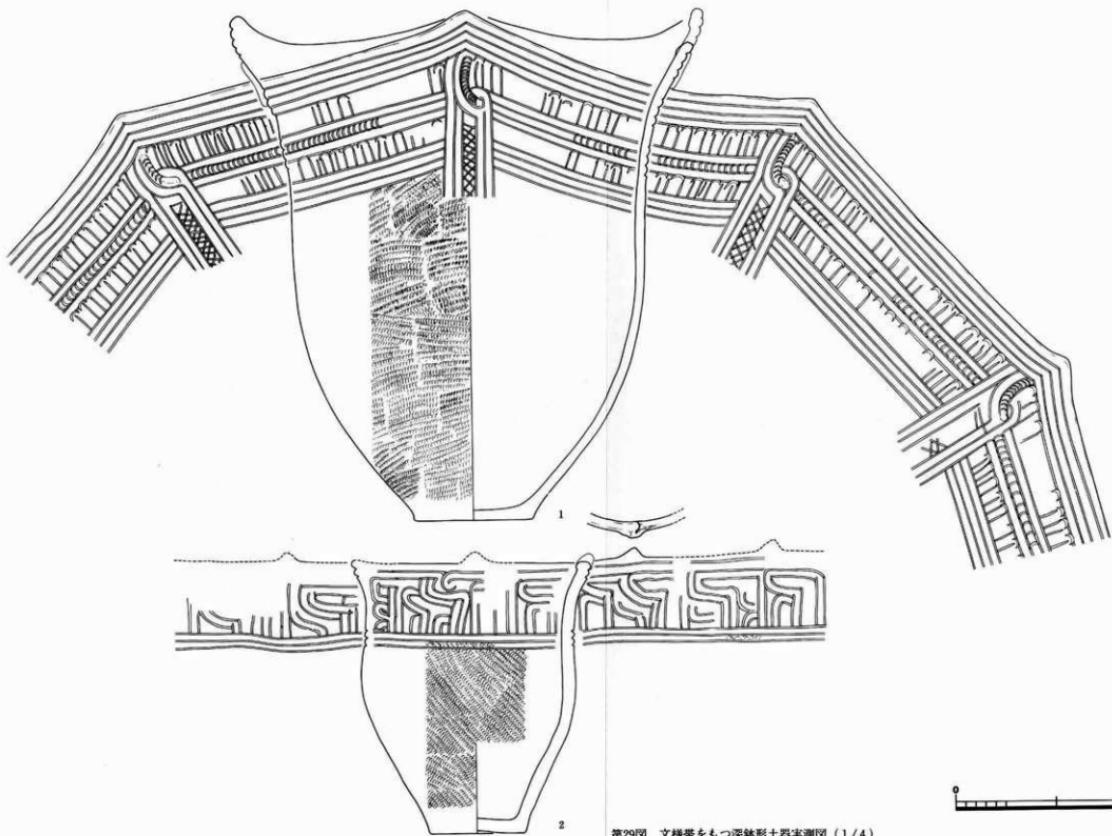
5類B種（第31図42、第32図46・47）

42は爪形文+半隆起線を2段施し、それ以下は胴部文様に移行するもので、口縁部文様帯の幅は狭くなっている。46・47は42と同様の文様または3条の半隆起線を施したもので、それ以下は斜繩文を施す。これは3類の横位繩文帯をもつ土器群に入る可能性をもつが、それ以下の状況が不明のため5類に入れた。

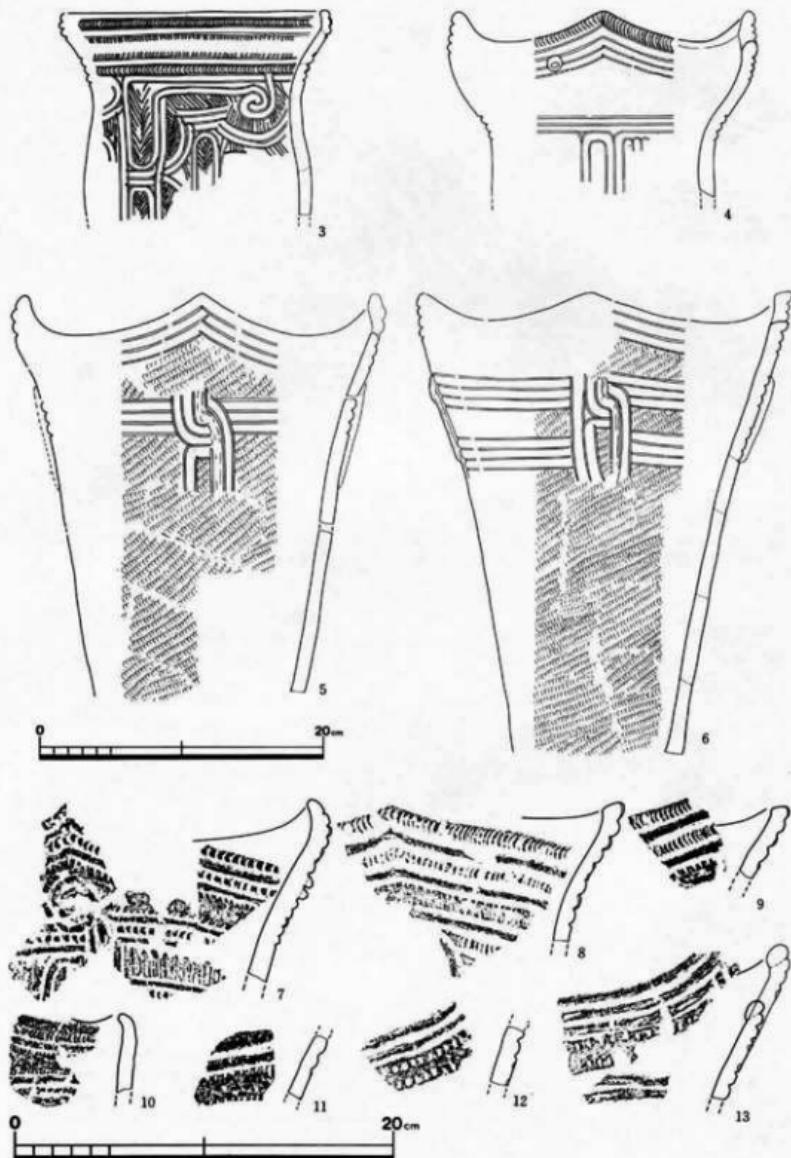
6類（第29図1、第30図7、第31図34、第32図48~64）

蓮華状文は施文方法により、蓮弁の端部を半截竹管状工具を押し付けて、また圧し引いて作り出し、花弁内は箆状工具による沈線を施すもの（a）、蓮弁は箆状工具によって三角形に抉り取ることによって表出し、花弁内に縦位沈線を施すもの（b）、箆状工具による沈線で蓮弁および花弁内の線を表出するもの（c）、蓮弁端部を半截竹管状工具を押し付けたり、圧し引いたりして作り出すもので、縦位の沈線は施さないものの（d）、半截竹管による半隆起線文を逆U字状に描き、蓮華状文を表出するもの（e）、横走する半隆起線文の間に縦位の沈線を施し、蓮華状文を表出するもの（f）の6つに分類できる。
(注2)

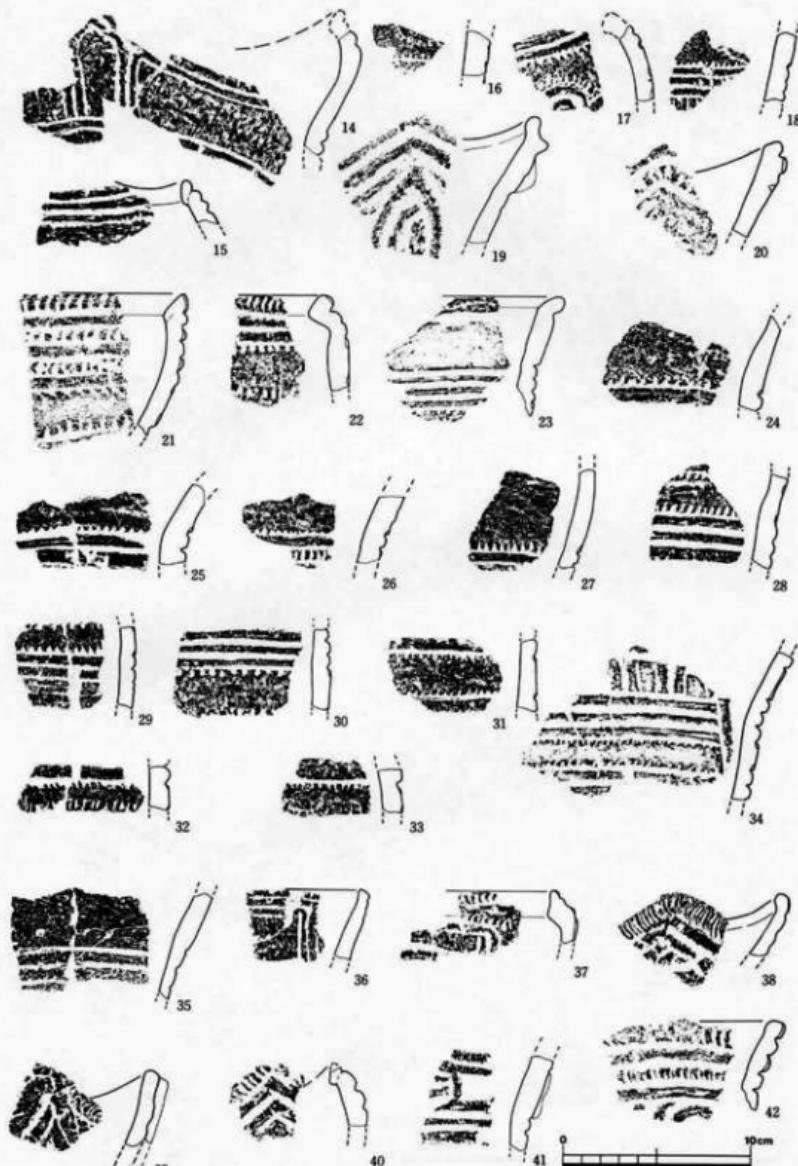
aは花弁内に1本の縦位沈線を施すもの（1・7・48~52・54・55）が一般的であるが、2本施すもの（53・56）も存在する。また、地文については無文のもの（1・7・48~53）と繩文のもの（54~56）が存在し、施文位置については口縁部直下に施文するもの（48・49）、口縁端部から2~3条の半隆起線文を横に引いた後、施文するもの（1・53・54）、頸部付近に施文するもの（7・51・55）が存在する。これらの土器群はほとんどが破片であり、器形について述べるのは困難であるため、1の完形土器についてのみ、ここで触れておきたい。1は波状口縁を呈し、頸部から外反して立ち上がり、口縁端部でやや内渦する形



第29図 文様帶をもつ深鉢形土器実測図 (1/4)



第30図 文様帶をもつ深鉢形土器拓影・実測図（3～6は1/4, 7～13は1/3）



第31図 文様帶をもつ深鉢形土器拓影図（1 / 3）



第32図 文様帶をもつ深鉢形土器拓影図（1 / 3）

態で、膨らみをもつ胴部からすばまる底部へ移行する。口辺部文様は4条の横帶する半隆起線を配し、その下を蓮華状文と3条の半隆起線を2段に配する。波頂部の位置にあわせて半隆起線と隆帶で構成された縱位文様帯を上段の蓮華状文から胴部上位まで配し4分割している。縱位文様帯は爪形文を施した隆帶をしの字状に垂下させ、2条を1単位とする半隆起線を胴部上位まで施す。この半隆起線によって区画された中は斜格子目文を充填する。胴部は地文の縄文をそのまま残すが、縱位文様帯が一部及ぶ。

bは頭部付近の破片で無文地に施文されたものである(57)。

cは破片のため、どの部位に施文されたかは不明であるが、無文地に施文されたものである(58)。

dは半截竹管を押し付けたもの(62)と圧し引いたもの(59~61)とに分けられる。62は縄文を地文としたもので、口縁部形態はA種で、その波頂部に玉抱三叉文を配する。59~61は無文地に施文したもので、口縁部形態はB種で、3条の半隆起線を配した後、施文している。

eは口辺部下位に施文したもので、その下に3条の半隆起線を配した後、楔形無文帯をもつ(34)。

fは縱位沈線を施しただけのものであるが、蓮華状文を意識したものとして6類に入れた(63・64)。63は無文地に施文したもの、64は縄文地に施文したものである。

7種B種 (第33図65~67)

器形はやや膨らんだ胴部から頭部でゆるやかに外反して口縁部に至る。文様帯は口縁部から弧状に貼り付けた隆帶と頭部に巡らせた隆帶を結び、半円と三角形の組み合わさった区画文を作り出している。区画内は無文のもの(66・67)と縄文地を残すもの(65)がある。

1群 (胴部)

1類 (第33図68~74)

半隆起線で縦を中心とする区画文(B字状文)を構成し、その区画内に正格子文を充填させる。この文様構成をもつものは、口辺部文様帯と胴部文様帯が頭部付近で分割されているものが一般的である。

2類 (第32図45, 第33図75~84)

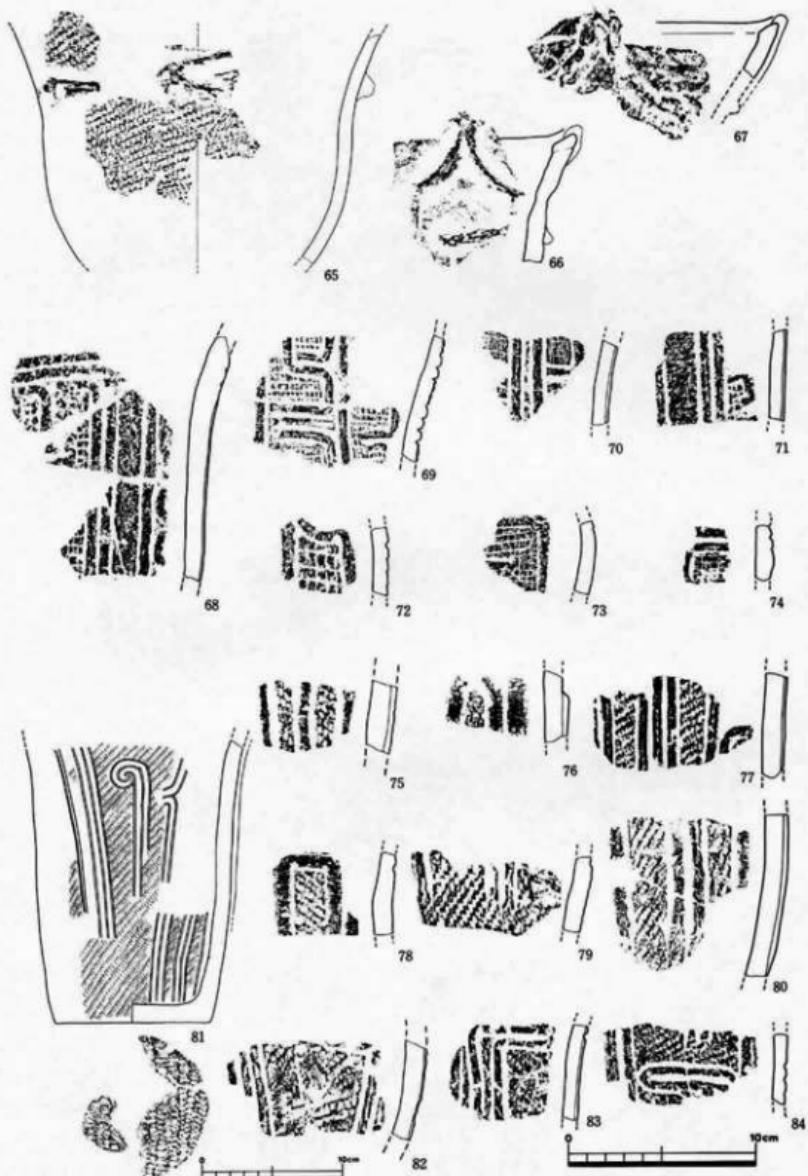
単節斜縄文を地文とするもので、半隆起線による縦を中心とした区画文を構成する。半隆起線は太くて深いもの(75~80)と細くて浅いもの(45, 81~84)とに分けられる。前者は縦を中心とした区画文(B字状文)を施すもので、1類と同系統の文様と考えられる。後者は縦の区画文様には変わりはないが、B字状文が崩れ蕨手状を呈したり、隆帶が垂下し渦巻状を呈するものである。

3類 (第34図85~91)

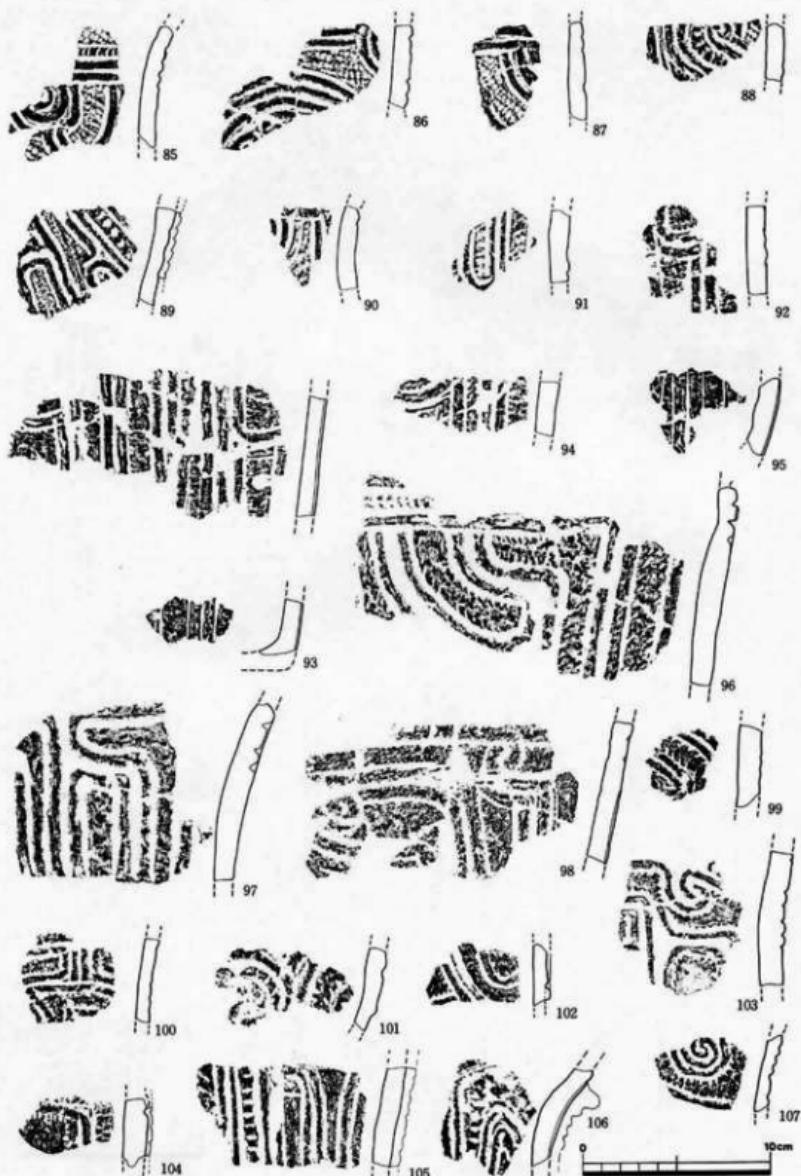
単節斜縄文を地文として浅い半隆起線で曲線を主体とする文様を構成する。この文様は88・89のように爪形文や刻目文を施した隆帶を渦巻状に配するものが多く、1・2類で見られた縦中心の区画文や口辺部文様帯と胴部文様帯の境目が崩れて口辺部文様帯からそのまま胴部文様帯へ横流する文様を構成する。

4類 (第34図93~98・103)

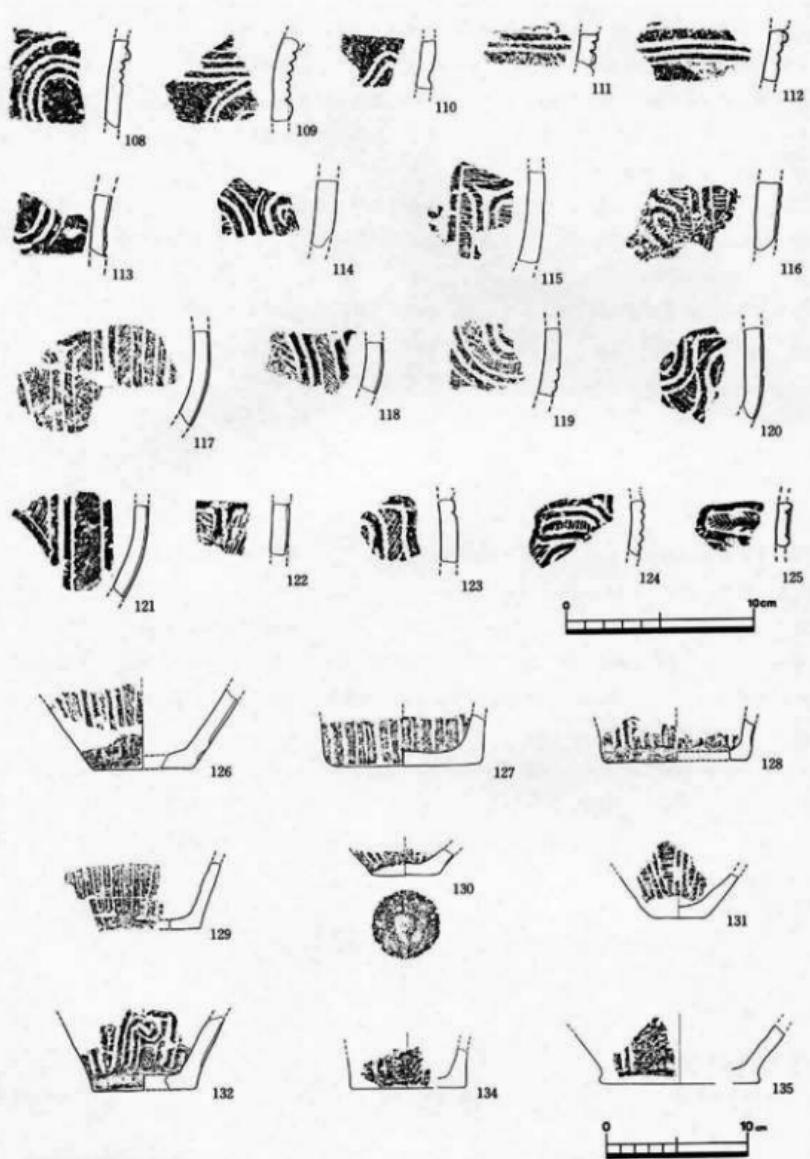
深い半隆起線で縦区画を中心とするB字状文を構成するもので、区画内を無文のままとするもの(97・98)と半隆起線に沿って連続の刺突・刻目を施すもの(93~96・103)とが存在する。なお、103は渦巻状



第33図 文様帶をもつ深鉢形土器拓影図 (65・81は1/4, 他は1/3)



第34図 文様帶をもつ深鉢形土器拓影・実測図 (1 / 3)



第35図 文様帶をもつ深鉢形土器拓影図 (108~125は1/3, 126~134は1/4)

の文様をもつが、基本的な文様構成は縦中心の文様構成であるため4類に入れた。

5類（第34図99～102・104～107、第35図108～113）

やや浅目の半隆起線を施すものをa種、浅くて細い半隆起線を施すものをb種とした。

a種は3類と同様に刻目文や爪形文を施した隆帯を曲線で配するもの（104～106）が多く、半隆起線に沿って刻目・刺突文を施す。

b種は半隆起線と隆帯で渦巻状や曲線を描いた他の部分は無文のままとしており、残部処理文的なものは施されていない。やや趣を異にする土器群と言える（108～113）。

6類（第30図3、第35図114～125）

やや深い半隆起線で縦区画を中心とする文様を構成するもの（3・115・117・121～123）と渦巻状を構成するもの（114・118・119）が存在するが、渦巻状文に隆帯を伴っていないことや基本的には格子目文と同じ充填文であること、3の土器が口辺部文様帶と胴部文様帶とで分断されているなどから考えて、縦区画を基本とする1・2類に近い土器群と考えられる。また、区画内は竪状・横状工具による横線を充填するもの（114～116）、斜線を施すもの（117・118・120～124）、斜格子目文を施すもの（119）、綾杉状文を施すもの（3・125）が存在する。

7類（第29図1・2、第30図5・6、第33図65）

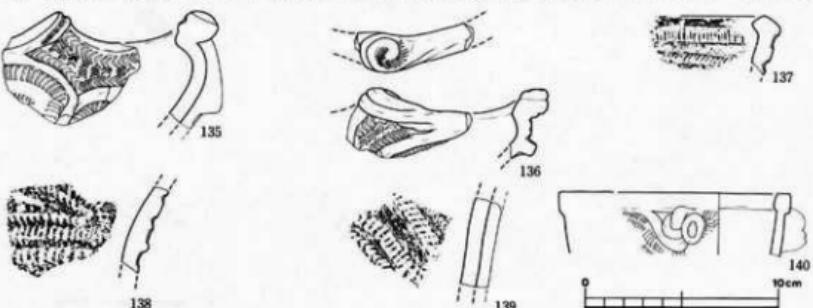
地文とする単節斜縄文をそのまま残すものを一括した。

I群（底部付近）（第35図126～134）

半隆起線が施されているもので、底部付近の土器を一括した。126～130は縦位半隆起線が密に施されているものである。131は半隆起線で縦区画文様を構成し、区画内を横線で充填している。132は庶手状や縦位の半隆起線を施している。133は半隆起線で縦区画文様を構成し、区画内に連続刻目を施している。

II群（第36図135～140）
（注3）

南氏の呼称する連続刺突沈文を施した新道系の土器を一括した。135・136は口縁端部に入字状の突起をもつもので、キャリバー状の口辺部をもつ。入字状突起は垂下して口辺部の隆帯と連続し、区画文を構成する。そしてこの隆帯に沿って連続刺突文を施す。139も同様の文様を構成するもので、同一個体の可能性



第36図 文様帶をもつ深鉢形土器拓影・実測図（1/3）

が強い。137は平口縁を呈するもので、横位の連続刺突沈文を施す。138は頸部付近の破片で、連続刺突沈文による三角形の区画を構成する。137・138も同一個体と考えられるもので、文様構成としては厳照寺遺跡第4号住居跡で出土しているような半円と三角形を組み合わせた区画文様を想定したい。140は隆帯で動物意匠を形作ったもので、連続刺突沈文を施す。小形の鉢形土器と思われる。

(b) 粗製深鉢形土器

粗製深鉢形土器は縄文を施すものをI群とし、無文土器をII群とした。そして、I群土器のなかで一般的な単節斜縄文を施文するものをA種、やや異なった縄文を施すものを一括してB種とした。また、器形により波状口縁を呈するもの(A種)、4単位の小突起をもつ平口縁を呈するもので、底部から胴部で膨らみをもって立ち上がり、頸部で外反して口縁部へ移行するもの(B種)、B種と同様の器形を呈するが、口縁部に突起をもたないもの(C種)、平口縁を呈するもので、底部から筒状またはやや外傾して立ち上がり、口縁部に至るもの(D種)、平口縁を呈するもので、底部から筒状またはやや外傾して立ち上がり、口縁端部で内屈、直立するもの(E種)、平口縁を呈するもので、底部から開いて立ち上がるもの(F種)の6種に分類可能である。以下に分類基準に従って個々の土器について説明を加える。

I群1類A種 (第37図141~143)

143は、小さな底部から筒状に6.5cm立ち上がり、台を形成する。台から上は球形の胴部を呈し、頸部で外反する。口縁部及び台部は無文地をそのまま残し、胴部のみ縄文を施している。141・142は口縁端部に粘土紐を貼付して段をつけた口縁帶をもつ。

I群1類B種 (第37図144~149, 第38図150~155)

口縁端部に粘土紐を貼付して段をつけた口縁部無文帶をもつもの(146~153)と段は形成しないが、口縁端部に幅の狭い無文帶をもつもの(144・145・155)とが存在する。また、146は頸部に小円盤を口縁部突起にあわせる形で貼付しており、口辺部に補修孔も認められる。

I群1類C種 (第38図156~160)

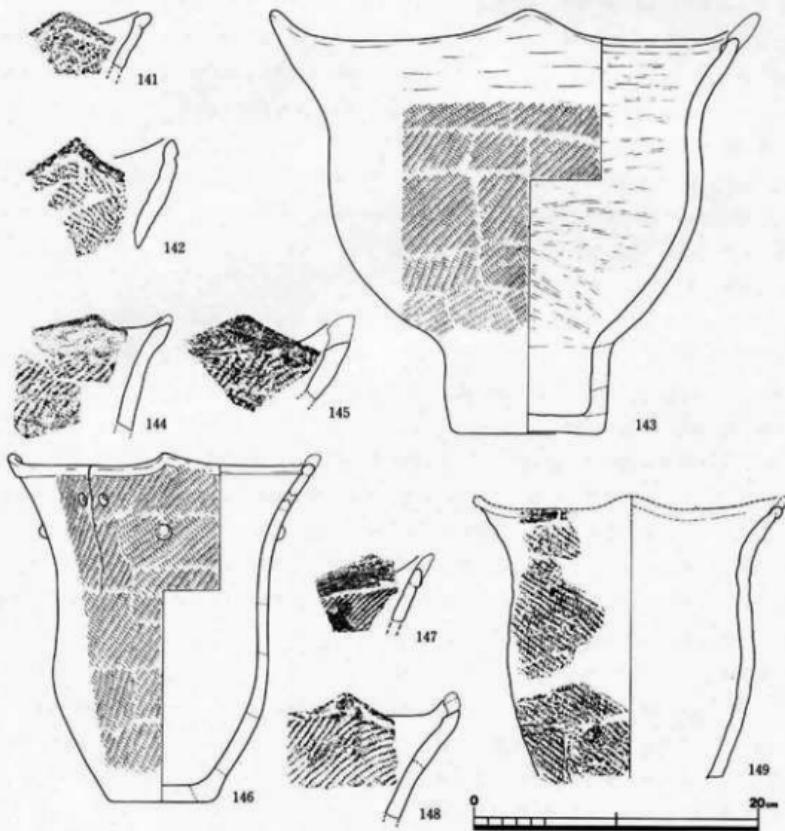
口縁端部に粘土紐を貼付して、接合痕をそのまま残すもの(156)、口縁端部まで縄文を施文するもの(157)、口辺部に幅広の無文帶を形成し、そこに縄文の原体を押圧するもの(158~160)とが存在する。158は口辺部に5.5cmの無文帶をもって、それ以下をL Rの斜縄文を施すものであるが、その境には同じ縄文原体を押圧して横帯させている。159は158と同様の文様構成をもつが、縄文原体を口縁端部付近と斜縄文を施文した境に押圧させ、この2条の押圧縄文を結ぶ形で縦に1本施文している。160も同様の文様構成をもつもので、R Lの縄文原体を使用している。

I群1類D種 (第39図161~168)

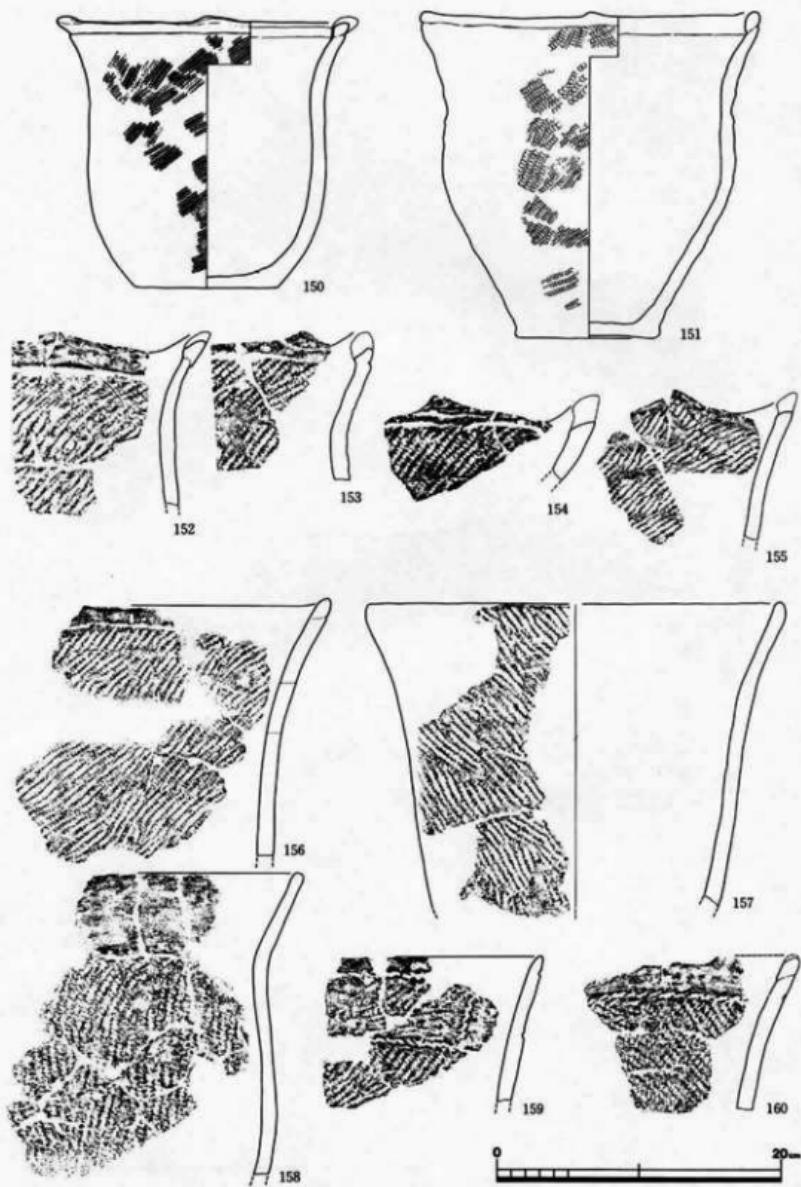
総てのものが口縁端部に粘土紐を貼付して段のついた口縁帶を形成する。このうち、165は口縁帶にも斜縄文を施すものであるが、他は無文のままである。161・165・167は小突起をもつもので、161は小突起下の口縁帶にR Lの縄文原体を縦に2条、押圧施文する。

I群1類E種 (第39図169~171, 第40図172~179)

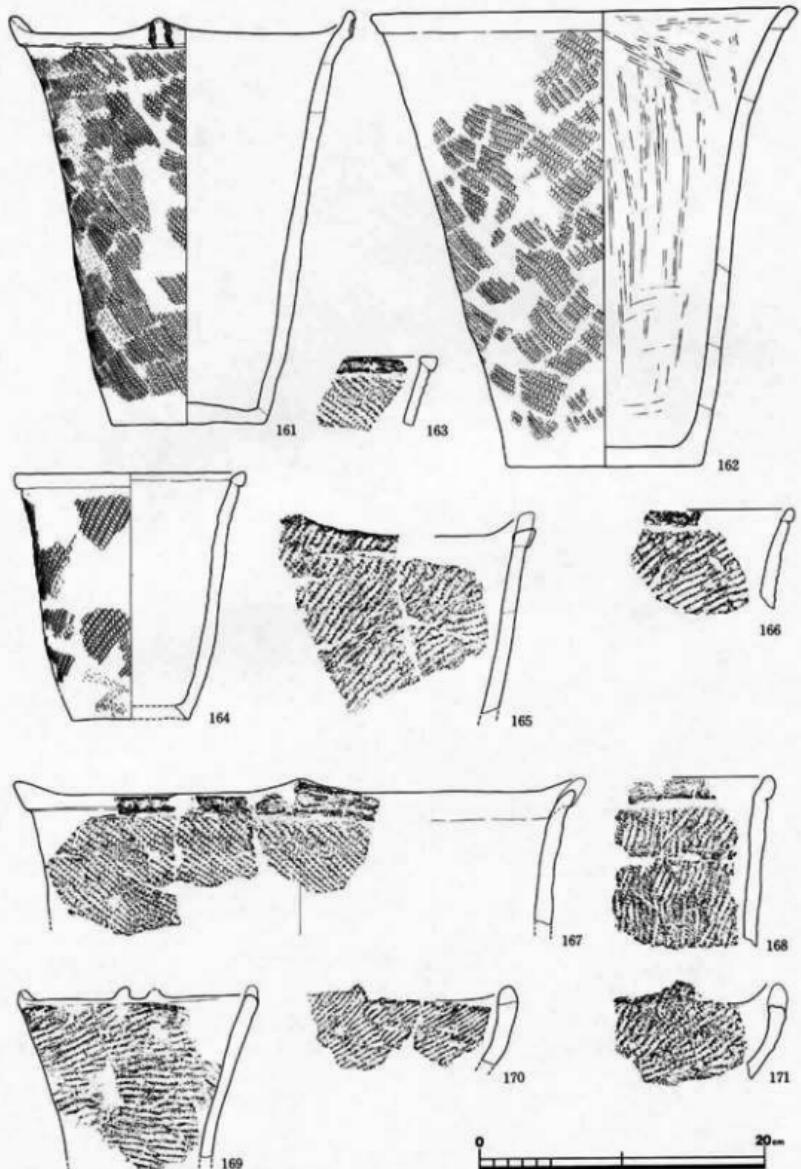
口縁部の器形により、口縁端部で内屈するもの（169・172～176）と口縁部が内渦して立ち上がるるもの（170・171・177～179）とに分けられる。また、これらの中には口縁端部に小突起をもつものが存在し、突起の形態により、口縁端部の上に 2 つの突起を対にして 4 単位貼付するもの（169～171・173）と口縁端部の下に U 字状に粘土紐を貼付して突起を形成するもの（172・175・176・178）の 2 つに分けられる。この後者の突起形態をもつ土器のうち 175 以外は、突起を挟む形で LR の繩文原体を縦位に押圧施文している。そして、172のみ頸部にも横位の押圧繩文を施す。174は破片のため確実性に乏しいが、口縁部形態から考えて U 字状に粘土紐を貼付した突起が付される可能性をもつ。これらの土器群とは様相を異にするが、177は口縁部に粘土紐接合痕を 2 段残すもの、179は口辺部に幅広の無文帯をもち、その中に LR の繩文原体を押圧施文するものである。



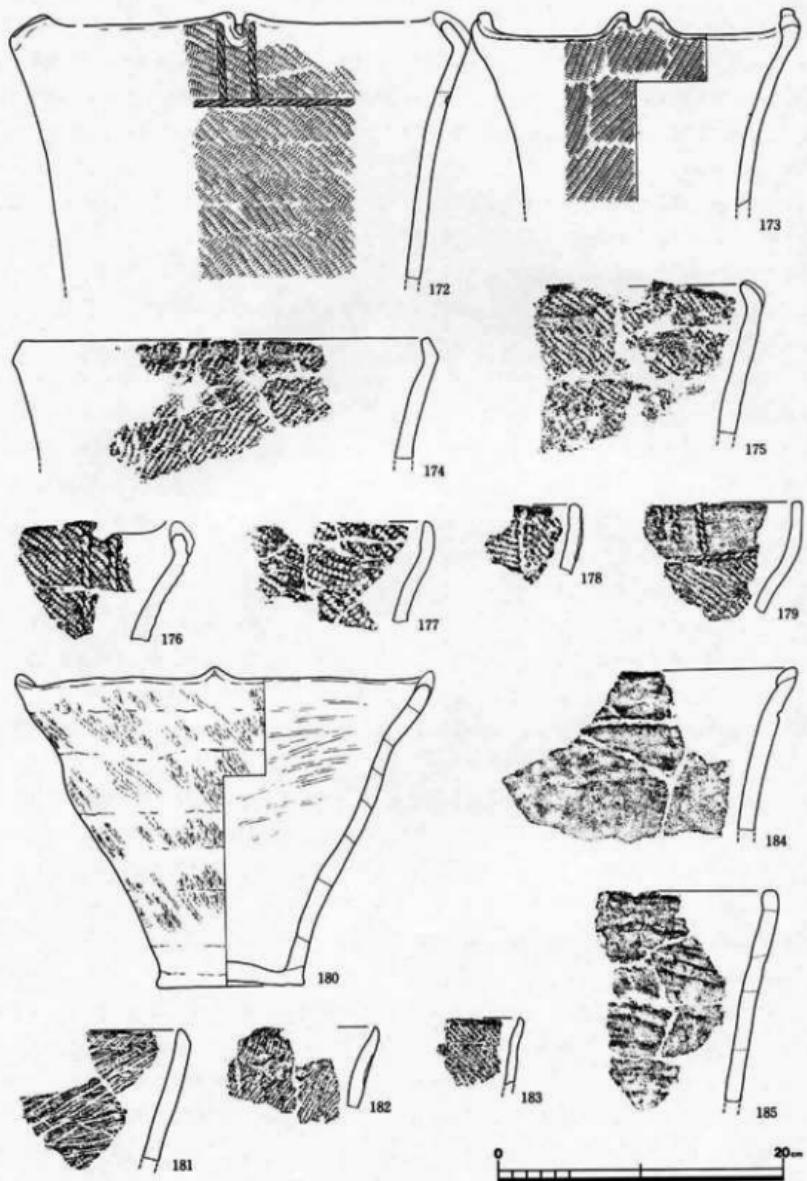
第37図 粗製深鉢形土器拓影・実測図（1 / 4）



第38図 粗製深鉢形土器拓影・実測図 (1 / 4)



第39図 粗製深鉢形土器拓影・実測図（1/4）



第40図 粗製深鉢形土器拓影・実測図（1/4）

I群 2類（第40図180～183）

180・182は無節の斜縄文を施す。180はF種の器形を呈するもので、口縁端部に4単位の小突起を付す。外面には粘土接合痕を7段残し、そのうえに無節の斜縄文を施す。182は口縁端部まで無節の斜縄文を施した後、口辺部に左撫りの縄文原体を縦位押圧施文する。181・183は原体の細い単節斜縄文を施す。

II群（第40図184・185）

いずれもD種の器形を呈する。184は口縁端部に粘土紐を貼付して内面に段を形成するもので、頭部にはLRの縄文原体を横位に押圧施文する。

(c) 底部付近の土器（第41、42図）

文様をもつものか粗製土器か判断できない底部付近の土器を一括した。以下に器形、底部圧痕を中心として述べて行きたい。

器形については底部からの立ち上がり具合で3つに区分できる。

184～188・196・201・205は、底部から開いて立ち上がり、球形に近い胴部へ移行する。186・196・201・205はそれぞれ底部径10cm、12cm、14cm、10cmを測るもので、大形品と思われる。187・188は底部径7cm台を測るもので、中形品と思われる。189～191・206は底部から外傾して立ち上がるものの底部径はそれぞれ10cm、12.5cm、9cmを測るもので、189～191は大形品、206は中形品になると思われる。

192～195・202・208・209は底部から筒状またはやや外傾して立ち上がるものの底部径は192・202・209で12.5cm、10cm、11cmを測り、193・194・208で9cm、9.5cm、9.5cmを測り、195で6.2cmを測る。これらはそれぞれ大形品、中形品、小形品になると思われる。

これらの平底の底部の他に、台付き底部のものもある（210・211）。これらは鉢形土器の台部になると考えられるが、便宜上、この項目で述べた。

底面は底部圧痕を残すものが少なく、大半がナデによって消去している。その中で認められる底部圧痕については網代痕、スグレ状圧痕、木葉痕がある。
(注5)

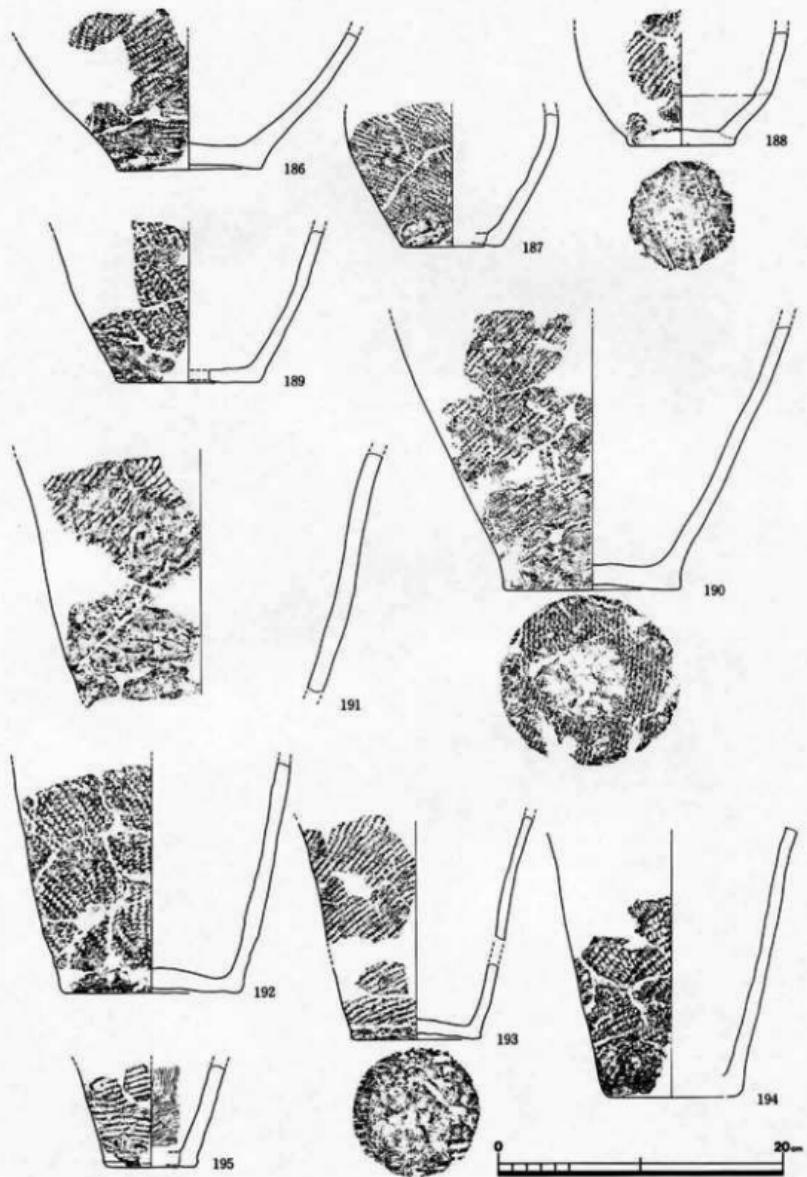
網代痕は一本超え、一本潜り、一本送りのもの（190・193・196～198）が多く、底部圧痕を残すものなかでは過半数を占める。このタイプの他に二本超え、二本潜り、一本送りのもの（199～202）や三本超え、三本潜り、一本送りのもの（203）も存在する。

スグレ状圧痕は数量は少ないが、204～206が存在する。

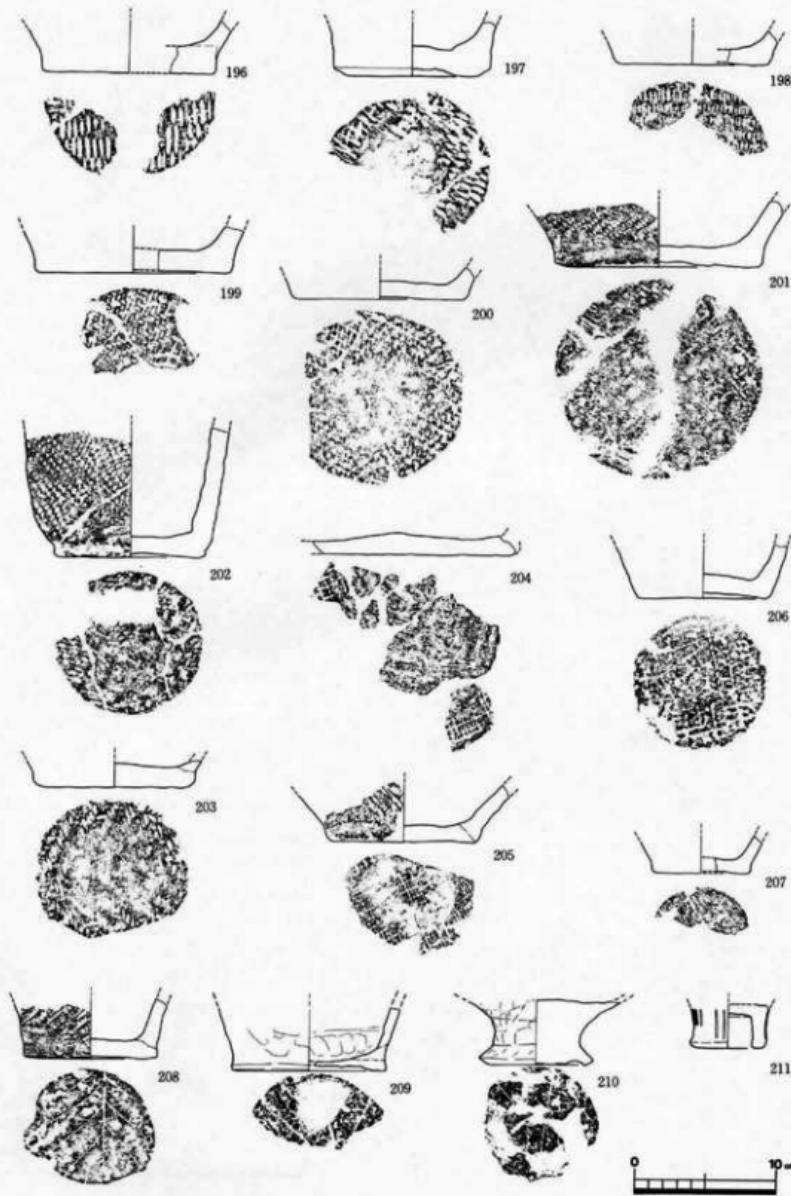
木葉痕は網状脈圧痕のもの（208～210）と平行脈圧痕のもの（207）とが存在する。

(B) 浅鉢形土器

浅鉢形土器は完形土器が2個体、復元土器が5個体と比較的良好な資料を得ることができた。これらの土器を分類するにあたって、口縁部文様帶をもつものをI群、無文のものをII群、縄文を施文するものをIII群とした。また、器形によって、底部から開いて立ち上がり、口縁部で内溝するもの（1類）、底部から開いて立ち上がり、口縁部で内屈または直立するもの（2類）、底部から口縁部まで開いて立ち上がり、スリ鉢状を呈するもの（3類）の3つに区分できる。以上の分類基準に従って個々について説明を加える。



第41図 底部付近深鉢形土器拓影図 (1 / 4)



第42図 底部付近深鉢形土器拓影図 (1 / 4)

I群1類（第43図212・213、第44図219～221・227・229、第45図230～232）

212は口径44cm、器高15.5cmを測る大形品で、口縁部から綾杉文を刻んだ隆帯を弧状に4単位配し、その間をU字状の隆帯でつないでいる。弧状の隆帯の中は半隆起線と鋸歯状彫去文によって構成している。^(注6)

213は口径40cm、器高11.5cmを測る中形品。口縁部が短く内溝するため、幅の狭い文様帶を構成する。口縁部文様帶は3条の横位半隆起線を施し、内面に施された玉抱三叉文の位置にあわせて、半隆起線による渦巻文を4単位配する。

219・220は口縁部に2条の横位半隆起線を2段施し、その間を縱位半隆起線で埋めている。

221は口縁部に短い縱位半隆起線を施し、その下に横位の半隆起線を2条施す。また、口縁部内面には段を形成しており、他の浅鉢形土器とやや異なる様相を呈している。

227・229は口縁部に2条の横位半隆起線をもつもの。

230～232は渦巻状の文様を構成するもの。231は口唇部に玉抱三叉文を施すもので、綾杉文を施した隆帯と半隆起線で渦巻文を構成する。232は半隆起線で円形を描き、その基部に爪形文を施すもの。

I群2類（第44図222～226・228）

222～225は半隆起線で区画された無文帶のなかに半隆起線に沿う形で楔形刻目文を施すもの。224のみ半隆起線が方形区画を呈する。他の土器についても同様の区画が施されているかもしれない。また、222は内面に赤色塗彩が施されている。

226・228は半隆起線を施すものであるが、226の半隆起線の施文の仕方や器形から考えて、方形区画を構成する可能性をもつ。

II群1類（第43図214・215、第44図235）

口径は214で37cm、215で39cmを測るもので、いずれも中形品。214・235は底部近くで内溝して立ち上がる器形を呈するが、215は底部から比較的立ち気味に立ち上がり、口縁部付近で内溝する器形を呈す。

II群2類（第43図216・217、第45図236）

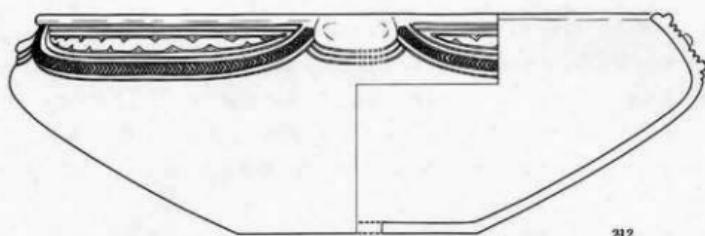
216・236は玉抱三叉文を口縁部に付するもので、216は口辺部屈曲後、やや外傾する浅身の器形を呈し、236は口辺部屈曲後、内傾するやや深身の器形を呈する。217は口辺部で内屈した後、口縁端部で外側に屈曲するもので、216と同様に浅身の器形を呈する。口径は216で41cm、217で40cmを測る中形品である。

II群3類（第44図218、第45図233・234）

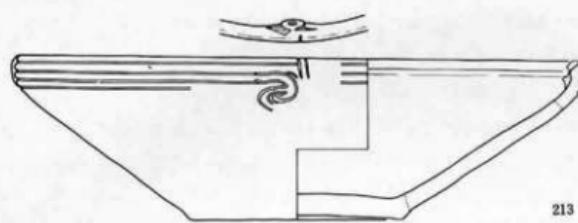
218は波状口縁を呈するもので、4つの波頂部を角とした方形の口縁を呈する。また、波頂部の内側には玉抱三叉文風の粘土をリング状に貼付した文様が付されている。口径44cm、器高14cmを測る大形品である。233は口縁部にリング状の粘土を貼付した文様をもつ。234は玉抱三叉文を口縁端部にもつもの。

III群2類（第45図237・238）

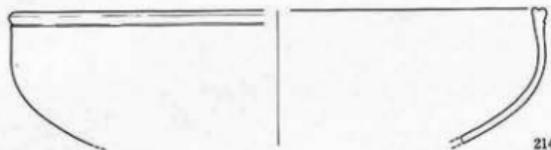
口縁部で内屈する器形を呈するもので、屈曲する部位から下のみを単節斜縞文で施文し、それ以上では無文のままでする。



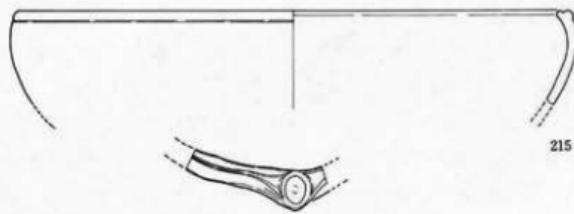
212



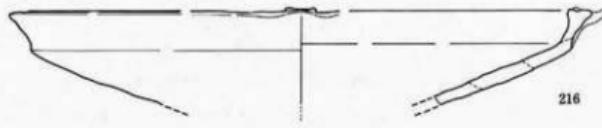
213



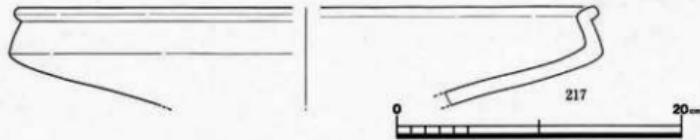
214



215



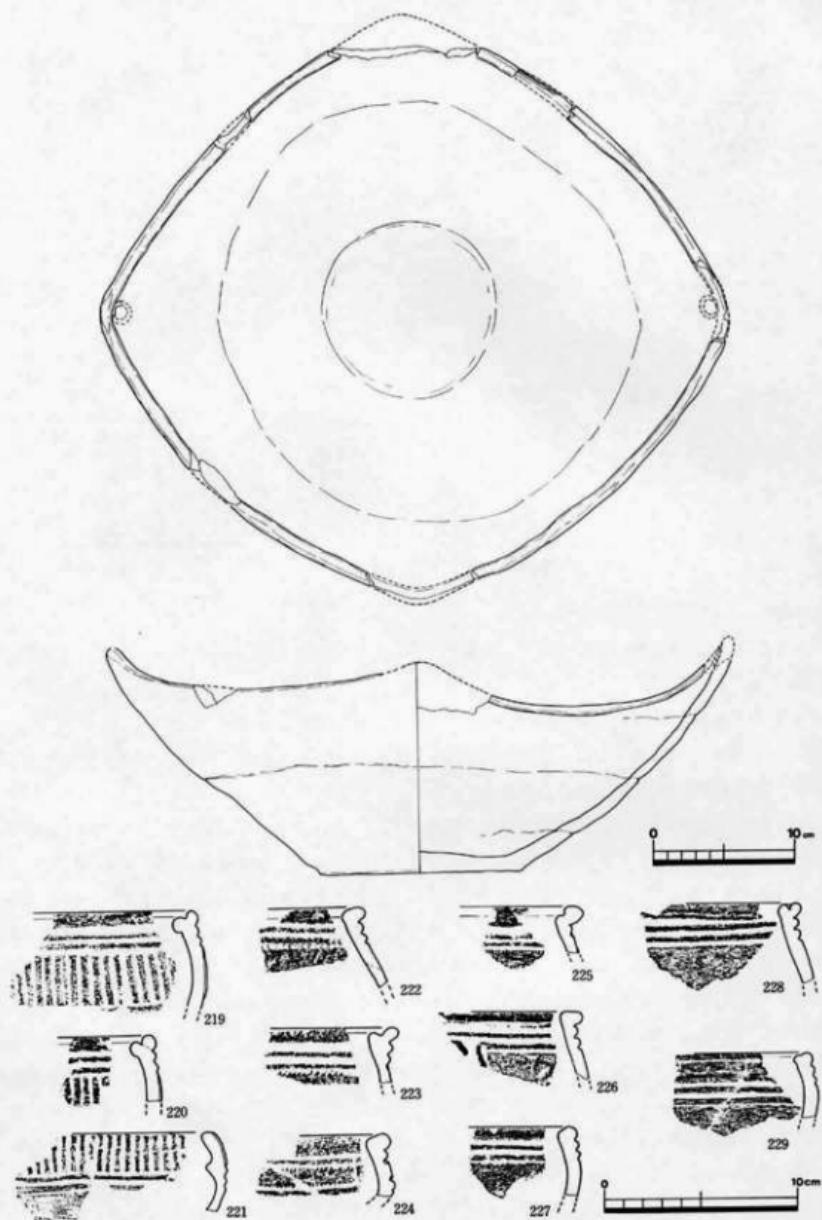
216



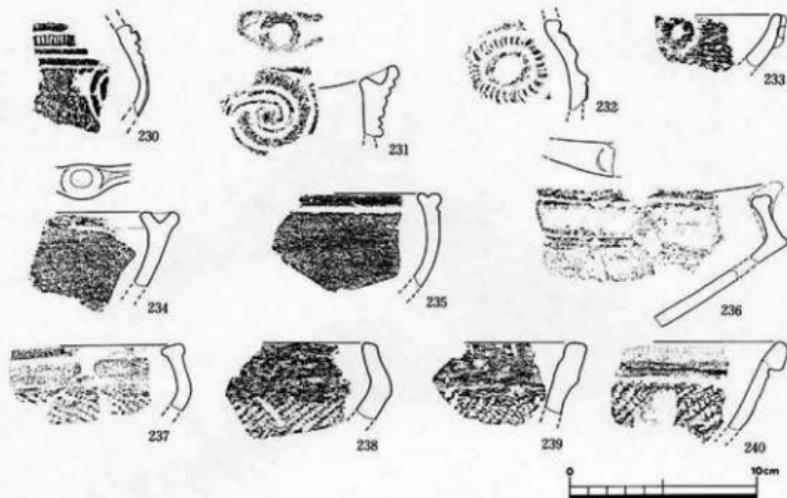
217

20cm

第43図 浅鉢形土器実測図（1 / 4）



第44図 浅鉢形土器拓影・実測図 (218は1/4, 他は1/3)



第45図 深鉢形土器拓影図（1 / 3）

田群3類（第45図239・240）

口縁端部に粘土紐を貼付して段を作り、無文帯を形成するもので、それ以下にL.Rの単節斜縄文を施す。

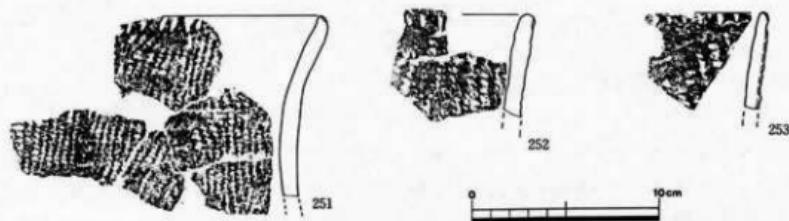
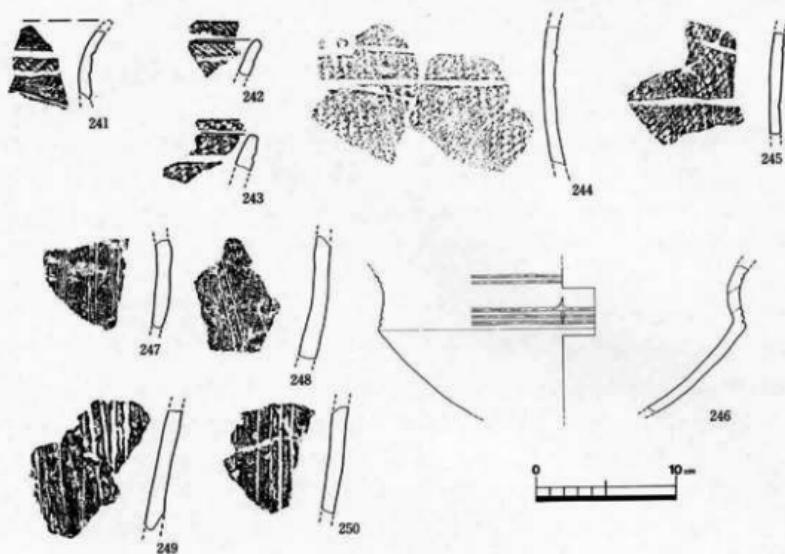
(2) 縄文時代後期の土器群（第46図）

土器の出土量が僅少であることと破片のみの出土であることから、分類するまでは至らないが、後期前葉の土器と後期中葉の土器に分けられるようである。

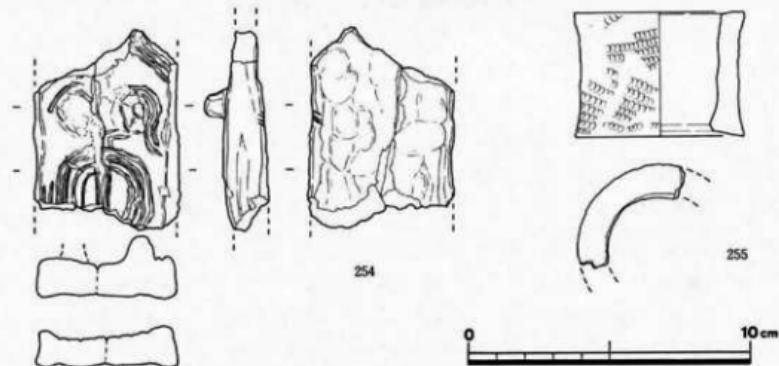
後期前葉の土器は縄文施文の深鉢形土器のみが確認されている。241～243は口縁部破片で口唇部が先細りするもの（241）と角張って平坦部をもつもの（242・243）がある。いずれも単節斜縄文を施した後、横位の沈線文を施すもので、241のみ沈線で区画されたなか以外を磨り消している。242・243は口唇部にも縄文を施文する。244・245は頸部付近の破片。縄文を地文として沈線文で文様を構成するもので、幾何学的な文様を構成するものと考えられる。これらの土器は七尾市赤浦遺跡や押水町上田うまばち遺跡、能登町真^{（注7）}臨遺跡等で類例が見られ、気屋II式土器として型式設定されているものと考えたい。

後期後葉の土器は精製の深鉢形土器と条痕施文の深鉢形土器が確認されている。246の精製土器は直線的に外傾する体部から一度内屈して、それから外反する口縁部がつく器形を呈するもので、内屈する部位に横位の沈線を3条施し、それを短線と楔形文で区切っている。八日市新保式に比定されるものと考えたい。247～250は条痕文土器で、櫛歯状の細い条線を施すもの（247・248）と太い条線を施すもの（249・250）とが存在する。

251～253は口唇部に刻目をもつ土器である。251は口唇部上端に棒状工具を押し付けたような刻目をもつ



第46図 楢文時代後期の土器拓影図 (1 / 3)



第47図 土製品実測図 (1 / 2)

単節斜縄文を施す土器で、焼成・胎土とも良く、黄褐色の色調を示す点は先に述べた条痕文土器と同じ特徴を示す。また、内面は丁寧な窓撫で調整を施しており、後期の所産の可能性が高い。252・253は口唇部外側に窓状工具で切り込みを入れた刻目をもつもので、器面に粘土接合痕を残し、調整が粗雑である。縄文は単節斜縄文で、251よりも太い原体を使用しており、古い様相をもつ。刻目をもつ縄文施文の土器として一括して後期の土器の中で述べたが、早・前期の粗製深鉢として位置付けられる可能性が高く、早・前期に位置付けられる打製石斧（第60図94・95）の出土もこれを裏付ける要因となろう。

（3）土製品（第47図254・255）

土製品は土偶1点と耳飾りと思われるもの1点が出土している。

土偶（254）は肩部から上と脚部そして片側の乳房を欠損する板状土偶の破片で、法量は残存長6cm、幅5cm、厚さ1.5cmを測る。文様は大きく突出した乳房に沿って細い半隆起線を逆U字状に描く。そして、その下を2条の縱位半隆起線を引いた後、縱線を中心とした2条の半円を両側に描いて腹部文様を形成する。また、右上には斜めに半隆起線が施されており、肩部文様と思われる。

耳飾り状土製品（255）は高さ4.3cm、推定径6cmを測るもので、半分以上を欠損する。端部はやや肥厚して平坦面を形成するもので、外面は単節斜縄文を施している。滑車状耳飾りの可能性が強いものの、径が大きいことと中央でくびれをもたないことを考えれば、鉢形土器の台部の可能性もある。

（4）胎土について（第1表）

縄文土器の胎土について、混入物の種類とその量によって以下のように分類してみた。ただし、今回観察した土器は図示したもののみを扱った。混入物は長石と石英と焼土粒がその主なもので、長石は風化を受けているものを長石a、風化を受けていない角張ったものを長石bとし、石英も風化を受けているものを石英a、風化を受けていないものを石英bとした。

Aは長石a、石英aを含む胎土で、その含有量によって、多量に含むもの（A-1）、通有量含むもの（A-2）、少量含むもの（A-3）の3つに分類可能である。Bは白色の微粒子と長石aを含む胎土で、その含有量によって5つに分類可能である。B-1はどちらも多量に含むもの。B-2は通有量含むもの。B-3は少量含むもの。B-4は白色微粒子を微量、長石aを少量含むもの。B-5はどちらも微量含むもの。Cは長石aと焼土粒を含む胎土で、その含有量によって、多量に含むもの（C-1）、通有量含むもの（C-2）、少量含むもの（C-3）、微量含むもの（C-4）の4つに分類可能である。DはC-1と同様の胎土に大粒の石英aが混入された胎土で、石英aを多量に含むD-1と石英aを少量含むD-2の2つに分けられる。EはC-3と同様の胎土に撥形の黒色微粒子が混入された胎土で、この粒子を多量に含むE-1と少量含むE-2の2つに分けられる。Fは長石bと少量の石英bを含む胎土で、長石bを多量に含むF-1と長石bを通有量含むF-2に分けられる。Gは混入物を含まない胎土である。

以上に分類できるわけだが、風化を受けている鉱物で構成される一群（A、B、C、D）と風化を受け

第1表 繩文土器出土地点・胎土観察表

(1) 繩文時代中期の土器

文様帯をもつ深鉢形土器

団版番号	土器番号	出土地点	胎土	団版番号	土器番号	出土地点	胎土	団版番号	土器番号	出土地点	胎土
第29団	1	1住床面	C-2	第31団	40	4集上層	D-2	第33団	79	7F1Gr	B-4
	2	4集地山直上	C-2		41	16集下層	C-2		80	1住上層～中層	D-1
第30団	3	1住下層	B-4		42	17集中層	B-3		81	2住中層	B-3
	4	1住中層～下層	A-2		43	2住	A-2		82	7C9Gr	B-3
	5	2集上層～下層	B-3		44	2住上層	A-2		83	5C8Gr	A-2
	6	2集中層～下層	B-3		45	2住床面・P-2	B-3		84	表土中	E-2
	7	1住下層	B-4		46	9集下層	B-2		85	2住中層	A-3
	8	1住床面	C-1		47	1住下層	B-3		86	2住中層	A-3
	9	1住上層	B-3		48	1住下層	C-1		87	2住中層	A-2
	10	17集上層	B-2		49	4Iスパン	A-2		88	2住床面	A-2
	11	16集上層	C-1		50	1住床面	C-3		89	2住上層	B-2
	12	1集中層	A-1		51	1住上層	A-3		90	1住中層	A-1
	13	1住中層	B-2		52	7C9Gr	A-2		91	1住中層	A-2
第31団	14	1住中層	C-2	第32団	53	3Iスパン	A-3	第34団	92	1住床面	C-3
	15	1住中層	C-2		54	3住中層	C-2		93	1住床面	C-3
	16	1住上層	B-4		55	6集上層	A-2		94	1住床面	C-3
	17	5D4Gr	B-4		56	2集中層	B-2		95	1住上層	C-3
	18	18集複乱土中	B-4		57	1住上層	A-3		96	3集下層	B-4
	19	1住上層	B-3		58	3住下層	C-2		97	5集中層	B-4
	20	1住上層	B-2		59	7B5Gr	C-3		98	2住床面	B-2
	21	6Kスパン	F-1		60	7B9Gr	B-3		99	4C6Gr	B-4
	22	3Iスパン	B-1		61	3住上層	C-3		100	17集下層	B-4
	23	3Iスパン	D-2		62	1住下層	B-3		101	18集上層	B-4
	24	4集上層	C-1		63	18集下層	C-2		102	2住上層	C-4
	25	1集下層	B-2		64	7Iスパン	C-3		103	13集中層	B-5
第33団	26	7C8Gr	D-1		65	2集中層～下層	B-3	第35団	104	16集上層	B-4
	27	18集下層	A-2		66	2集中層	C-1		105	7B5Gr	C-1
	28	3Iスパン	B-4		67	2集中層	C-1		106	3住上層～中層	C-2
	29	1住上層	A-1		68	6M15Gr	A-1		107	3住下層	B-4
	30	4Iスパン	D-2		69	3Iスパン	A-1		108	6C7Gr	A-2
	31	7E12Gr	A-1		70	4B9Gr	C-2		109	5集上層	A-2
	32	1住下層	B-1		71	7Iスパン	A-3		110	5集中層	A-2
	33	1住上層	B-2		72	4Kスパン	A-1		111	5集中層	A-2
	34	1住中層	C-2		73	5集上層	A-1		112	5集中層	A-2
	35	4B9Gr	B-5		74	3Iスパン	A-2		113	3住上層	B-4
	36	10集中層	C-2		75	3住上層	B-4		114	7C9Gr	A-3
	37	9集上層	B-4		76	1住中層	D-1		115	1住上層	C-4
	38	7N8Gr	B-1		77	4Iスパン	B-5		116	4C7Gr	A-1
	39	16集上層	C-2		78	2住P-2上層	A-2		117	1住下層・P-1	A-1

図版番号	土器番号	出土地点	胎土	図版番号	土器番号	出土地点	胎土	図版番号	土器番号	出土地点	胎土
第35図	118	1住上層	A-2	第35図	126	4 B 12 Gr	B-3	第35図	134	4集中層	C-3
	119	1住上層・P-1	A-1		127	2住下層	A-2		135	7集中層	A-2
	120	1住上層	A-3		128	2住中層	C-3		136	2集中層	A-2
	121	1住下層	A-1		129	7 M 12 Gr	A-1		137	5 D 1 Gr	A-2
	122	2住上層	A-2		130	1住下層	C-4		138	17集中層	A-2
	123	1集中層	C-3		131	5集中層	A-2		139	2集中層	A-2
	124	1住上層	C-4		132	2住中層	B-4		140	4 D 9 Gr	B-5
	125	3住下層	C-3		133	1住上層	C-1				

粗製の深鉢形土器

図版番号	土器番号	出土地点	胎土	図版番号	土器番号	出土地点	胎土	図版番号	土器番号	出土地点	胎土
第37図	141	2住中層	C-2	第38図	156	1住床面	C-3	第39図	171	4集中層	C-2
	142	7里上層	B-3		157	16集中層	C-2		172	1住中層～床面	C-3
	143	1住床面	B-3		158	1住床面	C-3		173	2集中層～下層	C-2
	144	1住中層	C-3		159	1住下層	C-3		174	1住床面	C-2
	145	1住上層	A-2		160	2住中層	A-3		175	1住床面	C-1
	146	14集中層	C-3		161	1住床面	C-3		176	5 C 5 + 12 Gr	C-3
	147	21集中層	B-3		162	1住床面	C-3		177	1住中層	C-4
	148	1住中層	B-5		163	11集中層	C-2		178	17集中層	A-3
第38図	149	14集中層～下層	C-2		164	11集中層	C-4	第40図	179	15集中層	C-1
	150	2住ビット上層	C-2		165	1住中層～床面	C-3		180	1住上層～床面	B-3
	151	3集中層～床面	C-2		166	1住下層～床面	C-2		181	1住中層	B-4
	152	1住下層	D-2		167	1集中層～下層	B-3		182	2住P-2上層	B-5
	153	1住上層～中層	A-2		168	10集中層	C-2		183	17集中層～下層	C-2
	154	1住上層	A-2		169	1住下層	C-3		184	1住中層	B-2
	155	3集中層～中	A-2		170	1住下層	D-2		185	1住中層	A-1

底部付近深鉢形土器

図版番号	土器番号	出土地点	胎土	図版番号	土器番号	出土地点	胎土	図版番号	土器番号	出土地点	胎土
第41図	186	1住中層～下層	C-2	第42図	195	2住ビット中	C-1	第42図	204	2集中層	D-2
	187	2住上層	B-4		196	1住上層～下層	C-2		205	2住中層	A-1
	188	1住床面	B-4		197	1住中層	B-2		206	2集中層	C-2
	189	4 F 15 + 16 Gr	B-4		198	1住上層	D-2		207	2住上層	C-3
	190	16集中層～下層	C-2		199	1住床面	C-2		208	5 C スパン	G
	191	1集中層	C-3		200	15集中層	B-2		209	7 B 6 Gr	C-1
	192	14集中層	B-3		201	6 C スパン	B-2		210	8 C 10 Gr	A-1
	193	16集中層山直上	C-2		202	16集中層山直上	B-2		211	18集中層	D-2
	194	1住中層	B-3		203	7集中層	B-2				

浅鉢形土器

図版番号	土器番号	出土地点	胎土	図版番号	土器番号	出土地点	胎土	図版番号	土器番号	出土地点	胎土
第43図	212	1住中層	F-1	第44図	222	13集中層	F-1	第45図	232	2住上層	B-4
	213	4集床面	D-2		223	14墓地山直上	F-2		233	7F1Gr	E-2
	214	1住床面	F-1		224	17墓上層	A-1		234	1住上層	F-2
	215	1住P-1下層	F-1		225	4C8Gr	A-1		235	4D8Gr	A-2
	216	7C13Gr	D-2		226	1住中層	A-1		236	17集中層	F-1
	217	1住	A-2		227	2住中層	A-2		237	1住上層	A-1
第44図	218	1住床面	C-2	第45図	228	2住中層~床面	A-1		238	1住上層	A-3
	219	7E6Gr	A-2		229	2住上層	A-2		239	5C1Gr	C-1
	220	7E3Gr	A-2		230	7C15Gr	C-2		240	7Iスパン	A-2
	221	2住ピット上層	F-2		231	17墓上層	F-1				

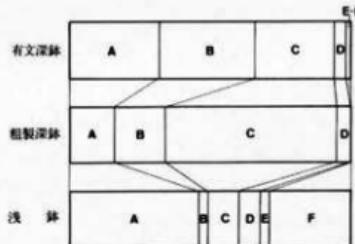
(2) 繩文時代後期の土器

図版番号	土器番号	出土地点	胎土	図版番号	土器番号	出土地点	胎土	図版番号	土器番号	出土地点	胎土
第46図	241	表土	A-2	第46図	246	9集中層~下層	A-1	第46図	250	表土	A-1
	242	表土	A-2		247	表土	A-1		251	表土	A-2
	243	表土	A-1		248	表土	A-1		252	9E5Gr	A-1
	244	7F15Gr	A-1		249	表土	A-1		253	9E5Gr	A-1
	245	8G8Gr	A-1								

(3) 土 製 品

図版番号	土器番号	出土地点	胎土
第47図	254	3Tスパン	E-1
	255	2住上層~中層	C-4

ていない一群(F)とに大別できる。これは粘土を採取する場所によるもので、風化を受けているものは水性層にあって摩滅が進んだ粒子で構成され、風化を受けっていないものは堆積層にあって鉱物の結晶のかたちをそのままとどめるもので構成されている。これをグラフに対比すると深鉢形土器にはFが殆ど存在しないのに対し、浅鉢形土器には一定量存在している。また風化を受けた一群のなかにも鉱物の組み合わせによつて異なる組成を示す。有文深鉢形土器ではA B Cがほぼ均等の割合を示すのに対し、粗製深鉢形土器ではCが6割以上を占め、浅鉢形土器ではAが5割近くを占める。このような、器種によって胎土が異なると



第48図 器種別胎土組成グラフ(%)

いう結果をどう判断するか問題の多いことではあるが、この胎土観察が図示したもののみを対象としており、十分な分析を行っていないことから、ここでは事実報告のみにとどめる。なお、このグラフは縄文時代中期の品種の解るもののみを扱ったものである。

(5) 小 結

以上、分類説明してきた土器についてまとめるにあたり、その中心の時代である縄文時代中期前葉から中葉の土器群の特徴と位置について述べ、この節の結びとしたい。

当該期の土器は深鉢と浅鉢の2器種で構成され、パンケースの量で対比すると、深鉢が58ケース、浅鉢が7ケースを数え、深鉢中心の器種組成を示す。

深鉢は文様帯をもつもの（以下、有文深鉢とする）と粗製土器があり、器形で異なった特徴を示す。有文はA種とした波状口縁が主体的で、その中でも1の土器のように口縁端部で内渦する点や胴部で膨らみをもち底部で急にすばまる点を代表的なものとしてあげたい。このような器形はB種とした平口縁のものにも見られ、有文深鉢の主体的な器形として位置付けられる。このほかにもA種で底部から口縁部まで直線的に立ち上がるるものや胴部が筒状になるもの、B種で口縁部で外反するもの（2）が存在するが、従的な器形として捉えたい。粗製は器形で6種に分類しているが、波状口縁を呈するものはA種としたもののみで、大半が平口縁を呈す。器形は有文で見られたような口縁端部で内渦するものが見られず、B・C種を代表的な器形と考えたい。しかし、D・E種の器形も一定量存在し、筒状の胴部をもつ器形のものが1つの系統として存在することを示している。

以上、有文と粗製では異なった特徴を挙げることができ、有文はキャリバー状口縁からの流れを、粗製は外反する口縁からの流れをくんだ別系統の土器と言えることができる。しかし、口縁部の形態を除けば、膨らみをもった胴部から底部ですばまる器形が（注10）中心となることは有文・粗製とも同じであり、中期前葉の新しい時期の一般的な器形として位置付けられる。また、波状口縁を多用する傾向は、時期はやや下るが、（注11）（注12）萌生遺跡や藤ノ木遺跡で比較的多く見られることから、1つの地域性として設定できるかもしれない。

ここで、粗製土器にみられる口縁部の特徴的な形態について若干触れておきたい。1つはA～D種にみられる口縁端部に粘土紐を貼付して段を形成する複合口縁状の形態である。これはA～D種の半数近くにみられる口縁部形態であり、粗製深鉢の口縁部成形の主体的な技法として位置付けられる。次に、E種にみられる小突起の形態であるが、口縁端部に2つの突起を対にしたような突起（2種存在）を4単位配するもので、一定量存在する。また、この土器（他の土器にも少量みられるが、）には口辺部に押圧縄文を施文するものが多い点も特徴としてあげられよう。これらの口縁部形態は萌生遺跡の粗製土器に少量存在する程度で、県内ではあまり例をみない形態である。しかし、関東・中部地域では、中期前葉～中葉の粗製深鉢にこのような口縁部形態が散見されるようあり、南加賀地域の土器様相を考えるうえで、1つの手がかりとなりえるだろう。

文様については、口辺部文様体が横帯する一群（a群）と波状口縁の波頂部で隆帯を伴った継位文様体

^(注13) を配して口辺部を分割する一群（b群）、b群と同様の縦位文様体が胴部下位まで垂下する一群（c群）、口辺部をB字状的な縦分割の文様で構成する一群（b群）、半隆起線や隆帶で区画文を構成する一群（e群）に大別できる。a群は口辺部1類B種、2類、6類B種がこれに属し、胴部の1類、2類の前者、6類がこの一群の系統に属すると考えられ、口辺部と胴部を分割し、口辺部は横、胴部は縦の文様を配することを基本とする。b群は口辺部1類A種、3類A種、6類A種がこれに属し、胴部はa群としたものに4類が加わると想定したい。b群はa群とした口辺部と胴部の割り付けを基本とするものだが、波状口縁に伴って口辺部に縦割り付けが導入されたものと評価したい。さて、ここでa群とb群において主体的な口辺部文様を構成する横位楔形無文帯（1類）と蓮華状文（6類）について若干触れておきたい。1類文様はa群としたものが少なく、大半をb群として位置付けられると考えている。このような文様構成は口辺部縦割り付け後に施文するものだが、縦位に胴部へ垂下するものは確認できていない。しかし、胴部のB字状的な文様に楔形刻目を施すものがあり、口辺部の楔形無文帯が胴部へ降下したものとして評価できるかもしれない。6類文様ではb群に属するものは確認されているが、a群が存在するかは推定の域を出ない。しかし、平口縁のものが横帯する可能性をもち、文様をしっかりと描出する点でもやや古手の様相を呈す。b群に属するものは1類文様と同様、縦割り付けされた後の横位文様で、頭部付近に施文するものが多い。施文技法としてはしっかりと蓮弁を作り出しているa・bのものが多く、c～fがこれから派生した退化的な文様として位置付けられよう。c群は口辺部5類A種と胴部2類の後者がこれに属し、口辺部と胴部文様の分割が崩れ始めたものと考えたい。b群は2の土器でやや特異な文様を構成するが、b群と近い段階のものとして評価したい。e群は口辺部1類A種の14・15、4類B種の36、7類がこれに属する。II群土器とした新道系の土器もこの系統に属するが、新道系土器の導入によって生み出された文様構成と評価したい。また、これらのほかに胴部文様が斜めや縦に流れる隆帶に伴って渦巻状や斜めに施され、縦を基本とする胴部文様が崩れる胴部3類、5類の一群（f群）が存在する。

これら土器群は文様構成からa群→b群→c群→f群の系統的な流れを想定することができる。つまり、a群は横と縦の割り付けを忠実に守る点と施文文様から新崎II式に位置付けられ、f群は胴部の縦割り付けが崩れ、流れる隆帶に沿った文様を構成する点から上山田I式または上山田II式に位置付けられると考える。このa群からf群の流れの中で、b群そしてc群の位置付けが問題となるのであるが、b群は波状口縁という器形から縦割り付けが早くに導入されたもので、基本的には口辺部と胴部を分割する点や施文文様でa群と大きく分ける必要性のないものと考え、新崎II式の範疇で捉えていいものと考えたい。しかし、c群は上記した割り付けが崩れ、口辺部と胴部の分割が崩れ始める段階と評価し、上山田I式に位置付けて妥当と考える。さて、この他の土器群はこの系統に属さないものだが、d群、e群ともに縦の区画が入る点、口辺部と胴部を分割する点ではb群と同じである。新崎式の文様構成の基本が崩れていないことを考えて、新崎II式に入れて妥当と考える。

浅鉢については器形において1～3類の3つに分けることができ、文様構成と強い関連性をもつものと考える。I類は半隆起線で横帯または渦巻状文、刻目を入れた隆帶を配するが多く、比較的幅の広い

文様体を構成する。無文のものもあるが、満巻状文等の装飾性の強い文様を展開する。2類は屈曲部より上でやや幅狭の方形区画を中心とした文様を構成するもので、区画内は楔形刻目文を施すことが多く、口縁端部に玉抱三叉文を彫去することが多い。この器形は無文のものも存在するが、無文のものでも屈曲部に稜線を形成し、口縁部と区画する方向性が見られる。2類器形は深鉢の口辺部に構成される楔形無文帯を浅鉢器形に導入することによって1類器形から派生したものと評価したい。3類は無文、縄文施文のものを基本とするが、口縁部に幅の狭い文様を施す可能性をもつ。概して装飾性に乏しい器形で、浅鉢器形の出現当初から連続として作られてきた器形と考えたい。なお、3類に入れたが、波状口縁を呈する218は特殊な器形をもつ。口縁が波頂部を角として方形を呈するもので、これは有文深鉢に多く見られる波状口縁の形態が浅鉢器形に導入されたものと評価したい。

次に、文様についてであるが、222～226・228でみられたような半隆起線で方形の区画を施し、なかを楔形刻目文、無文のままであるもの（a文様）、213のような半隆起線で横帶、満巻状文を施すもの（b-1文様）、231のようにb-1文様に刻目隆帯が伴うもの（b-2文様）、219・220のように横位半隆起線で区画された中を縱位半隆起線で埋める蓮華状文的な文様を構成するもの（c文様）、212のように綾杉刻目隆帯を深鉢の7類的な文様で配し、区画された中を鋸歯状形去文で充填するもの（d文様）の4系統のものが存在する。a文様は深鉢の1類文様と同系統のものと考えられ、b-2文様は深鉢のなかに刻目隆帯が満巻状に展開する段階にb-1から派生した文様と考えたい。c文様、d文様については前で述べたおり、それぞれ深鉢の蓮華状文（f）、7類文様と同系統のものと考えられる。

これらの器形と文様から1類器形b-1文様及びc文様と2類器形a文様を深鉢a群・b群土器に対応できると考え、1類器形b-2文様とd文様をそれに後続するものとして考えたい。

以上、縄文時代中期前葉～中葉の土器についてまとめてきたわけだが、ここで一番問題とされたのが、新崎式と上山田式の型式設定の問題である。新崎式と上山田式の型式概念は細分化の段階で、細分された型式名称の混乱から多くの誤解を招いて来たわけであるが、近年新崎式をI・II式に、上山田式をI・II式に細分することで定着する傾向にある。しかし、新崎II式と上山田I式の画期については、未だ共通理解を得られる段階ではなく、この画期の一つの契機とする新道系土器を新崎II式に入れる考え方と上山田I式に入る考え方^(注14)が対立している現状にある。このような状況下で、2つの型式の過渡期的様相をもつ当土器群をどこに位置付けるか問題となったわけであるが、新崎式と上山田式の画期を口辺部文様と胴部文様が分割していることと口辺部から胴部へ文様が流れていることを型式概念の基本として区分した。なお、新道系土器及びその影響下において生まれたと思われる区画文（e群）の土器については新崎式の土器が一つのインパクトによって崩れ始める段階として捉え、新崎式の末期的様相として捉えた。

最後に、土器の出土地点と遺跡内における土器群の分布傾向について若干触れておきたい。遺跡全体としてはa群・b群とした土器が大半を占めると思われる。この中で、B地区ではa群土器とした新崎II式の中でもやや古手の傾向の土器が多く、この時期を中心とした遺構の存在が想定できる。これに対し、A地区では3軒の住居跡を中心として主にb群土器が広く分布する傾向があり、若干量c群・d群・e群・

f群土器がこれにまじる。1号住居跡については、床面から住居廃絶時に遺棄されたと思われる7個体の土器（1・143・161・162・180・214・218）が、そして、覆土中で完形に近いものが、4個体（3・175・172・212）出土している。床面出土土器はb群土器に属する有文深鉢が1個体、粗製深鉢が4個体、無文浅鉢が2個体であり、当時の器種組成を知るうえで興味深いセットを示していると言えよう。また、覆土中の土器は3のa群土器とした有文深鉢や212のc群・f群土器併行とした浅鉢等の完形と、b群土器に位置付けられる破片などがある。他の2軒の住居跡はともに床面一括の資料ではなく、時期を比定することは困難であるが、覆土中の土器がb群土器に属するものが多いことや周辺の遺物集中についても住居跡の覆土中の土器と同様の土器組成を示すこと、そして住居形態や集落の構成単位から考えても、3軒の住居跡を同時期存在と捉らえて妥当と考える。

当遺跡の中で上山田式土器としてc群・f群土器を位置付けているわけだが、これらの土器の分布は前でも述べたようにA地区にまばらに存在するのであるが、特に、2号住居跡の周辺に多く見られる傾向がある。2号住居跡の土器の分布は南東側にまとまることは第Ⅱ章の遺構で述べたとおりであるが、この中にc群・f群土器がややまとまりをもって出土している。2号住居跡は第Ⅶ章の考察の部分でも触れるが、柱穴の配列に不規則な点が見られ、上山田式期に位置付けられる住居跡が2号住居跡と重複していた可能性をもつ。

- 注 (1) 山田芳和 1986「第6章 第1節 9. 第9群土器 新崎式期」「真駒遺跡」能登町教育委員会・真駒遺跡発掘調査団
(2) 南氏は蓮華文の施文方法から彌刻蓮華文、押印蓮華文、残部処理蓮華文に分類している（南 久和 1976「北陸の縄文中期前葉の編年に関する一試論」『石川考古学研究会会誌』第19号）。今回分類したものを照合すると、b群が有押印蓮華文に、a群とd群が刻印蓮華文に属するが、必ずしもこの定義に合致するものではない。
(3) 南 久和 1977「北陸の縄文中期にみられる連続刺突弦文について」『石川考古学研究会会誌』第20号
(4) 富山県教育委員会 1977「富山県新波市嚴照寺遺跡緊急発掘調査概要」
(5) 底部圧痕については川端敦子氏の分類（川端敦子 1981「第5章第1節 6. 底部と圧痕」「野々市町御経塚遺跡」野々市町教育委員会）を参照した。
(6) 南氏が「真駒遺跡」の「第10群土器 上山田式・天神山式期」の項の中で使用された文様の用語を採用した。
(7) 末沢氏は赤浦遺跡（七尾市教育委員会 1977「赤浦遺跡」）や上田うまばら遺跡（押水町教育委員会 1983「上田うまばら遺跡」）等の資料が気屋式に後続するものとして気屋II式を設定している（末沢義光 1986「第6章 第1節 9. 第15群土器 気屋II式期」「真駒遺跡」能登町教育委員会・真駒遺跡発掘調査団）。
(8) 口頭部に横走る沈線を短線や複形文で区切る特徴は、貝殻圧痕文で区切る御経塚I・II式に後続する八日市新保I・II式に見られる特徴で、I式とII式とのどちらに入るものか不明であったため、八日市新保式として位置付けた（高橋勝喜 1983「第5章第1節縄文土器」「野々市町御経塚遺跡」野々市町教育委員会）。
(9) このような歴土分析は石川県立埋蔵文化財センターの湯尻、北野画氏より深鉢形土器と浅鉢形土器とでは胎土が異なるといった指摘を受けて、実施したものであるが、有文深鉢と粗製深鉢とでも異なる特徴を示すことが理解された。今後、より一層検討して行くべき問題であろう。
⑩ 器形については島田氏の考察（島田修一 1985「北陸地方における中期前葉土器器形の系譜と変遷について」「富山県八尾町長山遺跡発掘調査を報告」八尾町教育委員会）を参照した。
⑪ 長口町教育委員会 1978「萬生遺跡」
⑫ 加賀市教育委員会 1985「藤の木遺跡」
⑬ 西野氏は「萬生遺跡」の中で、古府式期に属する波状口縁を呈する深鉢において、その波頂部に粘土紐の装飾が盛行することを指摘している。この粘土紐の装飾は当遺跡でb群としたものとは異なるものであるが、同系統のもとで発展したものと考えたい。
⑭ 学史的な流れについては高塙氏の「北陸の縄文土器編年」（能都町教育委員会・真駒遺跡発掘調査団 1986「真駒遺跡」）、山田氏の新崎式期についての考察（山田氏前掲報告）、南氏の「北陸の縄文時代中期の編年について」（南 久和 1985「北陸の縄文時代中期の編年」転載書房）にもとづいて記した。

第2節 石 器

本遺跡で検出された石の総数は5,340点で、その内訳は、石器500点（内、礫石器372点）、剝片類3,524点、石核124点、礫石器の素材となりうる円礫類262点、その他の礫・石片930点である。量的にも内容的にも非常に充実しているといえる。分布の点からも捉えられたように、本遺跡内では多量の石器製作活動が展開されており、当時の石器にかかる生活様態の復元に好資料が提示された。以下に器種別の諸特徴を概述し、それらから得られる構造的特徴をまとめてみたい。

（1）縄文時代草創期の石器（第54図1～3）

1は有舌尖頭器で、形態的に確実な当該期資料と言える。小型の柳葉形を呈し、両側縁は微細な鋸歯状縁となる。両端部が欠損しているが、基部は明確な舌部を形成することなく収束するものと思われ、推定復元長は7cm程度となろう。調整加工は、表裏ともに側縁の微細調整剝離を除けば、下半部は右→左、上半部は左→右と調整順序の転換がみられる。調整剝離痕は、いたって入念ではあるが、極状剝離の連続は認められない。長さ53.6mm、幅11.7mm、厚さ5.0mm、重さ3.71gを計る。安山岩製。4C-6グリッド。

2は小型鎌状の有舌尖頭器と考えられるものであるが、確認は得られない。石鎌としては、本遺跡で唯一安山岩を用いており区別した。緩弧状の両側縁と緩いえぐりによる薄い舌部を持つ。表裏ともに、基部側において素材面の一部を残す。長さ25.6mm、幅15.9mm、厚さ3.3mm、重さ1.20gを計る。安山岩製。7F-2グリッド。

3は形態的には単なる横長剝片であるが、風化が著しく進行している安山岩で、表面微小孔の発達は当該期をさらに遡る瀬戸内系石器群を想起させる。打面は線状に残存し、表面下端の剝離痕はポジティブな面の可能性が強い。長さ22.6mm、幅34.6mm、厚さ6.6mm、重さ4.24gを計る。安山岩製。2号住居跡上層。

（2）石 鎌（第55図4～35、第56図36～44）

石鎌は製品で34点検出している。1号住居跡で試みたフルイによる水浄選別で得られた資料も多く、遺跡全体での本来の実数は、製作に係わる剝片類の量からみても、かなりの点数が予測される。

石鎌形態の主体は凹基無茎鎌で、平基のものが若干含まれる。概略以下のように分類される。

A：直線的な二側縁が鋭角的な40°前後の先端角を形成し、基部のえぐりは浅く平基に近いもの。

B：Aと同様の身部をもつが、基部のえぐりが比較的深いもの。脚端は尖鋭となる。また、脚部が内湾ぎみの形をとるものをB1とする。

C：緩い弧状の二側縁が比較的鋭角的な先端角を形成し、基部のえぐりの深いもの。

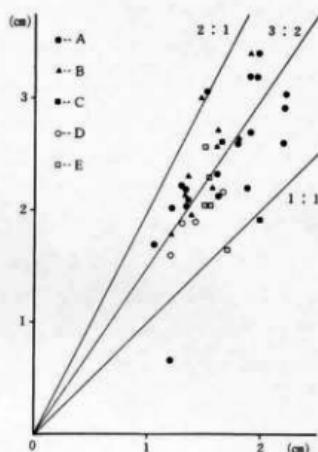
D：Cと同様の身部をもつが、基部のえぐりが比較的深いもの。脚端は尖鋭となる。

E：緩い弧状の二側縁がやや鈍い先端角を形成し、えぐり部及び脚端が丸みを帯びるもの。

長さは最小で17.0mm、最大で34.0mmを計り、長幅比はほぼ3:2付近に集中する。また、長さが30mm前後の大型のものはA・B類に限られ、長幅比も2:1に寄り付く傾向がある。脚部の形態では、微妙な差はあるものの、左右非対称となるものがある。11・13・16・19・21・24が該当し、製作途上での損傷の多い脚部において、少なくとも一方での返し機能の充足を求める結果であろうか。

チャートを用いた10・22、黒曜石を用いた26・27は、本遺跡内での製作に係わる母岩は存在しない。

石鏨の未製品(36~44)によれば、素材の用い方での規則性はないが、調整手順として、先端部調整の後最終的に脚部を作出していたようである。この点は、製品の最終調整痕が返し部作出の挿入加工である場合が多いことからも読み取ることができる。



第49図 石鏨長幅比

(3) 尖頭器 (第56図45~52)・両面加工石器 (第57図53)

石鏨・石錐とは形態的に区別され、両面加工によって先端部の作出を意図していると思われるものを一括した。内容としてはばらつきがあり、器種レベルでの包括は成し得ない。

45~49は未製品的な調整の在り方であるが、定型的な槍状の石器が存在しない以上明確にはできない。51も法量的には石鏨とは成り得ず、別種の刺突具があったようである。

50・52は、先端部に素材の打面が小さく残置されており、プロポーションも刺突具としては考え難い。53の両面加工石器とともに、削器的な機能を有していたかもしれない。

(4) 石錐 (第57図54~65、第58図66~70)

本遺跡での石錐の充実は特筆すべきもので、剝片石器の組成上石鏨に次いで主体を成すものである。形態的には以下のように分類される。

A：つまみ部から連続する直線的な二側縁が鋭角に交わる逆三角形の刃部をもち、刃部の表裏は面的加工で覆われ、断面はレンズ状をなすもの。

B：つまみ部から刃部への変換部が一旦挿入し、刃部幅の変移はAより少ない。刃部の加工や断面はAと同様である。

C：棒状の刃部をもち、断面が四角形から不整な円形を呈するもの。

D：素材の形状をさほど修正することなく、一端に、微細加工による突出した小規模な刃部を作出するもの。断面は三角形を呈する。

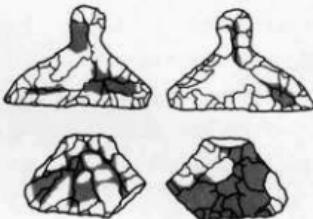
各形態は、それぞれ個別の機能的役割を担っていたものと思われる。A類は円錐形孔の作出や穿孔部の拡大に用いられるものであるが、右側縁では表に、左側縁では裏にと、使用痕状の微細剥離が錯交する位置に認められ、使用時での回転方向を示唆する。

(5) 石匙 (第58図72~76)

検出点数は少ないが、72のような精製品や縦形・横形の両形態も存在する。

74は損傷・風化が激しく、表面の状況は判然としないが、ほぼ完形に近い72・76では、右図のような部位に後上を中心とした著しい摩滅痕が観察される。

71は石錐か石匙どちらかの未製品と考えられる。



第50図 石匙磨滅痕部位

(6) スクレイパー (第58図77、第59図78~80)

剥片末端部に弧状に急斜な加工を施す、いわゆるエンドスクレイパー (78・80) と、側縁部に連続するやや平坦な加工を施すサイドスクレイパー (79) がある。いずれも、比較的整った形態・属性を維持している。77は内湾する折断面を活用したもので、反る返る一端から表面に向けて平坦な加工を加え、結果として搔き取るような機能を備えた刃先を作出している。

(7) 鋸歯縁石器 (第59図81~85)

大きくは、スクレイパーの範囲内で捉てもよいものである。急斜で荒い加工の連続によって得られた鋸歯状縁を持ち、スクレイパーのような細調整による補正は行われない。折断剥片を素材とし、一端に90°近い角部を形成する小型のもの (81・82) と、折断剥片によらない大型のもの (84)、そして鋸歯縁を継長剥片末端部に弧状に作出したもの (83・85) の3種がある。

(8) 横形石器 (第59図86・87、第60図88・89)

表裏に両極剥離痕を有し、その加点部が線状をなすものである。従って両極を結ぶ断面はレンズ状となる。88は裏面に素材のポジティブ面を一部残しており、上下方向からのみの加点痕を有す。外は、四方からの剥離痕を有するもので、表裏ともに、ネガティブ面によってのみ構成される。

(9) 異形石器 (第60図90)

横長剥片を素材とし、打面部と末端部に挟り込むように比較的平坦な調整を表裏に加えて、分銅形に近い形態を作出したものである。上下には、素材自体の鋭い縁辺が残置されている。文字どおり、機能・用途は不明である。

(1) その他の石製品 (第60図91~93)

91は磨製垂飾品で、底辺は両面擦り切りの後、折り取っていることがわかる。穿孔は両面から施されている。同じく垂飾品として、93の丸玉が検出されている。

92は棒状の磨製品で、両端は丸く仕上げられている。穿孔はなく、性格不明である。

(11) 打製石斧 (第60図94・95、第61図96~99)

点数は6点と少ない。また、完形を呈するのは一点のみで、形態組成は判然としないが、撥形・短冊形・分銅形の各種が存在したようである。

94・95は、他とは区別されるべき内容をもっている。両者とも、刃部表裏には使用による著しい摩耗痕をとどめており、光沢を有するほどである。刃部形態は、両端にやや丸みをもたせた直刃に近く、加工とも使用痕ともとれる浅い剥離痕をとどめるのみで、素材自体が有する鋭利な縁辺を充分に活用している。^(註1)全体の形状や諸属性は東北地方の早・前期に多い、トランシェ様石器あるいは石窓と呼ばれるものを想起させる。本遺跡でも、早期の可能性の強い土器 (第46図252・253) が検出されており、それとの共伴関係を積極的に評価しておきたい。いずれにしても、東北系の石器として位置付けられる可能性が強く、本石器検出の意義は大きい。

(12) 磨製石斧 (第62図100~111)

乳棒状磨製石斧と思われるものが1点存在する (102) 他は定角式磨製石斧で、破片を含めて13点の検出であるが、完形で15cmをこえる大形のものが調査中に1点盗難にあっている。全てのものが、なんらかの損傷を被っており、廃棄に属するものばかりと思われる。刃部の形態は、円刃に近いもの (103・105) と偏刃となるもの (101・104・109) とがあり、後者は損傷部への再研磨を経て形成された可能性がある。全体をとおして鎬の種は判然としない。また、基端部には例外なく敲打痕がみとめられる。唯一106の側縁部では、擦り切り技術の痕跡が認められる。

(13) 石 鍤 (第63図113~第67図189)

本遺跡の石器組成で主体を占めており、全て自然礫を素材とした礫石鍤である。総数237点で、素材となる扁平礫も146点を数える。切目石鍤が1点のみ検出されている (189) が、他は全て打欠石鍤で占められる。概ね、以下のように分類される。

A : 長軸両端に抉入剥離を加えた通常の打欠石鍤。

B : 長軸の一端のみに抉入剥離があるもの。相対する端部に敲打痕を留めるものがあり、これをB 1とする。

C : 抉入剥離が認められず、両端に敲打痕をもつもの。一端のみのものをC 1とする。

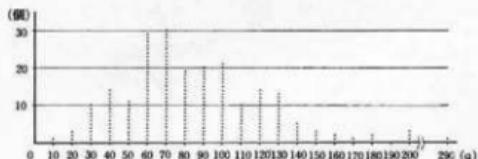
D : 四方に抉入剥離がほどこされるもの。

BとCについては、未製品の可能性を指摘しておきたい。石錘の製作にあたっては、台石とハンマーを使用した両極剥離によっていたと思われる。ただ、両端に敲打痕のみを残しておきながら、剥離にまで至っていないものが多量に存在するのは不自然であろう。1号住居跡での出土状態も念頭に置いて考えてみると、両極の敲打と剥離の作業には、製作手順としての明確な時間差が存在していたとも推測される。即ち、両極の敲打は、スムーズな抉入剥離を行うため、素材に対し

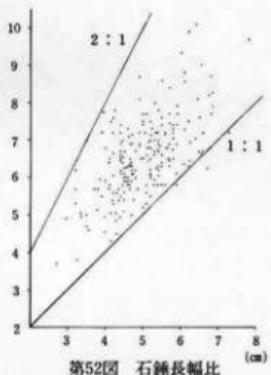
て一次的に施される一種の加撃点調整ではなかろうか。今後の

類例の出土状態に注目したい。

法量的には第52図でみるように、長幅比1:1と2:1の間に殆ど全てが含まれてしまう。また、第51図の重量分布では最小で10g、最大で290gと幅広い分布を示すが、60~100gに数量的ピークが認められる。



第51図 石錘重量分布（一括四捨五入）



第52図 石錘長幅比

(14) 凹 石 (第66図190~193)

検出点数は10点と少なく、明確な凹みを有するものは5点のみ、他は浅い敲打痕のみの未製品的なものである。長辺円に近い直方体に整えられたしっかりとしたものは全て表裏に凹みが有り、さらに、例外なく磨痕が観察される。また、192・193では、側縁全周に敲打痕が認められる。多岐にわたる機能が推測される。^(注2)磨石との類縁性が指摘されよう。

(15) 磨 石 (第67図194~199, 第68図200~201)

総数32点であるが、自然礫として除外したものの中にも、磨痕としての認定のあいまいなものがある。これらを含めた素材となりうる法量を有する自然礫の総数は、116点（むろん、凹石等の素材と共に）である。概略以下のように分類される。

- A : 明確な側面部を有して、両端に丸味を帯びた直方体の形状をとる。本類は全て両面が磨面となる。
- B : 自然のままの扁平円礫を用いて、両面が磨面となるもの。
- C : 自然のままの扁平円礫を用いて、片面が磨面となるもの。
- D : 側縁部に敲打痕を有するもの。

B・C類は概して磨面の発達に乏しい傾向にある。A類を本器種の定型とするならば、むしろ、磨痕を有する礫として、やや距離をおいた認定が必要のように思える。D類では、201のように明らかにハンマーとの共用を示すような敲打痕の在り方を呈する例は別として、200や凹石でみると、定形品の周縁に見られる敲打は、形状修正の調整痕とも考えられる。

(16) 敲打器（第69図202～207、第70図208・209）

石器製作にあたってのいわゆるハンマーストーンである。形態としては、長楕円形或は棒状の礫の両端を機能部位としたもの（A）と、やや扁平な円礫の側縁部を部分的に数ヶ所活用したもの（B）とがある。他に、台石として使用したと考えられる大型のものが2点検出されている。

(17) 石 盆（第70図210～212）

石盆の完形品は無い。破損品として3例図示したが、他におびただしい数の碎片が検出されている。原形を推測することらできず、破片から知りうる断片的な属性からそれと判断できる程度である。熱を受けたものも多く、意識的に破碎したとしか思えない状況である。

(18) 石 核（第71図213～222、第72図223～229）

検出された総点数は124点と多量である。全て不定形の幅広剥片を生産しているが、石核の形状は、比較的变化に富む。概ね以下のように分類される。

A：剥片素材の石核で、表裏両面にむけてほぼ全周から剥片剥離が行われる。

B：打点の直線的な左右移動による剥片剥離が上下から施される横長の作業面を持ち、さらに打面と作業面が交互に入れ替わって剥離作業が進行するため、形状は三角柱状となる。

C：剥片を主とする板状素材の周囲から剥片剥離を行ってゆくもので、Aとの違いは、剥離角が90°に近いため、作業面の長さがそのまま剥片の長さに結びつくことである。

D：楕円亀甲形を呈し、作業面は全周からの剥離作業によって被覆され、面的となる。側縁はチョッピングトゥール状となるが、主要な作業面は一面に限られ、背面への剥離は石核調整程度のもので、多くの場合自然面が残置される。

E：Dのような剥片剥離作業が表裏両面に向けて実施され、断面凸レンズの円盤形石核となるもの。

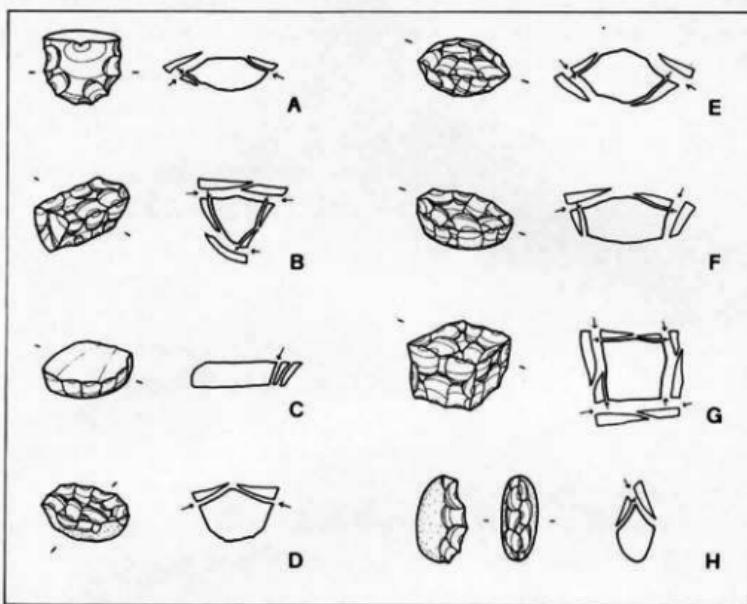
F：Eのような面的な作業面をもち、さらにそこを打面とした周縁での剥離作業が90°近い剥離角をもって進行するもの。

G：90°近い剥離角を維持しながら多方向の打面転位を繰り返すことによって、ほぼ立方体の形状を留めるもの。

H：礫の一端から打面と作業面を交互に入れ替えながら後退して、チョッピングトゥール状となるもの。

I：その他の不定形石核（破碎的なもの）。

以上の各形態を模式化すると下図のようになる。



第53図 石核分類模式図

実測図として示したのは、A : 213~216、B : 223~225、D : 217・218、E : 228、F : 219~221、G : 226・227、H : 222~229である。いずれもその石核が遺棄された時点での形状を分類したにすぎず、例えばAからEへ、DからE・Fへと、剥片剝離作業過程中での形態の変移は当然予想される。しかしながら一方、これらの石核がある一定の量的まとまりをもって分類されることは、石核素材に応じた剥片剝離技術の展開があったこととして評価できる。つまり、不定形剝片の量産を目的とした剥片剝離が、目的剝片を剥取しうる法量をもつ多様な素材に対して、適応していった状況が看取されよう。石核形態と素材との相関では、剝片を素材とするA、分厚い剝片或は分割礫を素材とするD・F、一つの礫を核として進行するG・Hの三者が考えられる。剝離角の関係では、A・E・Hが40~60°と鋭角的であるのに対し、その他は、60~80°となる。この剝離角が大きいとも90°までにはなりえないところに、形態の断面の多くが三角形を呈する理由がある。従って、Gの石核自体が大きい段階では、剝片の多くはヒンジフラクチャーが発達し、打面の転移や石核調整が頻繁となり、複雑な作業面を形成する。そして、作業の進行とともに、やがてBに近い形態に変化するようである。

小 結

各器種の検出点数は下表のとおりである。

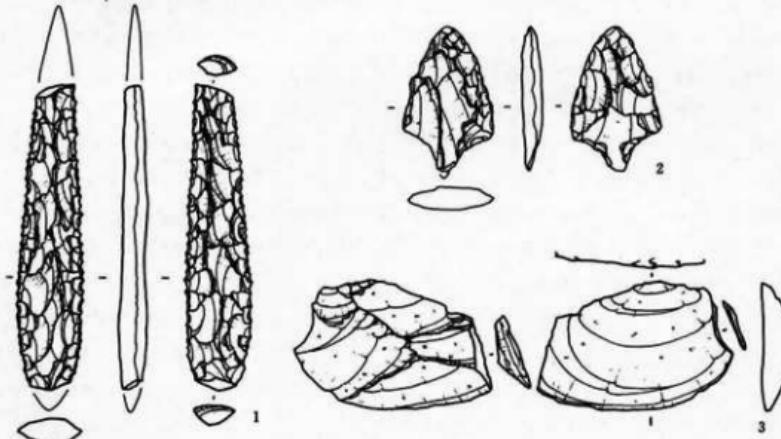
器種	石鏸	尖頭器	両面加工	石錐	石匙	スクリュー	距離棒	楔形	打斧	磨斧	石鍬	凹石	磨石	敲打器	石墨	石核	他
点数	45	9	1	22	5	7	6	5	6	14	237	10	32	24	7~	124	6

上記の他に、石核に付随する剝片類が約3,500点あまりも検出されており、本遺跡を舞台として展開された行動に、石器製作が非常に大きなウエイトを占めていたことは確かである。製品としては、石錐が卓越しており、石錐がそれに次ぐ。石錐の充実も特筆すべきで、形態的バラエティーの量的把握は重要な資料となりうるものであった。一方、組成として概して少ないと指摘されるものに、打製石斧と磨製石斧がある。また定型品としてみれば、凹石・磨石も比較的少ないといえよう。これらのことから、本遺跡の主要生産活動は、狩猟と漁撈であったことが推測される。剝片石器製作での主要目的器種は石錐と考えられ、石器製作活動の痕跡からみても、相当量の石錐が消耗されていたことが伺える。また、石錐についてあるが、打欠石錐を漁網錐としては積極的に評価しないという動きがある。^(注3) 重量分布等の属性などの一部の相違をもとに全てを否定するには、いまだ根拠に乏しいと言わざるを得ない。縄掛けに適した基本的属性を具備するものは、少なくとも「錐」の枠から外れるものではなく、はたして打欠と切目の相違が機能レベルでの分離につながるのかは判らない。とりえずは、打欠石錐を簡易万能錐として評価し、各遺跡での出土状態・組成比率・形態組成などから、同一の机上で把握してゆくのが肝要と思える。はたして本遺跡ではどうであろうか。まず、組成比率では全体の50%以上を占め、形態的には自然礫使用とはいえ、長幅比や重量の点から、一定法量への偏在傾向が指摘される。少数化しながら見せる大小の変位は、錐としての多用途性の一端を示しているのであろう。出土状態では、1号住居跡で未製品を含めて50点近くが床面直上の遺棄状態で検出されている。また、素材となりうる法量を有する疊は152点にのぼり、材料として集積した分布を示す傾向が看取されている。これらのことから、一定量を同時に使用し、さらに消耗度が比較的激しい漁網錐としての用途が主体となっていたものと思われる。このことは、渦に囲まれているという本遺跡の立地からも、漁撈依存型の集落として補証するものである。また、今回資料提示できなかったが、板状で溝状の凹みをもつ粗粒砂岩が大量に検出されており、石錐の形態的片寄りとともに、鋸等の骨角器の製作を想起させる部分もある。

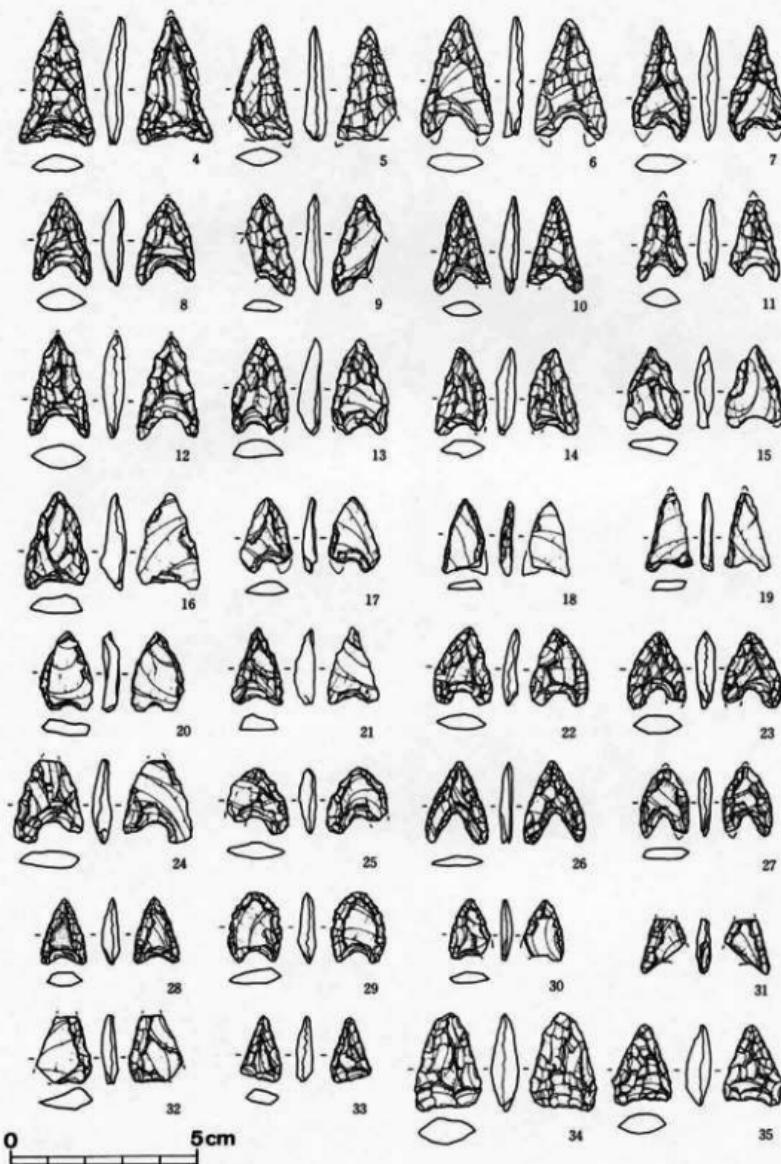
打製石斧の出土量については、狩猟・漁撈依存型の遺跡と植物採集依存型の遺跡間での相関が指摘されおり、前者では乏しい傾向にある。^(注5) 本遺跡出土の打製石斧は、例にもれず少量でたとえ移動にともなう製品の搬出があったとしても、石斧製作にかかる同石材の欠落は、その使用が決して日常的ではなかっただことを示していると言えよう。

剥片剝離技術については、剥片を含めたさらに詳細な分析が要求される。他遺跡でも、積極的な資料化が進められることを期待したい。分布論的な構造については、後述の考察にゆだねるものとする。

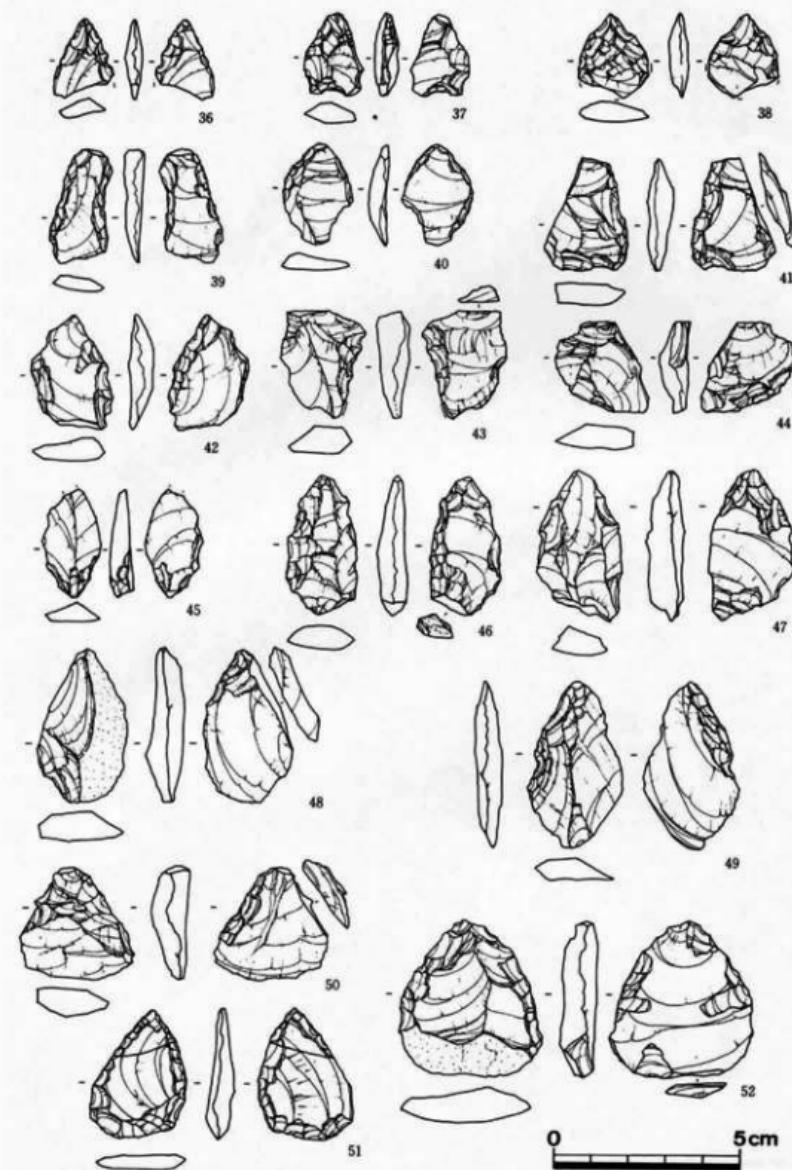
- 注 (1) 富権泰時 1976 「トランシェ様石器について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編 ここでは、東北北部北海道南部の縄文時代早期に特徴的に認められるものとして、製作過程や機能を含めた検討がなされている。素材を横に利用して、素材作出以前の既設剥離面を刃部とする点では合致するが、東北例は刃部を構成する表面の剥離面が50度前後の角度を有して刃を成しており、本例のような薄い縁辺のものは少ない。また、鈴木次郎氏は縄文中期の尾崎遺跡から出土した同様の石器を直刃式片刃打製石斧と呼称し、東北の早期に伴うこの種の石器が、前期以降に關東・中部地方にひろがったと予想している。鈴木次郎 1977 「縄文時代の直刃式片刃打製石斧について」『神奈川考古』第2号 神奈川考古同人会
- (2) 凹石の用途については、様々な見解がある。筆者は多くの、凹みが機能を充足するために作出されたものであると考えており、東市漁道跡で行われたような分析の意図がよく理解できない。全てが連続使用による使用痕とは考えがたく、まず凹み自体の詳細な観察及び類別をすべきである。田村信行 1985 「凹石の重心から推察される用途について」『金沢市東市漁道跡』金沢市教育委員会
- (3) 渡辺 哲 1963 「縄文中期における網漁法の発生とその意義」『考古学手帖』17 を始めとする氏の一連の論文とそれを支持する立場で、近年北陸を舞台に検討を進めている山本直人氏の切目石鍬を中心とした論文がある。山本直人 1983 「加賀における縄文時代の網漁について」『石川考古学研究会々誌』26 石川考古学研究会、氏も自ら指摘しているとおり、総合的状況判断を経たうえで各論を論じて欲しいものである。重量分布の差も網漁業の方法や技術的側面あるいはその地域的・変遷的視点を変えた再検討も必要であろう。
- (4) 打欠石鍬を漁網鍬と解釈して使用実験を行った貴重な報告例もある。松岡達郎・中田清彦・横山英介 1977 「櫻石鍬考」『考古学研究』第24巻第1号 考古学研究会 ここでは打欠石鍬は漁網鍬として充分その機能をはたしうるとの結論に達している。また、独木舟の性能面から、櫻網・打漁網の類を否定する見解を示している。
- (5) 麻柄一志 1984 「縄文時代の石器組成と属性——いわゆる「ナラ林文化論」へのアプローチとして——」『大境』8号 富山考古学会



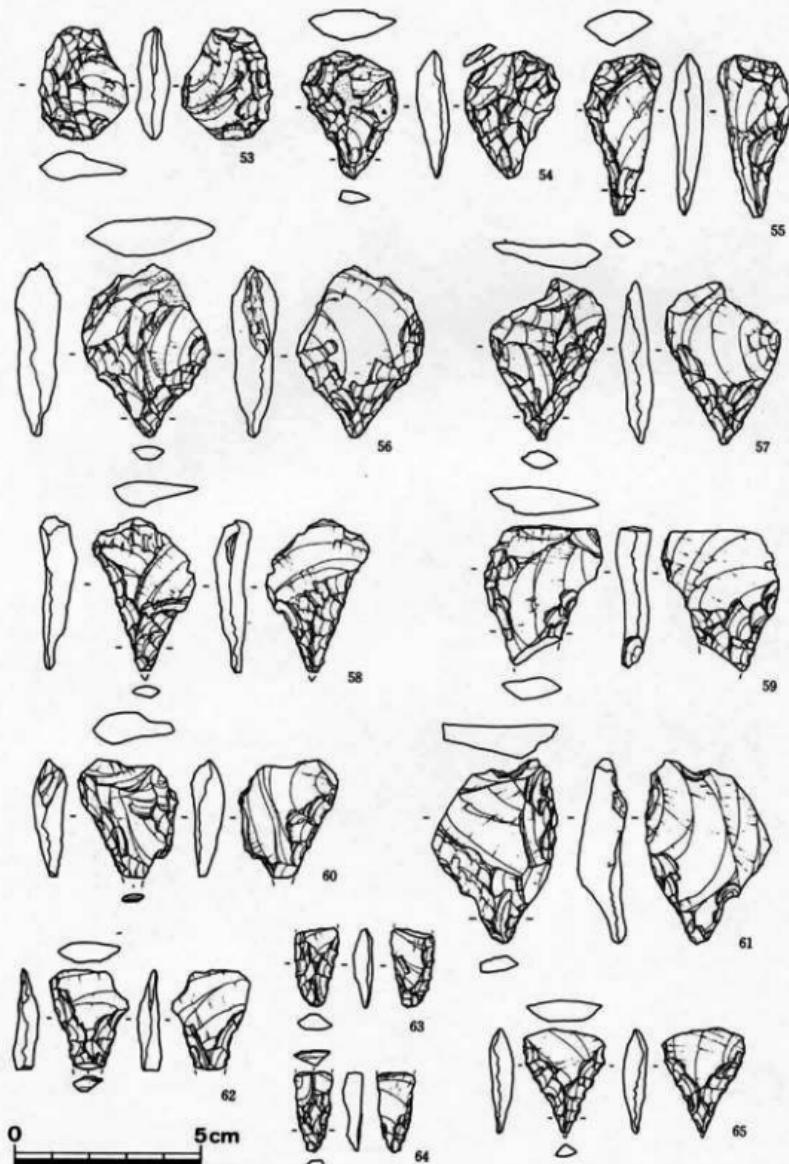
第54図 旧石器・縄文草創期石器実測図（1 / 1）



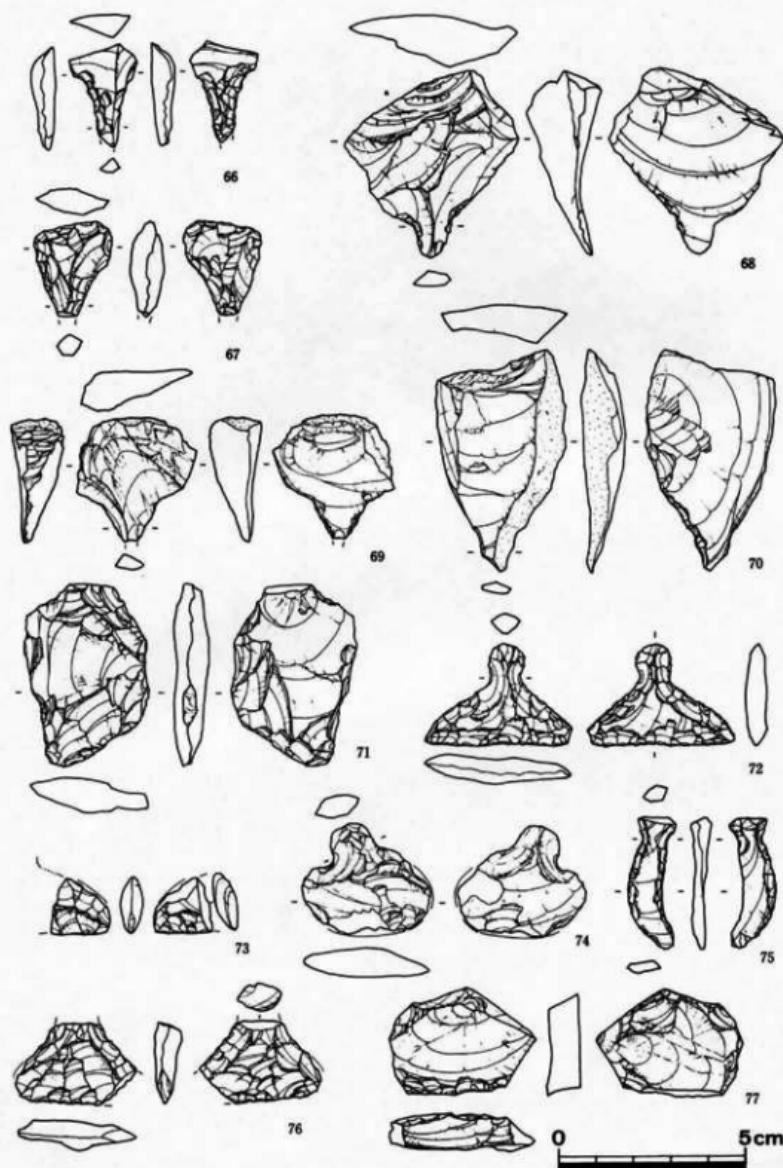
第55図 石鏃実測図 (2 / 3)



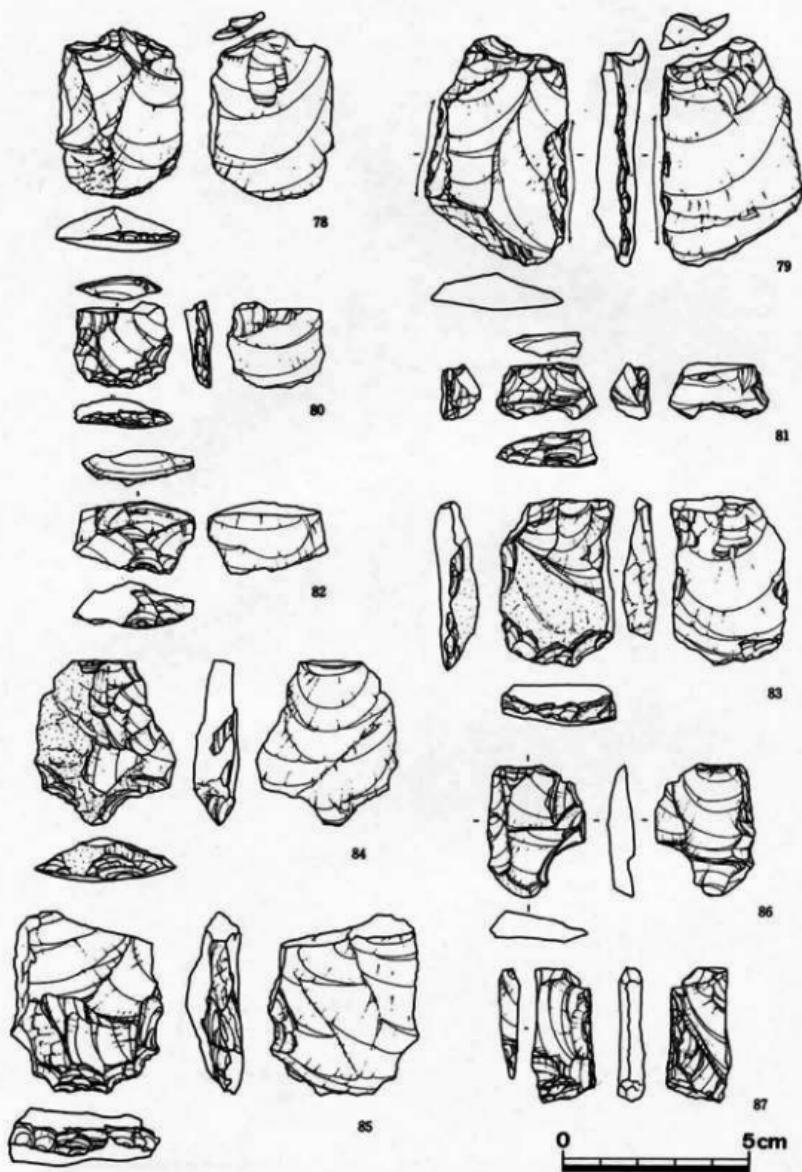
第56図 石鏃未整品・尖頭器・両面加工石器実測図 (2 / 3)



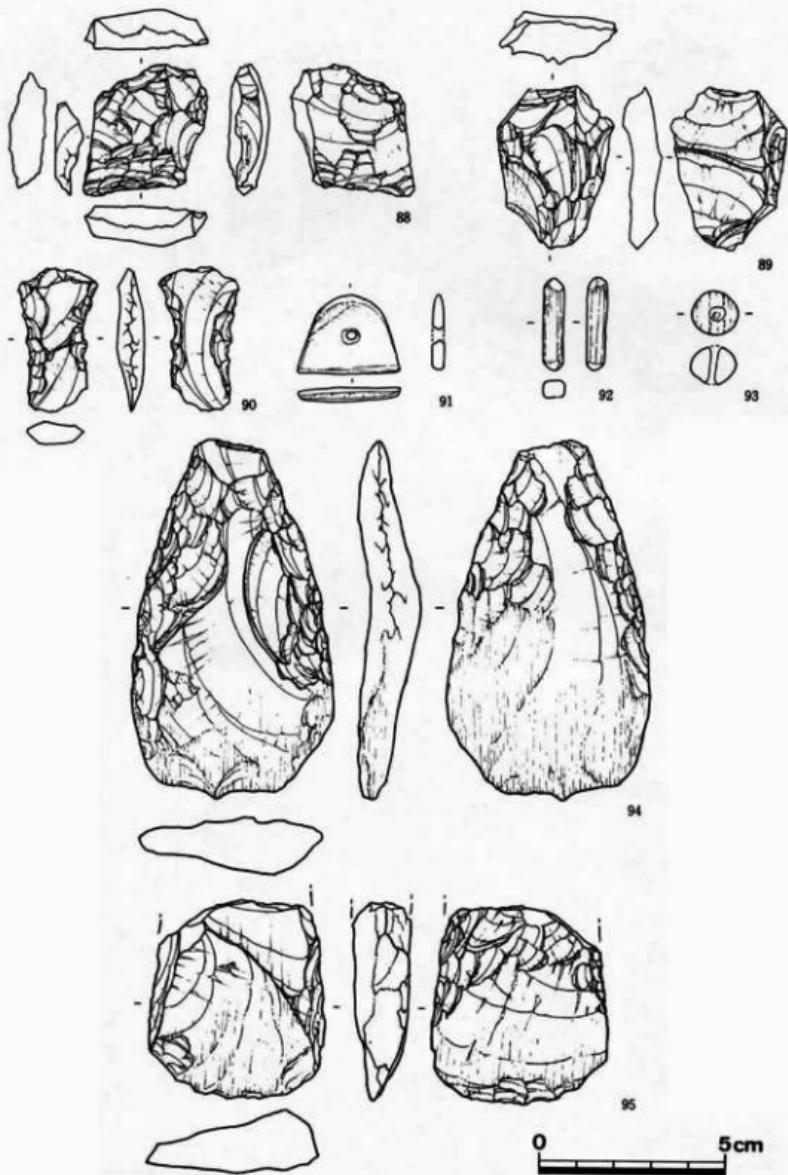
第57図 石器実測図 (2 / 3)



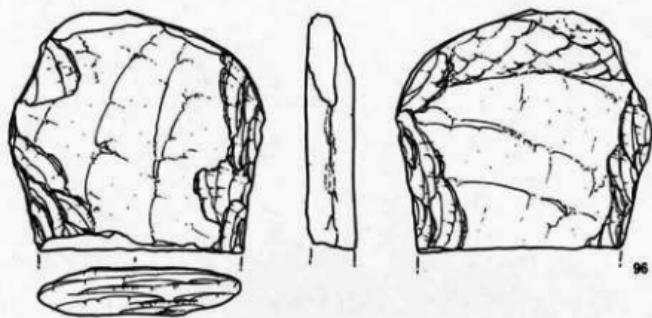
第58図 石錐・石匙・スクレイバー実測図 (2 / 3)



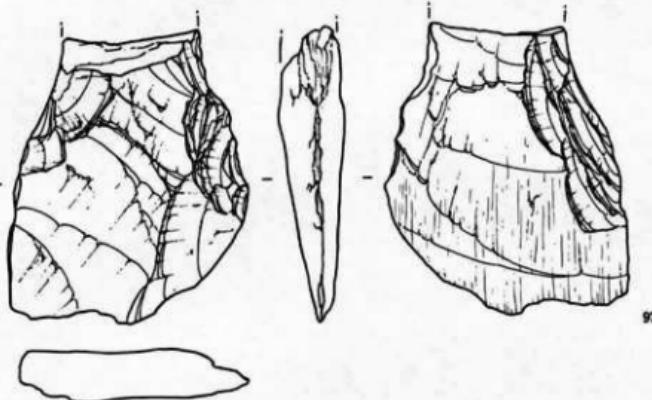
第59図 スクレイバー・鋸齒縁石器・楔形石器実測図（2 / 3）



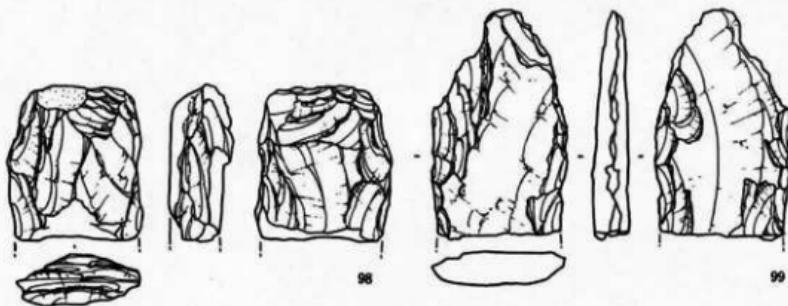
第60図 横形石器・異形石器・玉類・石斧実測図（2 / 3）



96



97

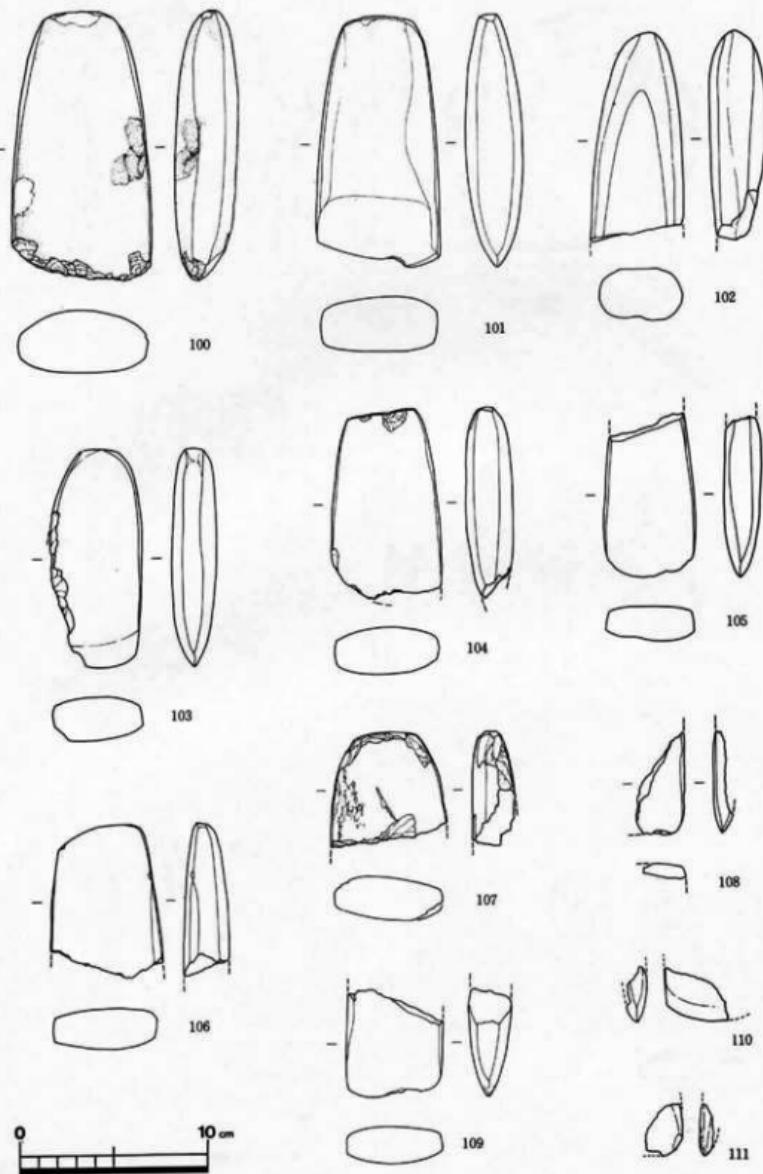


98

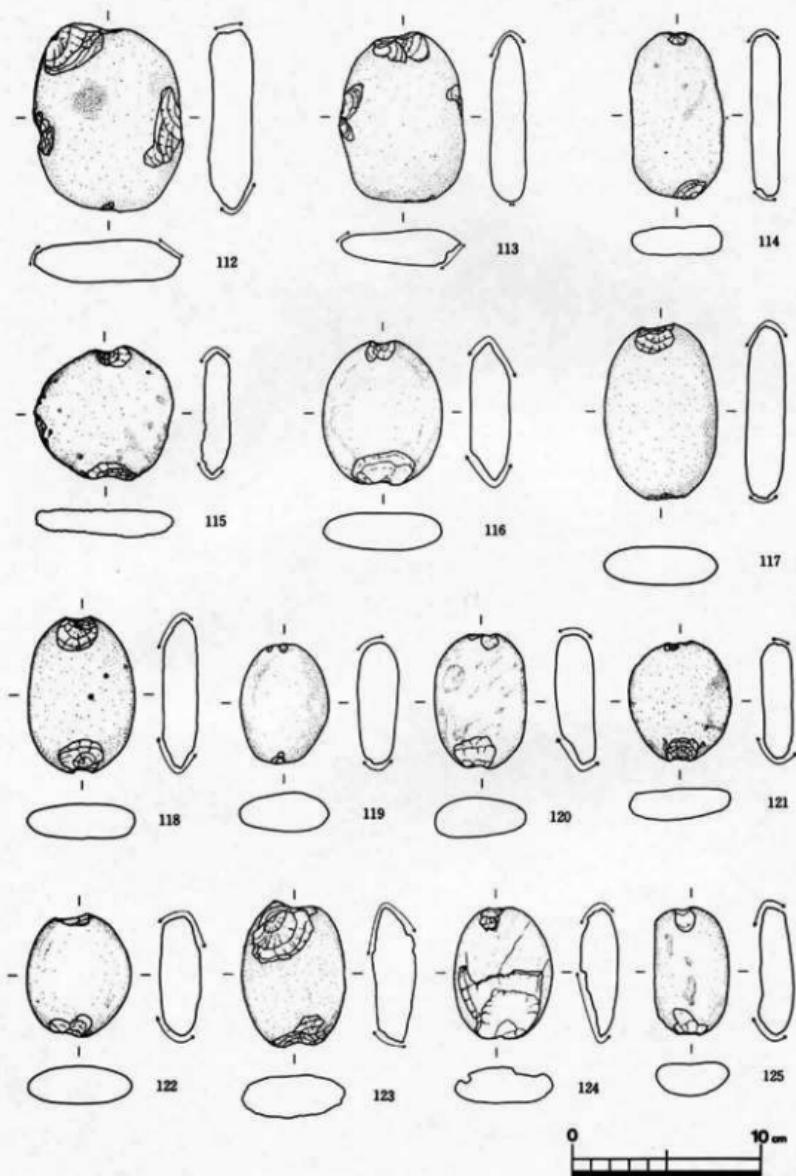
99



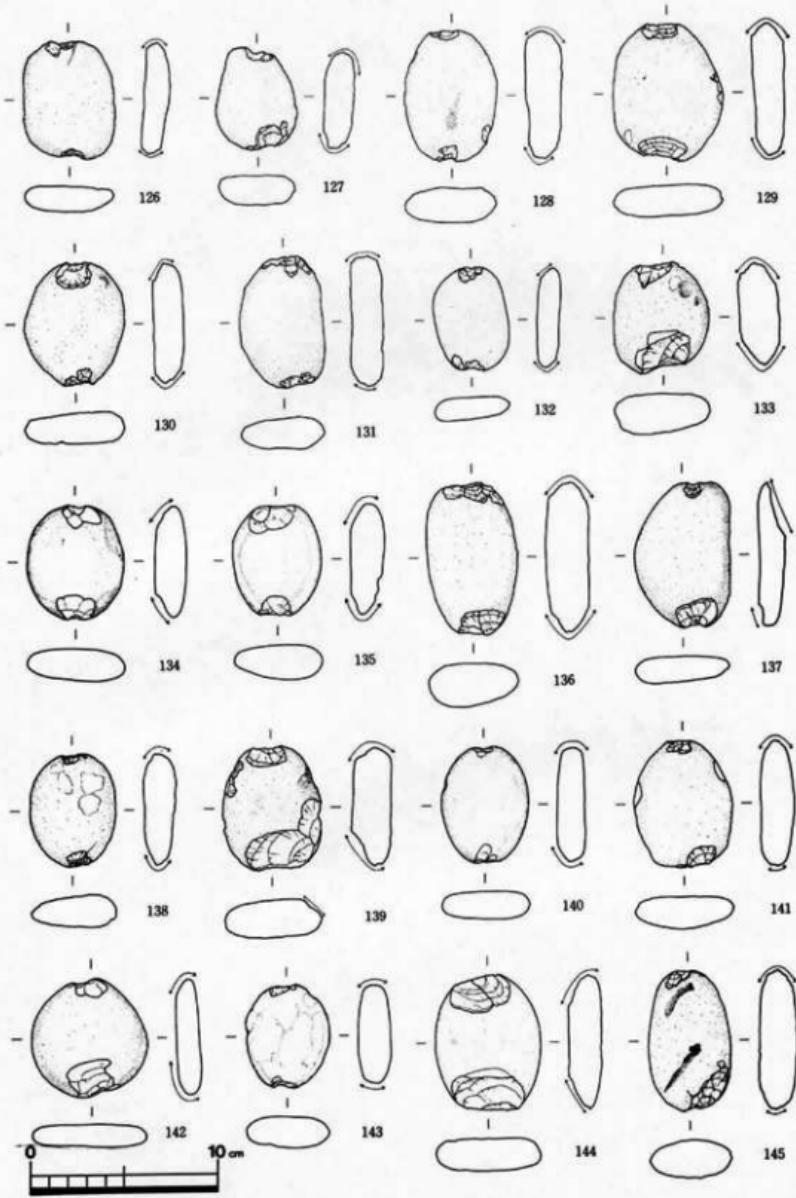
第61図 打製石斧実測図 (1 / 2)



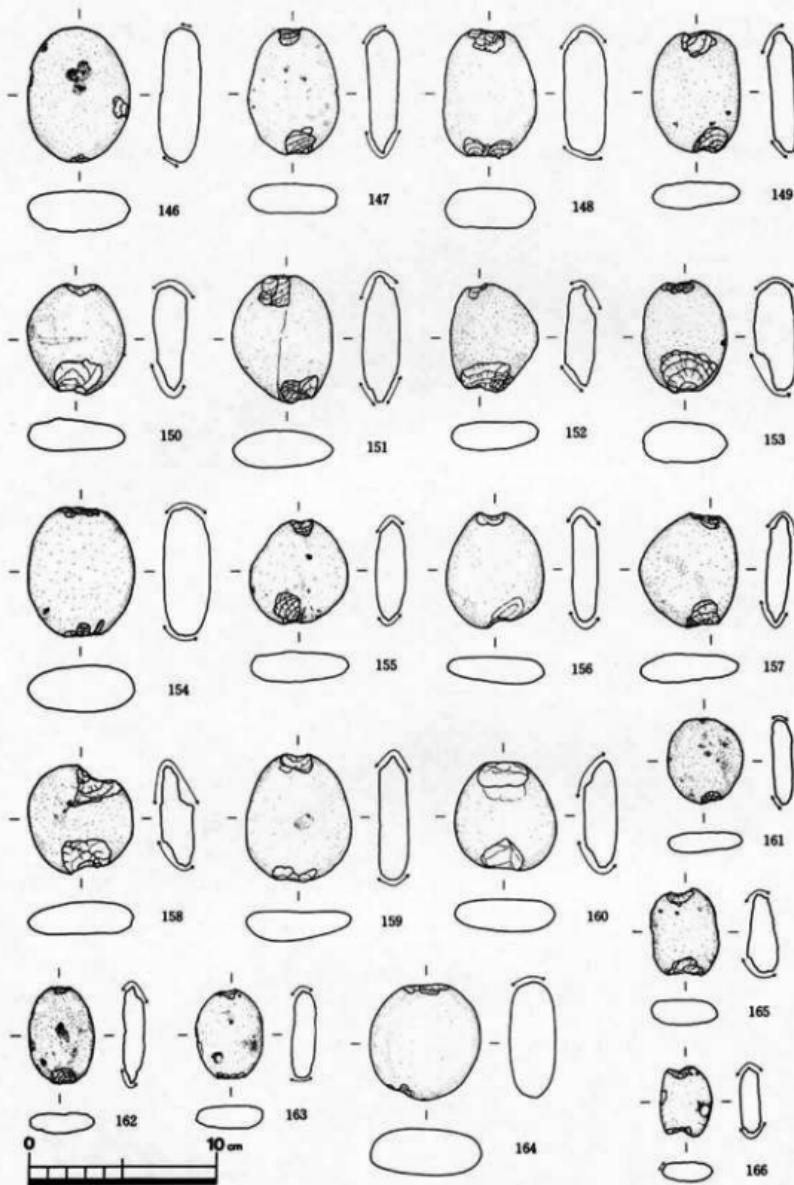
第62図 磨製石斧実測図 (1 / 3)



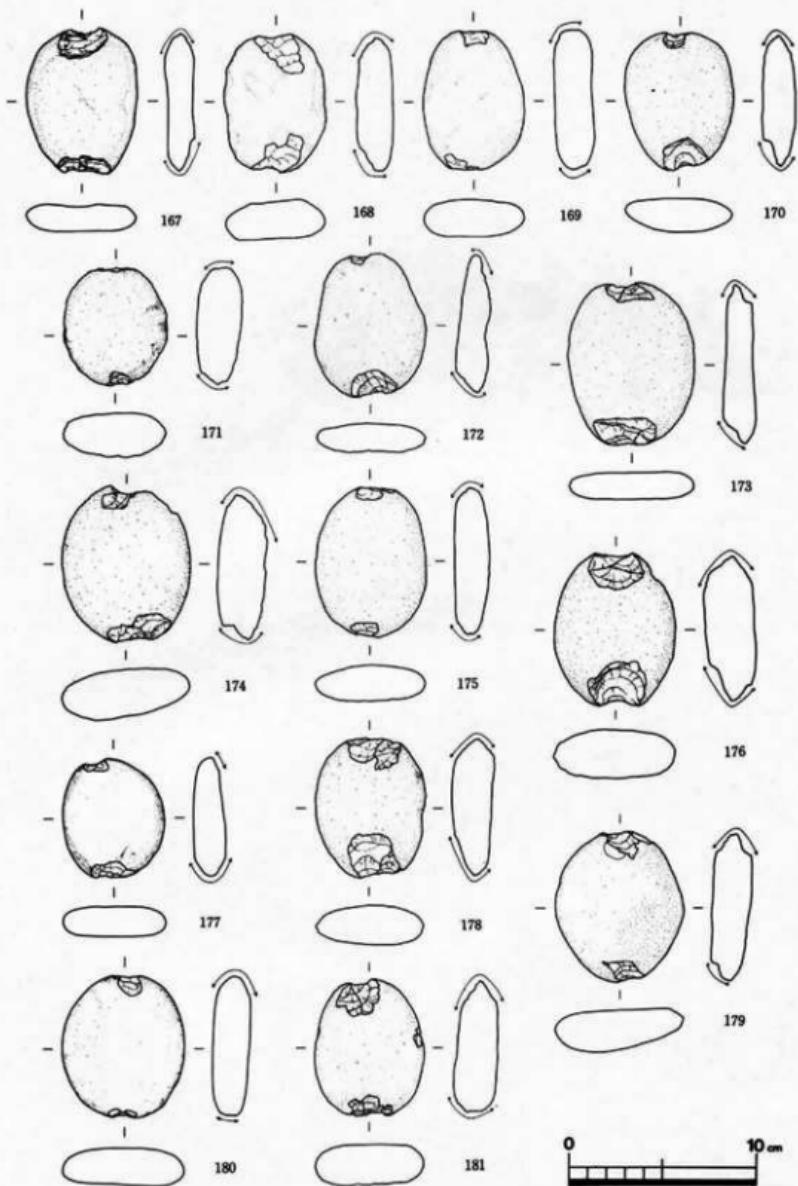
第63図 石錠実測図 (1 / 3)



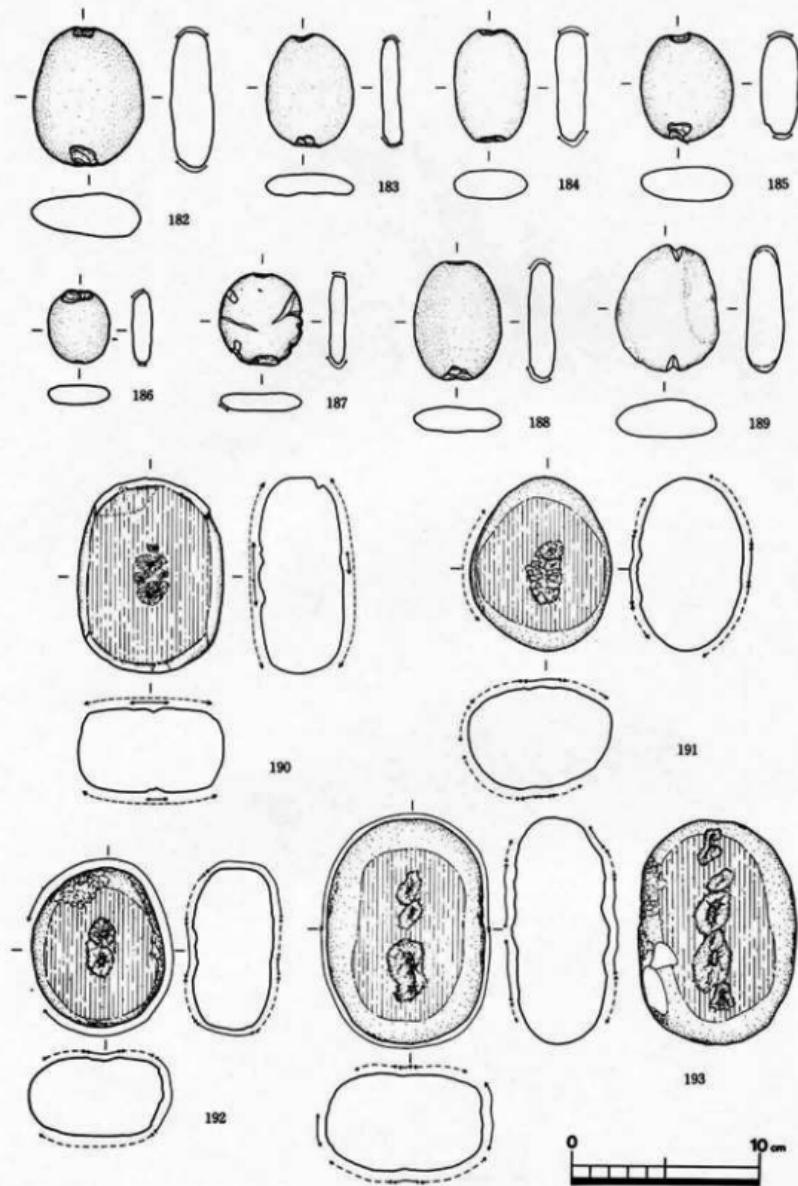
第64図 石錐実測図 (1 / 3)



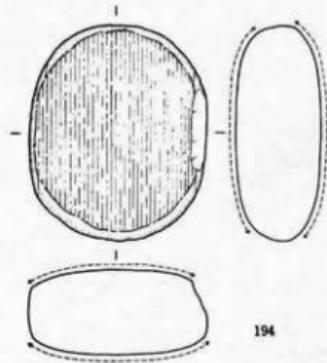
第65図 石鏸実測図 (1 / 3)



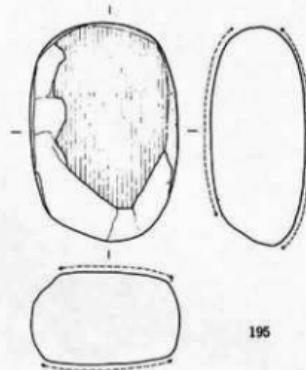
第66図 石錘実測図 (1 / 3)



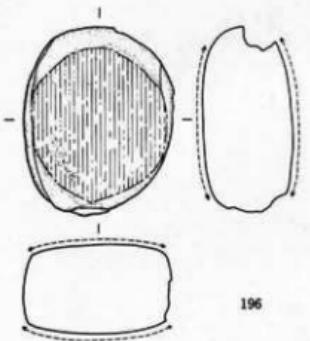
第67図 石錐・凹石夷測図 (1 / 3)



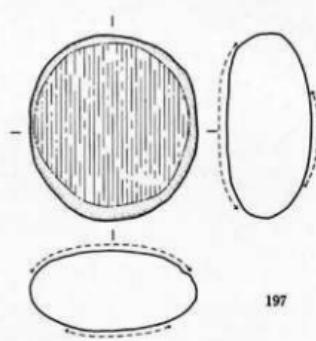
194



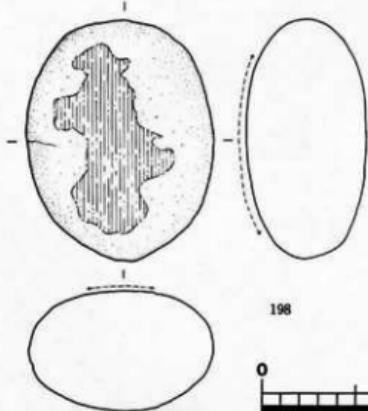
195



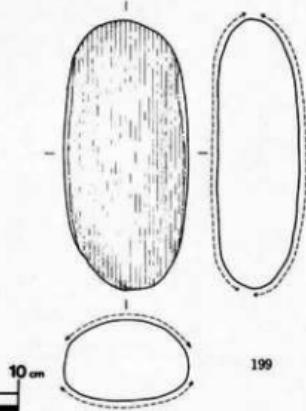
196



197

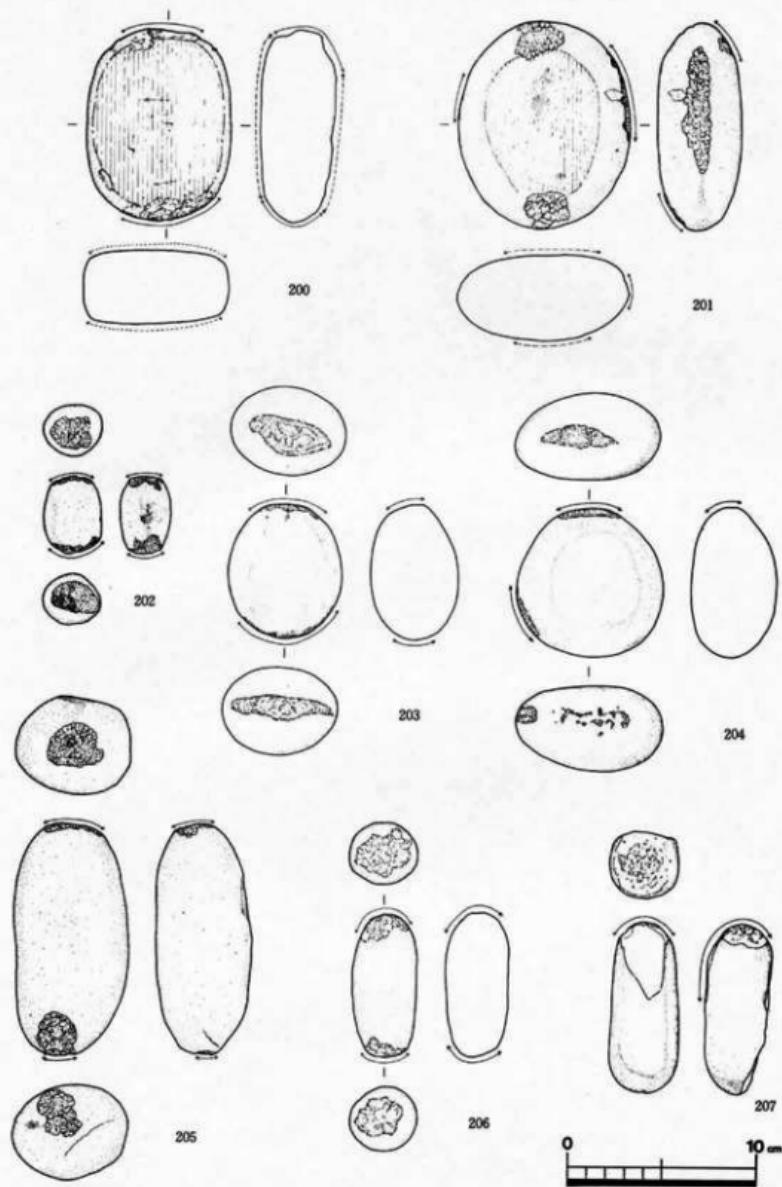


198

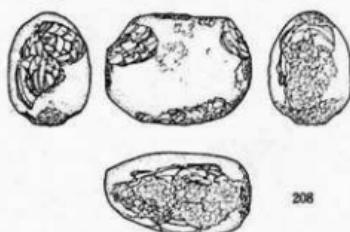


199

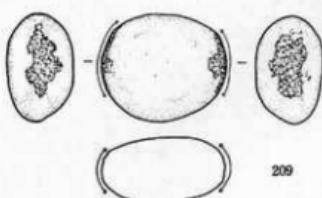
第68図 磨石実測図 (1 / 3)



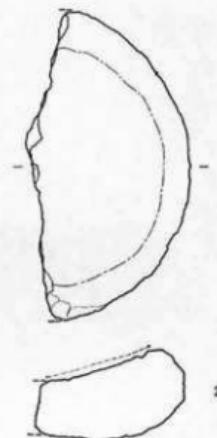
第69図 磨石・敲打器実測図 (1 / 3)



208



209



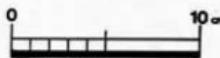
210



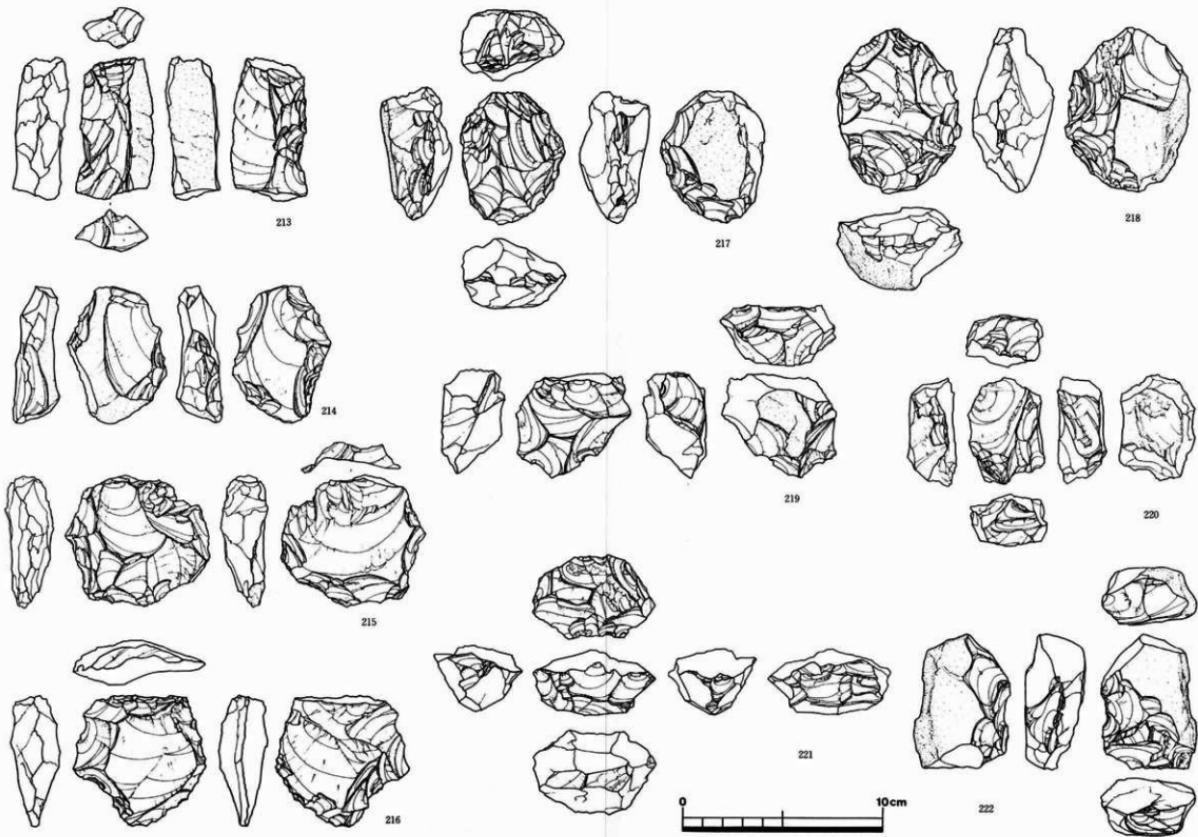
211



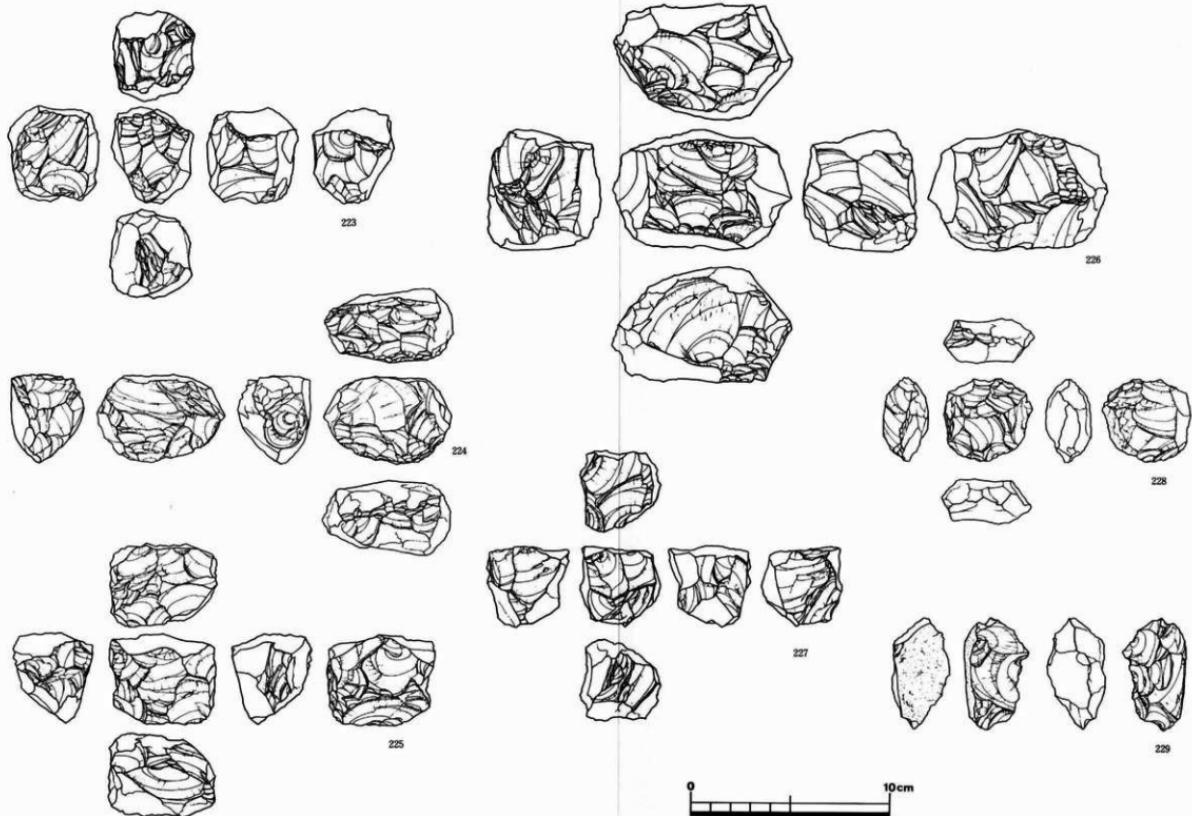
212



第70図 敲打器・石皿実測図 (1 / 3)



第71図 石核実測図 (1 / 2)



第72図 石核実測図 (1 / 2)

第2表 石鉄属性表

整理No	検出地点	図 No	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	先端角	形態	備考
1	6 F16-下層 8	55-4	流紋岩	34.0	19.8	5.2	2.26	45	A	先端小欠
2	2 住 268	55-5	流紋岩	(30.9)	(16.0)	5.7	1.54	30	A	両脚欠
3	2 住 P-1	55-6	流紋岩	(32.4)	19.0	4.0	1.82	40	B	両脚・先端小欠
4	14集 253	55-7	流紋岩	30.0	14.6	5.1	1.40	35	B	
5	2 住	55-8	流紋岩	(13.0)	15.4	5.4	1.28	50	D	先端小欠
6	1 住 フルイ	55-9	流紋岩	26.4	(13.1)	4.1	0.93	45	B	片脚欠
7	1 住 フルイ	55-10	流紋岩	25.7	(14.7)	4.4	1.18	40	B	片脚小欠
8	1 住 P-1	55-11	流紋岩	21.4	13.3	4.9	0.80	40	B	先端小欠
9	5 B11-1204	55-12	流紋岩	27.1	16.1	5.6	1.54	50	B	
10	2 住 P-1	55-13	流紋岩	25.7	15.0	5.7	1.65	50	D	片脚小欠
11	1 住 526	55-14	流紋岩	23.0	13.5	4.9	1.06	45	B	片脚小欠
12	2 住 338	55-15	流紋岩	22.0	15.7	4.3	1.08	55	B	片脚小欠
13	1 住 616	55-16	流紋岩	26.1	16.5	6.3	1.76	60	C	
14	16集 306	55-17	流紋岩	19.7	13.8	3.7	0.57	55	B	片脚欠
15	2 住 958	55-18	流紋岩	19.1	19.9	3.3	0.45	50	C	
16	1 住 フルイ	55-19	流紋岩	20.1	12.2	2.9	0.54	35	A	
17	2 住 587	55-20	流紋岩	21.0	13.5	3.0	0.84	55	C	
18	2 土坎 1	55-21	流紋岩	20.4	13.4	5.0	1.00	45	A	
19	5 C13-120	55-22	流紋岩	20.5	15.0	3.6	0.88	60	E	
20	1 住 フルイ	55-23	チート	20.5	15.5	4.8	1.23	65	E	片脚小欠
21	2 住 P-2	55-24	流紋岩	(22.1)	16.6	5.2	1.35	55	E	先端小欠
22	1 住 609	55-25	流紋岩	16.5	17.0	4.2	0.64	90	E	片脚欠
23	M-7 n	55-26	黒曜石	21.6	16.6	2.6	0.62	55	D	片脚欠
24	2 住 324	55-27	黒曜石	(18.8)	13.0	2.9	0.66	60	D	片脚・先端小欠
25	8 F16-下層 8	55-28	成紋岩	17.8	12.0	4.0	0.70	55	B	
26	3 住 P-9(上層)	55-29	流紋岩	19.0	14.3	4.1	0.95	55	D	
27	1 住 フルイ	55-30	流紋岩	16.0	(10.8)	2.9	0.38	55	D	片脚欠
28	1 住 フルイ	55-31	流紋岩	(14.6)	(12.2)	3.5	0.43	55	B	片脚・先端欠
29	1 住 フルイ	55-32	流紋岩	(18.0)	(14.6)	4.1	0.83	—	A	先端・片基部欠
30	6 集	55-33	流紋岩	17.0	10.6	3.9	0.55	40	A	
31	1 住 9	55-34	流紋岩	26.0	17.9	7.1	2.21	90	A	
32	表 摂	55-35	流紋岩	21.3	16.2	6.0	1.52	50	A	基礎小欠
33	1 住 床直一話	56-36	流紋岩	21.9	13.1	4.8	0.87	55	—	未整品
34	1 住 フルイ	56-37	流紋岩	22.1	13.0	5.7	1.57	—	—	#
35	2 住 P-1	56-38	流紋岩	21.9	18.7	5.0	1.56	—	—	#
36	2 住	56-39	流紋岩	30.6	15.2	3.9	2.07	—	—	#
37	9 集 472	56-40	流紋岩	27.0	19.0	3.9	1.70	—	—	#
38	2 住 666	56-41	成紋岩	30.3	22.1	5.6	2.62	—	—	#
39	2 住 P-1	56-42	流紋岩	31.8	19.6	6.0	3.19	—	—	#
40	14集 80	56-43	流紋岩	29.2	22.0	6.5	3.06	—	—	#
41	14集 87	56-44	流紋岩	26.0	21.9	7.2	3.58	—	—	#
42	1 住 フルイ		流紋岩	6.6	12.0	2.5	0.19	—	—	#
43	表 摂		川内安山岩	21.2	(11.3)	3.1	0.56	35	B	片脚欠
44	#		流紋岩	23.2	16.2	5.3	1.28	—	—	未整品
45	#		流紋岩	(34.6)	(20.0)	5.0	1.50	40	—	下半欠、大形、石槍？

第3表 尖頭器・両面加工石器属性表

整理No	検出地点	団 No	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	形態	備考
1	1住 フルイ	56-45	流紋岩	29.5	15.1	5.1	1.83		基部加工のみ
2	7B 5-12	56-46	流紋岩	19.1	19.1	7.0	5.13		
3	19集 36	56-47	流紋岩	23.8	23.8	8.4	8.01		先端部加工のみ
4	1集 49	56-48	流紋岩	23.0	23.0	8.2	7.81		*
5	2住 フクド	56-49	流紋岩	44.2	23.1	6.0	5.10		*
6	16集(2住 ベルト内)	56-50	流紋岩	31.0	30.9	8.5	6.07		打面先端に残
7	1住 604+625	56-51	流紋岩	34.9	26.1	4.8	3.93		
8	2住 フクド	56-52	流紋岩	40.5	38.3	9.0	14.55		
9	1住 P-1 フクド	57-53	流紋岩	29.5	23.9	7.9	4.91		先端部加工のみ・打面先端に残
10	1集 上層		流紋岩	41.3	28.5	11.0	10.69		

第4表 石錐属性表

整理No	検出地点	団 No	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	形態	備考
1	2住 810	57-54	流紋岩	33.7	25.7	8.0	4.96	A	
2	2住 959	57-55	流紋岩	43.7	20.1	9.3	4.42	A	
3	1住 P-15 フクド	57-56	流紋岩	46.2	34.3	10.4	13.06	A	
4	22集 16	57-57	流紋岩	44.0	30.7	7.8	7.01	A	
5	2住 248	57-58	流紋岩	40.6	27.6	6.3	4.49	A	
6	2住 フクド	57-59	流紋岩	(37.6)	31.9	9.4	(8.66)	A	刃部欠
7	1集 104	57-60	流紋岩	(33.5)	26.3	8.7	(4.81)	B	*
8	1集 53	57-61	流紋岩	49.5	34.0	10.6	12.58	B	
9	1住 P-1 フクド	57-62	流紋岩	(26.4)	21.1	5.1	2.22	C	刃部欠
10	1住 フルイ	57-63	流紋岩	(21.0)	(11.5)	(4.6)	0.94	C	刃部のみ
11	1住 フルイ	57-64	流紋岩	(21.2)	(9.8)	(5.1)	0.74	C	*
12	14集 81	57-65	流紋岩	27.7	21.6	5.6	2.05	A	
13	3住 P-2 フクド	58-66	流紋岩	(28.1)	17.6	5.9	1.51	C	刃部先端欠
14	1住 886	58-67	流紋岩	(25.8)	20.6	8.9	3.37	C	*
15	4集 265	58-68	流紋岩	51.0	46.2	18.2	20.44	D	表面右側縁加工なし
16	3住 P-2 フクド	58-69	流紋岩	(34.5)	33.8	13.5	9.49	D	表面右側縁加工なし: 刃部先端欠
17	9集 42	58-70	流紋岩	(59.7)	34.6	10.9	17.08	D	表面右・裏面右側縁加工なし: 刃部先端欠
18	2住 26		流紋岩	48.4	35.3	13.6	17.09	—	未整品、刃部欠
19	2住 20		流紋岩	57.8	33.0	14.6	19.43	—	未整品、刃部欠
20	2住 790		流紋岩	47.7	50.1	12.8	18.53	D	
21	1住 上層		流紋岩	48.0	32.5	8.1	9.27	—	未整品、表面左側縁のみ加工、先端欠
22	8C 8-1		流紋岩	44.1	27.2	12.0	7.59	—	未整品

第5表 石匙属性表

整理No	検出地点	団 No	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	形態	備考
1	2住 フクド	58-72	流紋岩	27.1	(39.4)	6.1	4.73	横形	刃部一端欠
2	6D 15-541	58-73	流紋岩	(15.2)	(15.8)	(5.8)	0.89	—	端部のみ
3	表 採	58-74	流紋岩	29.9	34.0	7.8	3.26	—	下端刃縁部損傷

4	6 D 11-460	58-75	チート	30.9	8.7	3.1	1.43	範形			
5	8 D 3-950	58-76	流紋岩	(22.4)	(30.2)	7.3	3.78	横形	つまみ部・刃部一端欠		
6	1住 P-1 72F	58-71	流紋岩	49.6	35.0	9.7	13.97	—	横形未整品?		

第6表 スクレイバー属性表

整理No	検出地点	団 No	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	形態	刃角	刃形態	備考
1	6 D 11-460	58-77	流紋岩	29.7	39.0	9.4	11.45	End	90°~65°	直線	
2	1住 679	59-78	流紋岩	45.2	33.2	10.2	12.99	End	90°~70°	弧状	
3	1住 上層	59-79	流紋岩	61.6	38.5	10.6	25.08	Side	65°~50°	直線	
4	2住 883	59-80	流紋岩	(22.9)	25.8	6.6	3.59	End	65°~40°	弧状	基部削半欠
5	表 様		流紋岩	38.8	15.0	5.6	2.57	Side	55°	直線	
6	表 様		流紋岩	33.7	18.8	6.7	2.43	Side	60°	"	
7	試験K-8ライン7-8		流紋岩	52.8	35.0	10.2	19.02	Side	70°~45°	緩弧状	

第7表 鋸歯縁石器属性表

整理No	検出地点	団 No	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	刃角	刃形態	備考
1	5 C 16-89	59-81	玉髓	14.0	26.8	9.8	4.22	90°~70°	角部形成	折断剥片素材
2	2住 P-2 72F	59-82	流紋岩	20.3	31.7	11.7	5.28	60°	"	"
3	16集 537	59-83	流紋岩	45.0	30.9	9.6	15.01	55°	弧状	
4	2住 P-2 72F	59-84	流紋岩	43.8	37.8	11.4	14.90	70°	角部形成	
5	2住 416	59-85	流紋岩	50.0	40.9	12.7	26.75	90°~70°	弧状	
6	17集 340		流紋岩	50.7	41.0	11.2	25.36	80°	"	

第8表 楔形石器属性表

整理No	検出地点	団 No	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	形態	備考
1	試験K-10ライン6-7	59-86	粘板岩	35.5	26.4	8.0	6.79	四方剝離	
2	4 C 13-1089	59-87	流紋岩	35.7	11.9	6.7	3.94	"	
3	2住 731	60-88	流紋岩	32.2	36.0	10.0	10.84	上下剝離	
4	2住 P-2 72F	60-89	流紋岩	43.6	32.2	11.1	11.31	四方剝離	
5	表 様		流紋岩	33.8	21.7	9.6	6.12	上下剝離	

第9表 その他

種別	検出地点	団 No	石材	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	備考
異形石器	2住 287	60-90	流紋岩	38.8	21.0	7.0	4.39	
飾玉	5 C 11-上層	60-91	ヒスイ	20.9	27.1	2.8	2.98	
" ?	8 F 6-574	60-92	メノウ	24.6	5.7	5.0	1.45	
"	7 G 3-654	60-93	石灰岩	9.9	11.8	12.2	1.91	
加工剥離片	3住 117		流紋岩	23.9	21.5	3.4	1.62	一側面にプランティング状加加工
"	3住 124		流紋岩	30.3	20.1	4.1	1.90	"

第10表 打製石斧属性表

整理No	檢出地點	國 No	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	形態	備 考
1	S D 4	60-94	凝灰岩	9.7	5.5	1.4	66.43	圓 形	
2	14集 9	60-95	流紋岩	(5.3)	4.7	1.5	43.06	"	
3	6 F 2-696	61-96	安山岩	(8.5)	9.0	1.7	233.67	(分瓣形)	
4	8 D 12	61-97	安山岩	(10.2)	8.6	2.3	184.87	(")	
5	9集 398	61-98	安山岩	(5.5)	(4.8)	2.1	76.91	(短 齒)	
6	8 D 7-3	61-99	安山岩	(8.0)	(4.8)	10.4	63.68	(")	

第11表 磨製石斧属性表

整理No	檢出地點	國 No	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	形態	備 考
1	3集 54	62-100	凝灰岩	14.3	7.4	3.3	571.4	定角刃刀 刃緣部欠 (折損)	
2	2集 103	62-101	細粒砂岩	13.3	6.5	2.8	461.2	定角偏刀	
3	4集 173	62-102	安山岩	(10.6)	(4.9)	(2.9)	(237.1)		刃部側欠 (折損)
4	2集 75	62-103	蛇紋岩	11.6	4.8	2.4	220.7	定角圓刃	刃部～側緣欠 (折斷)
5	16集 317	62-104	蛇紋岩	(9.6)	(7.8)	(2.4)	(266.1)	定角偏刃	刃緣一部欠 (剝離)
6	8 O 15	62-105	蛇紋岩	(8.4)	(4.8)	(1.9)	(141.4)	定角圓刃	基部側欠 (折損)
7	3集 62	62-106	蛇紋岩	(7.6)	(6.1)	(2.5)	(200.7)	定角	刃部側欠 (折損), 斜切技法痕あり
8	7 D 10-900	62-107	蛇紋岩	(5.7)	(6.2)	(2.4)	(127.4)	"	"
9	1住 686	62-108	蛇紋岩	(5.3)	(2.5)	(2.0)	(16.0)	定角	刃部～側緣部破片
10	13集 88	62-109	蛇紋岩	(5.4)	(5.1)	(2.2)	(95.1)	定角偏刃	基部側欠 (折損)
11	7 M 5	62-110	蛇紋岩	(2.0)	(3.0)	(0.7)	(4.6)	定角圓刃	刃部破片
12	2住 563	62-111	蛇紋岩	(2.2)	(3.1)	(0.9)	(9.0)	—	"
13	6 G 14-668		蛇紋岩	(4.7)	(2.7)	(2.3)	(42.0)	—	身部破片
14	4集 190		蛇紋岩	(4.9)	(4.7)	(1.1)	(29.8)	—	"

第12表 石錘属性表

整理No	檢出地點	國 No	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	形態	備 考
1	1住 床底	63-112	安山岩	9.7	7.8	2.2	293.6	D	
2	1住 949	63-113	安山岩	9.0	6.55	2.0	181.8	D	
3	1住 上層	63-114	石英斑岩	8.7	4.9	1.5	110.9	A	
4	1住 上層	63-115	安山岩類	7.2	7.3	1.4	101.0	A	
5	1住 862	63-116	凝灰岩	7.7	6.8	2.0	147.4	A	
6	1住 921	63-117	砂 岩	9.3	6.0	2.05	177.6	A	
7	1住 P-1 77F	63-118	石英斑岩	8.4	5.7	1.85	133.3	A	
8	1住 947	63-119	石英斑岩	6.4	4.7	2.1	94.8	A	
9	1住 819	63-120	石英斑岩	7.2	4.9	2.2	103.8	A	
10	1住 542	63-121	石英斑岩	6.4	5.5	1.6	75.9	A	
11	1住 255	63-122	片麻岩	6.6	5.5	2.0	104.8	A	
12	1住 34	63-123	片麻岩	7.8	5.4	2.2	123.6	A	被熱赤化, 一部熱破碎
13	1住 上層	63-124	安山岩類	7.0	5.2	2.0	86.7	A	
14	1住 816	63-125	片麻岩	6.8	4.0	1.9	65.7	A	
15	2住 181	64-126	安山岩	6.2	4.8	1.35	62.9	A	

16	2 住	64-127	石英斑岩	5.4	4.35	1.55	49.5	A
17	2 住 379	64-128	凝灰岩	6.9	4.9	1.9	90.5	A
18	2 住 509	64-129	石英斑岩	7.2	5.8	1.6	112.1	A
19	2 住 8	64-130	石英斑岩	6.6	5.3	1.65	80.5	A
20	2 住 571	64-131	凝灰岩	7.0	4.45	1.7	82.4	A
21	2 住	64-132	安山岩類	5.5	3.9	1.2	33.6	A
22	2 住 462	64-133	凝灰岩	5.8	5.1	2.1	77.3	A
23	6 集 71	64-134	安山岩	6.1	5.2	1.7	68.8	A
24	2 集 144	64-135	安山岩類	5.9	4.7	1.8	69.0	A
25	16 集 362	64-136	片麻岩	8.1	4.9	2.3	132.9	A
26	5 C - 5167	64-137	砂 岩	7.7	5.1	1.4	72.1	A
27	16集 262	64-138	安山岩	5.9	4.6	1.75	66.7	A
28	15 集 41	64-139	片麻岩	6.5	5.2	2.2	108.9	A
29	5 集 65	64-140	安山岩類	6.2	4.7	1.6	66.3	A
30	3 集 110	64-141	石英斑岩	6.7	5.3	1.8	87.2	A
31	9 集 285	64-142	安山岩	6.3	6.2	1.3	70.0	A
32	5 集 52	64-143	安山岩	5.6	4.5	1.2	57.2	A
33	5 集 173	64-144	片麻岩	7.2	5.6	1.7	102.2	A
34	16 集 98	64-145	安山岩類	7.4	4.4	2.0	92.3	A
35	1 住 937	65-146	片麻岩	7.2	5.4	2.2	126.1	C
36	1 住 P-17ク上	65-147	片麻岩	6.7	4.8	1.6	74.3	A
37	1 住 P-1	65-148	石英斑岩	6.85	4.9	2.1	112.1	A
38	1 住 536	65-149	安山岩類	6.5	4.65	1.4	56.1	A
39	1 住 399	65-150	安山岩類	6.0	5.2	1.8	66.7	A
40	1 住 上層	65-151	安山岩	6.75	5.4	2.0	92.6	A
41	1 住 512.841	65-152	安山岩類	5.8	4.65	1.55	48.2	A
42	1 住 873	65-153	安山岩	6.0	4.5	2.2	80.7	A
43	1 住 上層	65-154	安山岩類	6.9	5.7	2.5	114.4	C
44	1 住	65-155	安山岩類	5.5	5.2	1.65	53.2	A
45	1 住 864	65-156	安山岩	6.2	5.2	1.5	66.5	A
46	1 住 952	65-157	安山岩類	6.1	5.2	1.55	54.2	A
47	1 住 217	65-158	安山岩類	5.8	5.6	1.8	63.4	A
48	1 住 768	65-159	安山岩	6.8	5.6	1.6	92.1	A
49	1 住 940	65-160	安山岩	5.8	5.4	1.8	79.3	A
50	1 住 318	65-161	安山岩	4.55	4.0	1.1	28.2	A
51	1 住 上層	65-162	安山岩	7.0	3.5	1.05	27.4	A
52	1 住 52	65-163	安山岩	4.7	3.5	1.2	29.3	A
53	1 住 936	65-164	砂 岩	6.1	5.9	2.4	132.7	A
54	1 住 上層	65-165	安山岩	4.6	3.55	1.6	36.1	A
55	1 住 300	65-166	安山岩類	3.7	2.7	1.05	13.6	A
56	2 集 139	66-167	安山岩類	7.7	5.9	1.5	112.4	A
57	2 集 225	66-168	凝灰岩	7.4	5.5	2.0	113.3	A
58	2 集 109	66-169	凝灰岩	7.4	5.5	2.1	123.5	A
59	3 集 117	66-170	安山岩	7.3	5.8	1.8	101.5	A
60	16 集 124	66-171	玲 岩	6.3	5.5	2.4	118.3	A
61	16 集 304	66-172	安山岩類	7.4	5.9	1.5	89.1	A
62	6 B 6-15	66-173	安山岩	8.7	6.8	1.75	141.6	A
63	4 D 9-295	66-174	安山岩	8.25	6.85	2.6	204.5	A
64	15 集 75	66-175	石英斑岩	7.9	5.9	1.9	130.4	A
65	6 B 5-40	66-176	安山岩	8.1	6.45	2.7	196.8	A

66	9集 309	66-177	砂岩	6.3	5.4	1.8	86.4	A	
67	16集 351	66-178	安山岩	7.4	5.8	2.1	120.9	A	成熟赤化、一部热破碎
68	5 C 9-132	66-179	安山岩	7.9	6.85	2.15	163.0	A	
69	10集 87	66-180	安山岩	7.6	6.5	2.0	144.5	A	
70	5集 198	66-181	安山岩	7.3	5.8	2.1	133.2	A	
71	7 B 13-9	67-182	石英斑岩	7.4	5.7	2.25	135.9	A	
72	3住 139	67-183	安山岩類	6.0	4.55	1.0	39.9	A	
73	7 B 9-5	67-184	安山岩	5.95	3.85	1.5	51.6	A	
74	22集 61	67-185	安山岩	5.7	4.85	1.9	69.7	A	
75	8 D 6-1	67-186	片麻岩	3.8	3.25	1.0	21.3	A	
76	22集 78	67-187	安山岩類	4.85	4.3	0.9	28.0	A	
77	7 C 14-14	67-188	安山岩	6.25	4.55	1.4	57.8	A	
78	9集 23	67-189	安山岩	6.75	5.4	1.9	90.6	D	切目
79	2住 上層		安山岩	6.2	3.2	2.1	87.4	A	
80	2住 139		石英斑岩	6.4	4.1	1.65	55.6	A	
81	2住 395		安山岩類	5.0	3.5	1.2	27.4	A	
82	2住 94		凝灰岩	7.05	6.4	1.95	128.8	A	
83	2住 851		安山岩	4.95	4.0	1.15	26.4	B	
84	1集 128		安山岩	6.85	5.45	1.85	88.4	D	
85	1集 32		安山岩	5.0	4.7	1.15	31.6	—	
86	1集 86		安山岩	6.65	6.55	0.95	69.1	D	
87	1集 4		安山岩類	8.2	6.25	2.2	168.5	A	
88	1集 44		砂岩	6.75	5.8	2.2	128.2	A	
89	1集 76		安山岩	7.5	5.0	1.0	59.0	A	成熟赤化
90	1集 77		石英斑岩	4.95	3.65	1.05	31.3	A	
91	1集 88		安山岩	6.1	4.5	1.55	58.4	A	
92	1集 122		安山岩	7.75	3.95	1.55	56.9	A	
93	1集 41		安山岩	(3.55)	(3.85)	(1.2)	(19.9)	—	半次
94	1集 64		石英斑岩	6.8	5.2	2.3	122.4	C	
95	2集 53		石英斑岩	6.9	4.7	2.35	115.7	C	
96	2集 173		砂岩	4.95	4.4	1.2	40.4	B-1	
97	2集 16		凝灰岩	6.4	4.45	1.3	69.1	A	
98	2集 56		安山岩	6.0	4.6	1.2	75.5	C	
99	2集 227		安山岩類	6.7	6.6	1.5	71.9	A	
100	2集 65		安山岩	6.7	4.4	1.15	44.0	A	
101	2集 118		片麻岩	7.2	4.2	1.8	90.2	C-1	
102	2集 Ⅲ区 フクド		安山岩	5.7	3.8	1.2	42.9	B	
103	2集 230		安山岩	5.7	4.35	1.8	57.8	A	
104	2集 46		安山岩	7.7	5.0	2.0	120.5	B	
105	3集 19		安山岩	6.8	5.65	1.95	60.5	A	
106	3集 22		安山岩類	6.9	4.65	1.9	62.4	B-1	
107	4集 80		石英斑岩	5.5	4.4	1.7	61.6	C-1	
108	4集 73		凝灰岩	6.7	5.4	1.8	77.3	A	
109	4集 51		安山岩類	7.7	5.7	2.0	97.1	A	
110	5集 164		安山岩類	5.8	5.9	1.3	59.0	A	
111	5集 146		片麻岩	(4.2)	(4.1)	(2.4)	(60.7)	—	
112	5集 6		安山岩	4.3	4.15	1.1	31.6	A	
113	13集 60		片麻岩	5.05	3.6	1.3	38.1	B	
114	9集 227		片麻岩	6.25	5.35	2.0	87.0	A	
115	9集 159		安山岩類	5.8	4.6	1.7	58.0	A	

116	9集 143		安山岩	6.5	5.0	1.9	95.4	C	
117	9集 154		石英斑岩	7.6	4.2	2.1	105.4	C	
118	9集 301		砂 岩	7.1	4.6	1.55	85.0	C	
119	9集 300		石英斑岩	5.95	5.3	1.6	79.6	C	
120	9集 278		安山岩	(5.7)	(4.2)	(1.5)	(55.0)	—	半欠
121	9集 145		安山岩	6.7	4.5	1.7	86.1	C	
122	11集 109		凝灰岩	6.5	4.95	1.7	82.1	A	
123	11集 18		安山岩	5.6	4.2	1.3	52.2	B	
124	11集 111		石英斑岩	6.5	5.8	1.9	100.0	A	
125	15集 3		安山岩	6.6	4.4	1.9	85.4	A	
126	15集 17		安山岩	5.1	4.5	1.2	36.9	B	
127	16集 264		安山岩類	(4.4)	(4.7)	(1.05)	(34.9)	—	半欠
128	17集 414		石英斑岩	6.7	5.3	1.75	101.4	A	
129	17集 400		安山岩	4.9	2.95	1.0	19.1	A	
130	17集 374		安山岩	5.4	4.5	1.4	51.1	A	
131	17集 462		片麻岩	7.2	3.9	2.0	90.0	A	
132	17集 564		安山岩類	6.2	4.4	1.6	56.8	A	
133	17集 59		安山岩	5.6	5.1	1.05	42.3	A	
134	17集 403		安山岩類	6.5	5.7	2.1	98.8	A	
135	1住 810		石英斑岩	7.1	4.6	2.35	123.9	C	
136	1住 P-1 フクド		安山岩	(6.0)	(6.5)	(2.1)	(92.4)	—	一端剥離ミス
137	1住 875		安山岩	6.55	4.45	1.6	59.8	A	
138	1住 881		安山岩類	(7.5)	(4.5)	(1.7)	(54.5)	A	縱方向砥錨
139	1住 867		安山岩	(7.7)	(5.2)	(1.7)	(78.9)	A	一端剥離ミス
140	1住 上層		安山岩類	7.8	4.25	1.7	67.2	A	被熱赤化、一端剥離ミス
141	1住 852		石英斑岩	9.9	6.2	(1.7)	140.3	A	一端剥離ミス
142	1住 上層		安山岩類	4.5	4.3	1.0	32.4	A	
143	1住 924		石英斑岩	7.3	5.25	1.8	107.4	C	
144	1住 871		安山岩類	6.3	4.6	2.2	80.8	A	
145	1住 上層		砂 岩	6.5	5.65	2.05	117.2	A	
146	1住 812		安山岩類	5.7	4.65	1.8	69.4	B-1	
147	1住 348		石英斑岩	5.6	5.3	1.4	72.0	A	
148	1住 939		安山岩	6.9	5.4	2.2	125.2	C	
149	1住 456		安山岩	8.0	5.3	1.5	63.2	A	被熱赤化
150	1住 925		片麻岩	7.3	6.1	1.9	127.5	A	
151	1住 874		石英斑岩	7.2	6.6	1.7	128.7	C	
152	1住 869		石英斑岩	7.0	5.3	2.3	136.6	C	
153	1住 909		石英斑岩	5.7	3.7	1.7	50.1	B	
154	1住 II区 フクド		安山岩類	6.5	4.1	1.0	40.6	A	
155	1住 842		片麻岩	6.35	4.65	2.1	103.2	B	
156	1住 878		安山岩類	6.05	5.2	2.0	94.5	C	
157	1住 200		安山岩類	7.15	4.7	1.35	69.9	A	
158	1住 560		安山岩類	(2.2)	(3.0)	(1.2)	(35.5)	—	半欠
159	1住 932		石英斑岩	7.4	5.8	2.3	150.2	C	
160	1住 877		安山岩類	6.45	6.25	2.1	108.0	A	
161	1住 P-8 フクド		石英斑岩	5.7	4.85	1.6	56.8	B	
162	1住 748		安山岩類	7.15	5.2	1.2	72.3	A	
163	1住 865		安山岩類	6.05	4.2	1.8	67.5	B	
164	1住 870		安山岩	6.8	5.1	2.1	101.4	C	
165	1住 121		安山岩	6.6	5.1	1.5	88.8	B	

166	1住 930		片麻岩	8.8	6.1	2.1	193.3	C	
167	1住 879		石英斑岩	6.25	4.5	2.2	96.0	C	
168	5 C 16-90		安山岩	7.5	4.15	2.5	103.5	A	
169	7 M 15		安山岩	6.45	5.15	1.2	51.7	A	
170	4 C 15		石英斑岩	6.05	5.4	1.5	80.4	A	
171	8 M 15		安山岩	5.05	4.3	1.35	39.6	A	
172	8 N 6		石英斑岩	6.3	5.4	1.9	109.0	A	
173	6 M 7		安山岩	7.0	5.2	1.25	78.0	A	
174	7 N 8		片麻岩	6.65	4.2	1.15	54.9	A	
175	K-ライン10-11間		安山岩類	7.2	5.05	2.05	96.9	—	
176	K-ライン10-11間		安山岩	5.9	4.55	1.3	45.8	A	
177	K-ライン9-10間		安山岩類	5.8	4.1	1.5	55.9	A	
178	K-ライン8-9間		安山岩	5.8	4.45	2.0	62.1	B	
179	表 種		安山岩類	5.6	4.3	1.5	55.1	A	
180	表 土		安山岩	(6.35)	(6.1)	(1.5)	(68.6)	A	半欠
181	4 D 3-255		安山岩	7.5	6.2	2.0	122.0	A	
182	4 D 15-331		安山岩類	5.9	4.5	1.45	59.6	A	
183	5 C 2-263		安山岩類	6.45	4.4	1.9	71.9	A	
184	5 C 14-406		花岗岩	5.8	5.4	1.3	62.5	A	
185	4 E 15-819		安山岩類	6.2	5.4	1.5	65.5	A	
186	6 F 12-1459		石英斑岩	6.7	6.5	1.3	83.2	A	
187	4 E 14-822		安山岩類	7.0	5.4	1.5	84.4	A	
188	6 D 12-476		安山岩類	5.2	5.0	1.6	62.3	A	
189	4 E 3-835		安山岩類	6.25	6.7	1.7	114.8	A	
190	5 B 6-369		安山岩	6.9	5.9	1.7	109.9	A	
191	K-ライン10-11間		安山岩類	5.3	3.2	1.1	24.4	A	
192	K-ライン10-11間		安山岩	7.2	4.4	1.2	62.7	A	
193	3 C 12-203		安山岩類	7.15	5.6	2.2	120.8	A	
194	6 F 1-1443		安山岩	6.1	4.4	1.8	67.0	A	
195	5 D 4-1058		安山岩類	6.3	6.2	1.9	71.6	A	
196	7 F 5-640		安山岩	7.5	5.2	1.4	70.0	A	
197	7 F 7-1475		安山岩類	6.8	5.15	2.0	95.3	A	
198	5 C 11-1233		石英斑岩	6.1	4.75	1.55	66.5	A	被熱赤化
199	5 C 5-1094		安山岩	6.45	5.7	2.1	117.0	A	
200	6 P 3-430		安山岩	7.05	5.8	2.4	127.0	A	
201	9 E 1-1517		石英斑岩	5.3	4.2	1.2	39.6	A	
202	5 D 2-719		石英斑岩	5.7	4.1	1.1	38.9	A	
203	5 C 12-1211		石英斑岩	7.3	4.6	1.7	87.7	A	
204	7 F 5-625		片麻岩	5.9	4.0	1.45	55.0	A	
205	5 C 13-119		石英斑岩	6.3	4.7	1.7	74.9	A	
206	6 B 13-7		安山岩類	7.4	5.0	1.7	76.3	A	
207	6 B 13-7		石英斑岩	7.6	5.5	2.0	129.3	A	
208	5 B 9-48		安山岩類	6.1	4.7	1.0	44.6	A	
209	5 C 11-76		安山岩	6.8	6.8	1.9	123.7	A	
210	5 C 12-49		安山岩類	6.5	5.0	1.7	81.4	A	
211	6 B 2-24		安山岩類	(6.8)	(4.8)	(2.2)	(99.3)	A	半欠
212	5 C 12-61		安山岩類	10.1	6.4	1.7	118.9	A	
213	6 B 5-41		石英斑岩	5.4	4.2	1.25	37.3	A	
214	5 B 9-46		片麻岩	8.6	5.5	2.2	161.8	B-1	
215	5 C 5-141		安山岩	6.5	4.4	1.9	83.0	C	

216	K-9ライン10-11層		石英斑岩	6.9	4.4	1.8	72.4	C-1	
217	6 G 2-689		石英斑岩	5.15	3.8	2.4	66.9	C	
218	6 D 16-504		砂岩	5.8	5.5	2.0	101.1	C	
219	8 C 4-2		安山岩	5.3	5.1	1.95	64.3	—	
220	7 B 5-6		安山岩	6.9	4.9	1.6	79.6	—	
221	21集 18		石英斑岩	7.2	5.35	2.8	151.6	—	
222	7 D 9-912		安山岩類	(7.4)	(6.9)	(1.3)	(70.6)	—	両端損壊
223	2 住 389		安山岩	(5.1)	(5.9)	(1.5)	(42.7)	—	一端剥離ミス
224	5 C 11-1234		安山岩	(5.5)	(4.6)	(1.2)	(31.4)	—	側縫欠
225	5 G 6-1302		安山岩	(4.8)	(5.6)	(2.1)	(72.0)	—	半欠
226	9 集 43		安山岩類	(6.7)	(6.4)	(1.9)	(90.6)	—	半欠
227	2 住 6		安山岩	(5.8)	(5.2)	(1.9)	(38.3)	A	一端剥離ミス
228	9 集 31		安山岩類	(3.5)	(5.0)	(1.2)	(25.9)	—	半欠
229	5 D 10-399		安山岩類	(6.2)	(4.2)	(1.8)	(66.8)	A	一端剥離ミス
230	5 G 8-1310		安山岩類	(6.8)	(5.7)	(1.5)	(68.8)	—	
231	試験K-12ライン6-7		安山岩類	6.0	4.8	1.7	63.0	A	
232	18集 59		安山岩類	7.1	5.3	1.7	101.7	—	
233	18集 11		安山岩類	4.0	2.8	0.9	11.9	—	
234	18集 12		安山岩類	5.4	5.1	1.5	58.6	—	
235	18集 264		安山岩類	5.0	3.7	1.5	34.4	—	
236	19集 1		安山岩類	7.6	6.1	1.7	122.5	—	
237	19集 4		安山岩類	6.6	5.6	1.6	83.4	—	

第13表 凹石属性表

整理No	検出地点	団 No	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	形態	備考
1	3 D 6-218	67-190	粗粒砂岩	10.4	7.7	4.5	600.3	—	
2	1 住 682	67-191	粗粒砂岩	9.2	7.5	5.5	486.3	—	
3	6 D 10-13	67-192	粗粒砂岩	8.4	6.9	4.3	395.2	—	
4	1 住 48	67-193	粗粒砂岩	12.05	8.3	5.2	788.4	—	
5	16集 484		安山岩	10.0	6.2	4.0	384.9	—	
6	6 B 6-14		花崗岩	9.4	8.0	5.9	627.7	—	
7	1 住 上層		花崗岩	11.4	8.7	4.5	649.9	—	
8	5 B 14-27		粗粒砂岩	7.5	5.5	4.1	257.8	—	
9	6 集 4		粗粒砂岩	8.0	6.2	3.2	217.3	—	
10	2 住 821-781		花崗岩	10.4	9.3	4.6	713.8	—	

第14表 磨石属性表

整理No	検出地点	団 No	石材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	形態	備考
1	7 M 5	68-194	片麻岩	11.4	9.3	4.4	777.9	—	
2	7 M 4	68-195	片麻岩	11.7	7.8	4.9	716.4	—	
3	7 M 4	68-196	片麻岩	9.7	7.6	4.8	548.7	—	
4	9 E 16 II層中	68-197	花崗岩	9.9	8.9	4.2	542.5	—	
5	16集 496	68-198	花崗岩	12.6	9.5	6.3	1158.6	—	
6	11集 104	68-199	花崗岩	14.4	6.5	4.2	618.5	—	
7	14集 16		花崗岩	10.3	8.2	6.6	789.8	—	
8	15集 40		花崗岩	13.7	7.4	6.8	1048.6	—	

9	表 土		安山岩類	8.6	7.4	4.7	432.0	—	
10	16集 77		花崗岩	8.5	5.65	3.8	283.5	—	
11	15集 14		花崗岩	11.5	6.5	4.5	491.3	—	
12	5 集 183		安山岩	9.7	8.4	5.1	648.1	—	
13	2 集 93		花崗岩	10.1	8.3	4.7	573.5	—	
14	2 集 59		花崗岩	9.1	5.9	2.8	230.7	—	
15	2 集 147		花崗岩	11.8	5.5	3.6	332.6	—	
16	808- 表採		花崗岩	9.0	8.2	4.1	439.3	—	
17	6 F 5-1451		安山岩	10.4	7.9	2.4	334.4	—	
18	5 集 33		珪 岩	7.6	4.9	3.8	210.5	—	
19	5 G 15-1350		花崗岩	12.8	11.8	4.9	1071.7	—	
20	14集 101		花崗岩	6.3	5.5	3.4	172.6	—	
21	18集 81		片麻岩	(8.6)	(8.1)	(6.5)	(664.8)	—	
22	16集 135-155 403-404		安山岩類	(10.8)	(7.0)	(4.5)	(452.9)	—	
23	3 住 6		花崗岩	(6.9)	(8.5)	(2.6)	(215.8)	—	
24	7 C 8-1		安山岩	(11.3)	(6.3)	(5.2)	(532.5)	—	
25	6 集-99 5 D 9-357		片麻岩	(10.6)	(4.9)	(5.8)	(447.5)	—	
26	8 M 4		片麻岩	(5.2)	8.9	5.3	(394.5)	—	
27	7 D 5-947		片麻岩	(3.3)	(6.9)	(4.7)	(145.8)	—	
28	3 F 7-1388	69-200	花崗岩	10.2	7.5	3.9	527.1	—	
29	16集 443	69-201	粗粒砂岩	11.0	9.1	4.5	656.4	—	
30	5 C 12-1209		花崗岩	14.4	8.6	3.9	811.8	—	
31	5 C 12-57		安山岩	12.5	7.3	5.6	785.9	—	
32	5 C 16-91		安山岩	9.1	9.0	5.0	620.4	—	

第15表 敲打器属性表

整理No	檢出地點	國 No	石 材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	形 態	備 考
1	9 F 7-557	69-202	珪 岩	3.9	3.1	2.7	52.2	A	
2	1 住 855	69-203	珪 岩	7.1	6.1	4.6	290.0	B	
3	2 住 807	69-204	珪 岩	8.0	7.7	4.6	401.0	B	
4	16集 509	69-205	花崗岩	12.3	6.0	5.1	577.4	A	
5	1 住 上層	69-206	粗粒砂岩	7.6	3.6	3.3	134.5	A	
6	9 集 252	69-207	安山岩	9.0	3.4	3.4	174.6	A	
7	7 M 9	70-208	珪 岩	7.6	5.8	4.4	292.9	A	
8	6 集 3	70-209	粗粒砂岩	6.6	5.7	3.5	200.5	B	
9	4 集 140		花崗岩	8.2	4.9	2.6	174.0	A	
10	13集 90		花崗岩	10.4	5.6	3.0	260.8	A	
11	2 住 474-P-1		安山岩類	11.0	3.5	3.2	169.7	A	
12	16集 92		花崗岩	11.1	4.6	4.0	329.2	A	
13	2 住 545		花崗岩	9.1	4.9	2.8	189.2	A	
14	16集 427		花崗岩	9.4	5.6	3.2	263.5	A	
15	3 集 48		花崗岩	8.7	5.7	3.6	244.2	A	
16	3 集 13		片麻岩	7.7	3.8	3.8	176.4	A	
17	6 D 9-482		花崗岩	8.4	4.7	4.1	223.7	A	
18	17集 115		花崗岩	7.8	6.5	3.3	214.3	B	
19	16集 539		粗粒砂岩	7.0	6.6	4.4	285.2	B	
20	4 C 1-232		花崗岩	18.3	7.2	10.0	1710.7	—	台石
21	5 C 11-87		花崗岩	17.4	15.3	7.5	2974.8	—	山石

22	T C 8-10		珪岩	9.5	6.6	2.7	276.6	A
23	14集 85		花崗岩	7.0	4.8	3.8	176.5	A
24	1住 929		花崗岩	8.3	5.6	3.0	174.0	A

第16表 石皿属性表

整理No	検出地点	団 No	石 材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	備 考
1	4 B 15-304	70-210	安山岩	16.4	(7.9)	4.2	3.3	686.1
2	14集 110	70-211	安山岩	24.8	14.3	5.6	2.5	2161.9
3	4集 158-159	70-212	安山岩	22.8	11.9	6.3	3.5	1842.9
4	14集 111		安山岩	19.6	(7.6)	9.2	—	1836.4
5	5 C 13-124		安山岩	(15.1)	(12.2)	(7.8)	—	(1666.9)
6	7 M 5		安山岩	(5.6)	(8.0)	(5.7)	—	(386.8)
7	13集		安山岩	—	—	—	—	破片 56点
8	12集 8		安山岩	—	—	—	—	破片
9	11集 106		安山岩	—	—	—	—	破片

第17表 石核属性表

整理No	検出地点	団 No	石 材	長 (cm)	幅 (cm)	厚 (cm)	重 (g)	形 態	備 考
1	3住 9	71-213	流紋岩	6.9	3.8	2.6	72.2	A	
2	3住 320	71-214	流紋岩	6.8	4.7	2.1	65.5	A	
3	T C 8-11	71-215	流紋岩	6.5	7.3	2.2	102.7	A	
4	1住 上層	71-216	流紋岩	6.6	6.7	2.0	74.2	A	
5	12集 31	71-217	流紋岩	6.8	5.4	3.3	109.8	D	
6	16集 489	71-218	流紋岩	8.2	6.4	4.0	178.1	D	
7	22集 68	71-219	流紋岩	5.2	5.8	3.4	83.3	F	
8	2住 681	71-220	流紋岩	5.3	3.9	2.4	52.1	F	
9	1住 P-1 フクド	71-221	流紋岩	6.1	4.5	3.3	69.3	B	
10	K-10ライン6-7の間	71-222	流紋岩	6.7	4.8	2.8	111.1	H	
11	16集 84	72-223	流紋岩	4.5	4.1	4.4	100.0	B	
12	16集 271	72-224	流紋岩	6.4	4.4	3.6	115.3	B	
13	1住 798	72-225	流紋岩	5.6	4.6	3.8	109.2	B	
14	1集 68	72-226	流紋岩	6.1	9.0	5.8	371.4	G	
15	16集・2住 ベルト内	72-227	流紋岩	3.8	3.8	3.9	74.7	G	
16	3住 47	72-228	流紋岩	4.1	4.5	2.1	39.5	E	
17	9集 93	72-229	流紋岩	5.5	3.1	2.9	39.5	H	
18	15集 16		流紋岩	10.7	12.9	13.5	2231.4	G	
19	22集 65		流紋岩	7.0	5.3	2.8	93.5	F	
20	3住 323		流紋岩	5.2	4.7	3.9	86.6	H	
21	1住 上層		流紋岩	4.0	6.9	3.5	109.3	B	
22	3住 121		流紋岩	5.5	5.6	1.4	46.2	A	
23	4集 280		流紋岩	6.0	5.4	3.2	95.9	E	
24	1住 II区 フクド		流紋岩	5.2	5.1	2.0	50.2	A	
25	9集 128		流紋岩	2.4	10.3	4.3	88.3	C	
26	18集 90		流紋岩	7.2	4.5	2.6	72.1	B	
27	1住 116		流紋岩	6.3	7.2	2.4	89.5	A	
28	表 採		流紋岩	5.3	3.8	2.6	38.7	E	

29	3住 15		流紋岩	4.3	5.8	4.4	109.7	B	
30	7M5		流紋岩	6.8	7.9	6.5	438.9	G	
31	K-11ラインの10-11		流紋岩	3.9	6.5	7.0	203.7	C	
32	2住 199		流紋岩	5.7	8.7	4.8	287.6	B	
33	K-11ライン 9-10間		流紋岩	4.3	6.1	4.7	112.5	B	
34	2住 385		流紋岩	5.6	7.0	4.1	205.8	B	
35	3住 171		流紋岩	8.3	6.2	4.8	250.2	H	
36	1住 373		流紋岩	4.1	3.9	2.2	42.3	F	
37	2住 559		流紋岩	7.5	4.5	3.1	88.3	A	
38	3住 231		流紋岩	4.1	8.1	6.0	253.4	C	
39	3住 62		流紋岩	4.1	3.4	4.5	64.3	G	
40	7N8		流紋岩	5.0	3.5	2.5	48.7	F	
41	3住 101		流紋岩	5.4	5.7	4.0	134.6	I	
42	2住 578		流紋岩	6.9	5.0	3.5	150.6	F	
43	2住 P-2		流紋岩	4.3	5.2	5.6	113.7	G	
44	3住 236		流紋岩	5.2	5.8	3.6	108.3	G	
45	3住 50		流紋岩	6.1	4.1	1.8	36.0	A	
46	K-10ライン 11-12間		流紋岩	4.4	5.7	6.1	188.2	G	
47	K-10ライン 11-12間		流紋岩	4.9	4.3	5.5	133.7	G	
48	2住 783		流紋岩	2.0	5.0	4.5	39.5	C	
49	1住 上層		流紋岩	4.5	4.1	4.1	90.4	I	
50	3住 14		流紋岩	6.1	4.0	2.8	43.8	A	
51	2住 772		流紋岩	3.7	5.7	3.3	58.0	B	
52	試掘K-2 9-10間		流紋岩	6.5	7.7	8.0	370.9	I	
53	3住 308		流紋岩	5.7	4.6	3.0	62.7	E	
54	3住 242		流紋岩	6.2	4.7	2.2	62.4	E	
55	3住 169		流紋岩	6.7	3.2	3.5	40.1	I	
56	2住 250		流紋岩	4.9	4.0	2.2	30.8	A	
57	15集 ベルト内		流紋岩	4.0	4.0	1.9	21.7	A	
58	2住 594		流紋岩	5.2	3.6	2.0	38.8	A	
59	2住 P-12		流紋岩	5.4	3.4	2.4	36.1	C	
60	2住 789		流紋岩	5.9	6.5	3.1	136.5	F	
61	2住 771		流紋岩	4.7	4.5	2.3	33.4	A	
62	2住 722		流紋岩	4.8	5.1	2.5	64.6	F	
63	2住 P-1		流紋岩	3.5	4.5	2.8	38.6	B	
64	2住 446		流紋岩	4.5	4.6	2.2	34.0	A	
65	表 採		流紋岩	2.2	7.6	3.1	52.2	C	
66	2住 803		流紋岩	4.3	3.1	1.1	22.5	A	
67	3住 112		流紋岩	6.0	3.6	1.9	30.2	A	
68	2住 430		流紋岩	4.3	3.3	1.9	21.7	A	
69	1住 406		頁 石	4.6	2.8	1.9	22.1	F	
70	2集 背区		流紋岩	5.6	4.2	2.7	55.8	D	
71	17集 171		流紋岩	7.2	3.8	2.4	72.5	F	
72	1集 69		流紋岩	5.2	5.9	2.5	96.9	F	
73	17集 371		流紋岩	6.4	5.0	3.5	129.3	A	
74	5B-B-1261		流紋岩	5.5	4.2	2.0	44.5	E	
75	5C11-83		流紋岩	4.4	3.2	2.5	37.6	I	
76	5B10-45		流紋岩	3.7	3.7	2.5	26.4	I	
77	16集 279		流紋岩	4.9	5.5	2.9	68.5	F	
78	1集 46		流紋岩	5.9	6.0	3.0	101.2	I	

79	15集 44		流紋岩	6.2	8.1	6.7	333.9	I
80	22集 67		流紋岩	6.4	6.8	3.9	147.2	F
81	22集 95		流紋岩	6.5	4.6	3.1	82.4	D
82	9集 279		流紋岩	6.2	7.0	3.5	167.2	G
83	6 D 1-417		流紋岩	2.6	7.5	5.2	86.1	C
84	22集 70		流紋岩	6.6	4.9	3.8	115.7	H
85	5 F 14-698		流紋岩	8.3	6.1	3.3	200.8	I
86	6 F 5-1452		流紋岩	7.3	4.5	3.5	88.3	I
87	22集 7		流紋岩	2.9	6.5	4.0	52.9	C
88	16集 477		流紋岩	7.7	3.2	2.1	47.3	I
89	7 B 9-19		流紋岩	5.7	5.1	2.8	89.6	D
90	4集 257		流紋岩	6.3	4.0	3.9	99.8	G
91	22集 87		流紋岩	5.8	3.0	2.5	30.1	A
92	9集 281		流紋岩	3.4	4.8	3.6	55.9	G
93	6集 95		流紋岩	8.7	9.2	7.8	649.4	I
94	5集 119		流紋岩	5.8	5.7	3.4	121.9	F
95	22集 66		流紋岩	5.6	4.7	4.6	98.6	I
96	6集 23		流紋岩	4.4	4.6	3.2	52.2	E
97	9集 342		流紋岩	5.2	4.3	1.9	39.8	A
98	22集 74		流紋岩	9.8	11.3	4.5	430.7	A
99	16集 401		流紋岩	9.5	6.4	2.8	111.3	A
100	6集 57		流紋岩	4.6	6.1	4.0	112.8	I
101	17集 347		流紋岩	6.7	4.8	4.2	123.3	I
102	2往 788		流紋岩	6.6	3.6	2.1	33.2	I
103	2土壤 18		流紋岩	8.9	5.5	3.1	76.4	D
104	17集 111		流紋岩	6.3	5.9	2.5	71.5	A
105	14集 92		流紋岩	3.5	5.2	3.4	51.9	B
106	14集 45		流紋岩	4.2	5.3	2.5	47.8	A
107	7 C 12-21		流紋岩	3.3	4.9	3.1	41.1	I
108	14集 75		流紋岩	2.2	4.5	2.8	26.9	C
109	9集 59		流紋岩	7.8	3.9	4.0	111.7	H
110	13集 58		流紋岩	5.0	6.3	5.5	171.0	G
111	18集 239		流紋岩	7.0	5.0	2.3	89.0	A
112	16集 82		流紋岩	5.3	4.3	2.7	53.0	E
113	13集 59		流紋岩	4.3	3.2	2.5	40.6	I
114	2土壤 34		流紋岩	5.2	3.3	1.8	27.9	E
115	14集 74		流紋岩	5.1	5.0	2.5	68.4	E
116	14集 90		流紋岩	3.5	3.7	3.1	55.9	G
117	14集 50-99		流紋岩	5.7	5.2	3.0	98.3	I
118	18集 156		流紋岩	3.5	3.7	3.3	38.8	G
119	14集 44		流紋岩	3.2	5.5	3.0	50.4	B
120	14集 55		流紋岩	6.8	3.7	2.0	40.2	A
121	14集 163		流紋岩	3.5	5.8	3.7	46.3	I
122	14集 84		流紋岩	2.9	3.4	1.6	10.9	I
123	7 C 9-4		流紋岩	7.0	3.0	2.3	35.9	I

第18表 地点別組成表

	石器	尖頭器	石錐	石丸	スクレ イバー	圓錐縁	横形	剥片	石核	石錐	凹石	磨石	敲打器	石皿	打斧	磨斧	その他	計
1 住	15	3	6	1	2			436	9	68	3		3			1		547
2 住	13	2	7	1	1	3	2	387	19	15	1		3			1	1	456
3 住	1		2		1			216	17	1		1				2		241
1 集		2	2					5	3	11								23
2 集								5	1	14		3				2		25
3 集								3		4			2			2		11
4 集			1					46	2	3			1	1		2		56
5 集								7	1	7		2						17
6 集	1							15	3	1	1	1	1					23
7 集								20										20
8 集																		
9 集	1	1						58	6	13			1		1			81
10 集										1								1
11 集								2		3		1		1				7
12 集								2	1					1				4
13 集								5	2	1			1	1		1		11
14 集	3	1						43	10			2	1	2	1			63
15 集								3	3	4		2						12
16 集	1	1				1		39	8	7	1	4	4			1		67
17 集						1		42	4	7			1					55
18 集								12	3	4		1						20
19 集								5		2								8
20 集																		
21 集								6		1								7
22 集			1					19	9	2								31
その他	10	1	1	4	3	1	3	2157	22	68	4	15	6	3	4	4	3	2309
計	45	10	22	6	7	6	5	3533	123	237	10	32	24	9	6	14	6	4095
百分比(%) (剥片・石核数%)	10.3	2.3	5.0	1.4	1.6	1.4	1.1			54.0	2.3	7.3	5.5	2.1	1.4	3.2	1.4	

第V章 考察

集落の景観

(1) 住居跡の様相

本遺跡で検出された住居跡は3軒である。形態的には非常に類縁性に富んでおり、出土土器を別としても、これらがさほどかけ離れた時期に営まれたものではないことが推察される。竪穴住居については、橋本正氏による詳細かつ統括的な分析がある。^(注1) 本論では、その成果を踏まえながら、以下に、各住居が持つ諸属性を抽出して、そのまとめと若干の考察を加えてゆきたい。

住居跡の平面形態は長方形を呈し、いわゆる長棟に属するものである。この竪穴住居の長棟化は中期前葉に急速に普遍化し、本遺跡並行の新崎式期にはその最盛期を迎える。東北・北陸を中心に不動堂遺跡のような大形住居が出現するのも、これに相前後する時期である。従って、本遺跡の竪穴住居は当該期に特徴的な形態を具備するものであるといえる。住居規模は、1号住居跡が $8.6 \times 5.6m$ 、2号住居跡が $10.9 \times 6.1m$ 、3号住居跡が $8.4 \times 6.2m$ を計る。住居の掘り込みの深さは、検出された壁高が本来の属性と言えるかどうか疑わしく、不明としておきたい。規模が最も大きいのは2号住居跡であるが、他の住居跡に比べて種々の不明確な部分が多く、検討余地の残された住居である。従って、明確なプランの検出を得た1号住居跡と3号住居跡は、平面規模の点で極めて類似していると言える。

次に主柱穴の配置についてであるが、橋本正氏の分類に従って検討してゆきたい。

1号住居跡は、9本の主柱を有し、一方の妻側は主軸を挟んで2本が対峙し、もう一方は主軸上1本がのり、全体の配置が長軸を主軸として相似形となる。いわゆる9本主柱式XY型c系統の配置を示している。その他のピットでは、主軸上にのる浅い小ピットが検出されており、構造的になんらかの役割を担っていた可能性がある。2号住居跡は、ピット属性の検討から一応8本を主柱として抽出している。先にも述べたように、多分に検討余地が残されている。1号住居跡で捉えたような、主軸上に配される小ピットをまず認定した上で主柱の抽出である。これによって、一応8本主柱式Y型c系統の配置を示すことになるが、ただ第III章でも触れたように、ピット配列が不規則で、主軸設定の変更によってはXY型あるいはX型c系統ともなりうる要素を含んでいる。また、建て替えや拡張、或は重複関係をも考慮しておく必要がある。現段階では、規模及び柱配置の点で他とは異質な存在であると言ふことができる。3号住居跡は、7本の主柱を有し、基本的には1号住居跡と同様の配置を示す7本主柱式XY型c系統と言ふことができる。主軸上にのる小ピットは本住居では存在していない。

以上の主柱配置は、住居平面形とともに当該期の傾向を忠実に踏襲しているものと評価できる。ここで

比較的明確な主柱の把握をみた1号住居跡と3号住居跡について、もう少し詳しく観察してみたい。

まず、柱穴・壁間寸法をみてみると、1号住居跡では全て1.3mを測り差は殆ど認められない。3号住居跡では、壁立ち上がりの不明確な南西側長辺壁を別とすれば、全て1.4mを測って1号住居跡と近似値を示す。このように、壁間寸法が統一された状況は、上屋構造の規格性を推定させるものといえる。

一方、柱間寸法をみると、長軸に沿う柱列においては、1号住居跡で2本柱妻側を起点として2m置き、3号住居跡で同じく2本柱妻側から2.2m置きを基本として配されているようである。そして1本柱妻側の柱位置は、住居壁からの寸法に応じて決定されるものとすれば、両住居跡での三角形配置部（Y型部）の形態の相違が理解できる。また、主軸を狭んで対峙する柱間の寸法もばらつきが認められるものの、柱の位置が両妻側と同じように壁間寸法によって決定されると解釈すれば、当然の結果であると言うことができる。これらの推測が妥当ならば、住居構築にあたっての手順がかなり明確に示される。残された2号柱居跡であるが、以上で得られた柱間寸法優先の把握からすれば、P17・P7・P6・P8・P13・P14を6本主柱X型とした組合せと、P19・P20・P9・P5・P10・P4・P3を7本主柱XY型とした組合せに分離される可能性が生じてくる。尚、P8とP19の切り合い関係ではP8が新しく、従って前者の組合せによる住居が後出のものと考えられる。加えて、2号住居跡内の土器集中の片寄りと、出土土器にやや新しい様相が看取される点が有力な根拠となりえようか。

内部施設については、3軒ともに主軸に合致した位置で、柱穴とは区別されるやや規模の大きいビット^(注2)が検出されている。「貯蔵穴風の穴」と称されて、機能としても貯蔵穴^(注3)があてられている。いずれのビットからも多量の剥片類が検出されており、土器の出土はいたって乏しい。剥片類の検出状況は、覆土全体に混在する在り方を示し、住居が営まれている間に石器製作作業用ビットとして利用されていたとは考えがたい。むしろ、住居廃絶後に形成された石器類集中と同列に捉えるべきであると思われる。浅い1段掘り込み部に板材等の蓋を用いた貯蔵穴としての活用が推定される。

炉は、1号住居跡で焼けた床が検出された他は、痕跡すら認められなかった。遺跡内全体では、焼け礫が散在して検出されており、日常的な火の使用は主に屋外でなされたものと考えられる。

住居内遺物の出土状態では、1号住居跡以外での良好な遺存状態は認められておらず、廃絶過程に大きな差異が存する。1号住居跡では生活の痕跡を留める遺棄状態を示しており、柱穴と貯蔵穴付近への土器の片寄りが指摘された。また、石錘素材の集積については、今後の貴重な事例となろう。打欠礫石錘を漁網用具として考えた時、居住者の依存生産活動も規定されるものである。これと同様な出土状態を示す例^(注4)が函館市中野遺跡A地点13号住居跡で得られており、石器製作の痕跡を含めて、住居跡内の場の活用に両者酷似する様相が認められる。

以上、検出された住居跡について、簡単に特徴の抽出を行ってきた。遺物分布の在り方をより詳細に検討すれば、さらに多くの情報が得られるものと思われるが、ドットマップを基礎とした検証を今後の課題としておきたい。また、集落内での各住居跡の位置付けと景観の構造的把握については、次の遺物分布の検討にゆだねるものとしたい。

(2) 遺物分布からみた集落の構造

1.はじめに

本遺跡では、可能な限りのドットマップ化を試みた結果、遺物がある一定のまとまりをもって分布する様相が把握された。検出されたこの遺物集中地点は22ヶ所で、住居跡覆土で形成される遺物集中を加えると、合計25ヶ所にのぼることになる。こういった遺物分布の片寄りは、決して本遺跡特有の現象ではないようである。従来より、実地検証面では、こういった状況がしばしば認識されていたものの、客観的資料の提示については、なおざりにされていたと言わざるを得ない。このような記録や、資料提示については果たしてどれだけの有意性をもっているのか疑問視もされよう。

遺跡における遺物の出土地点をドットマップ化する意義については、麻生氏が提唱した「原位置論」に係わる論巧に詳しい。^(注5)その主旨は、遺跡内における遺物の出土位置は、ある人間行動の結果であり、それが二次的な擾乱を受けていない以上、遺跡でくりひろげられたあらゆる人間行動の痕跡として、遺構と同等か或はそれ以上の情報に高次化しようとするものである。この方法論は、遺構の検出を伴うことの極めて少ない先土器時代遺跡の調査において、有効に利用され、一定の成果を生み出してきている。遺物のある一定のまとまりをユニットまたはブロックと称して捉える概念である。そして、そのユニットのひろがり、占地形態、ユニット内遺物の組成等を類型化して、場の機能やさらには行動パターンの解析を目指したものである。先土器時代遺跡の遺物分布をみると、すべてが生活面としての一定レベルに張り付いて検出されてはおらず、多くは、垂直分布に上下幅が認められている。これは、自然的ななんらかの二次的作用が及んだ結果であると言わざるをえない。しかし、平面分布のうえで、遺跡内で遺物がまんべんなく出土するのではなく、ユニットとしての把握可能な実態がある以上、少なくとも、ユニット内の構成要素とそれを形成するに至った人間行動に関しては、正当な評価が与えられるべきである。この観点に基づいて本遺跡における遺物集中地点を、人間行動の結果として積極的に評価することから、実態の分析を試みたいと思う。

2. 遺物分布の様相

ドットマップ化した全ての遺物を付図として示してある。黒色は土器、赤色は剥片石器製作に係わるもの、青色は主に礫石器として区分して表示した。本来は、器種単位のマーク分けをもっと細分化して表示すべきであるが、予算制約からくる縮尺の関係で、繁雑さを避ける方向をとった。住居跡以外の各遺物集中の名称と範囲は記入していないので、第6図の概念図で把握して戴きたい。また、住居跡覆土遺物についても、遺物集中と同様の観点で捉えるものとした。ただし、1号住居跡の場合の床面直上実測遺物については除外してある。住居内遺物のドットは密集しているため、第III章の各遺物出土状況図を参照願いたい。

全体的な分布状態については第III章で述べたとおりであるが、ここで、さらに詳細な集中の概念化を行いたい。机上で視覚的なまとまりを細分化したのが第73図である。多分に感覚的要素を含むが、土器集中は、高密度タイプとして18ヶ所、低密度タイプとして26ヶ所を認定した。むろん、低密度タイプの範囲内

で形成される高密度区域も多い。石器集中では、まず剝片石器類で高密度タイプ13ヶ所、低密度タイプ6ヶ所が、礫石器類で高密度タイプ7ヶ所、低密度タイプ4ヶ所が認定された。土器集中はP01～P044、剝片石器類集中はFT1～FT19、礫石器集中はPB1～PB11として表示している。

a. 土器の分布

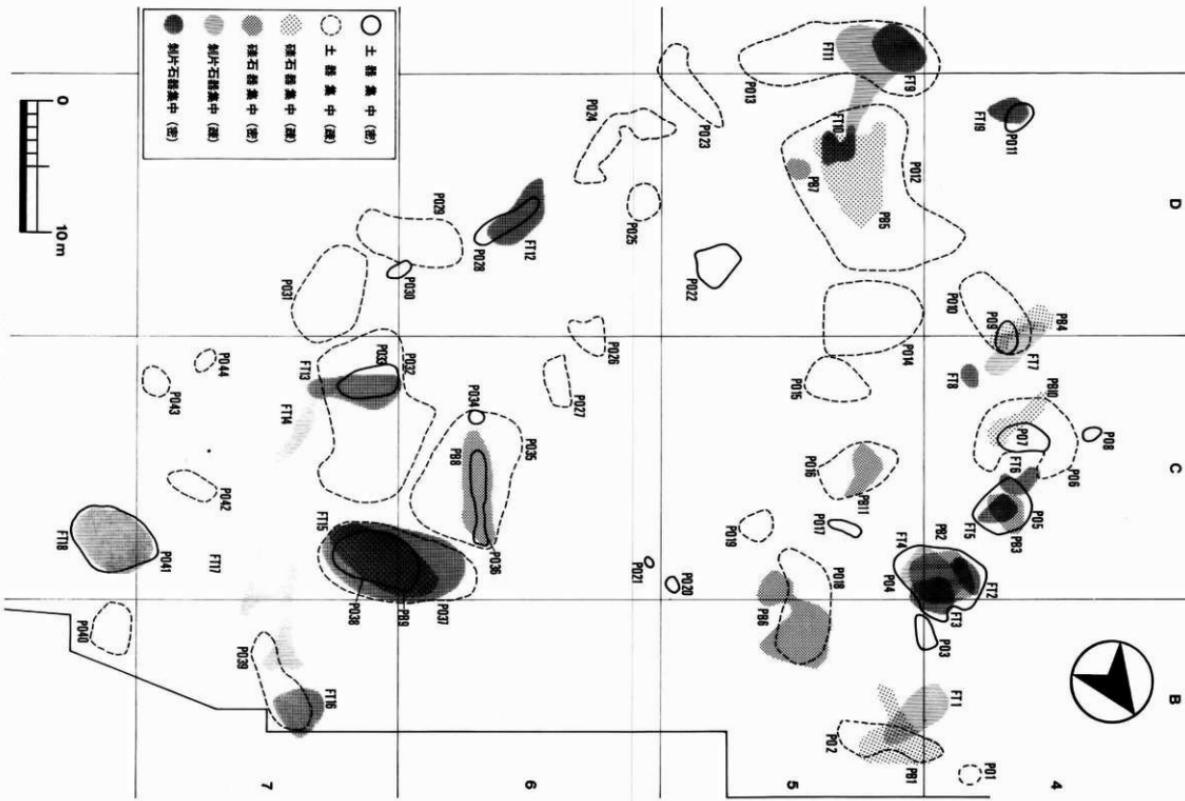
全体を概観してまず気が付くのは、土器分布と石器分布がよく重なる在り方を示すことである。土器の遺存状況は、1号住居跡の床面遺物を除いて殆ど全てが破片の状態である。土器が住居外の広範囲で破片として遺されることについて、その前提に廃棄行為が介在していたと見る場合と、自然的營力が及んだものとする場合の二つの主な考え方がある。^(注8) 本遺跡では、遺物がある一定のまとまりをもって遺存し、地形的要因による流動が考えがたい状況にあるため、これを原位置により近いものとして評価したいと思う。従って、本遺跡の土器分布をとおしてまず推測されることは、その場が集落の中で廃棄の場としての機能を有していたことである。この様な観点に立ってこの分布形態を解析すると、まず、住居を生活の拠点とした廃棄行為の行動半径が示される。廃棄の場は、取りも直さず遺跡内の日常生活に必要な最小限領域の外縁に求められ、本遺跡では、それが環状を呈しているのである。もちろんそれは、一回の廃棄行為によって形成されたものではなく、居住期間内で徐々に空間を埋めていったものと思われる。そして、その廃棄行為によって埋め尽くされることのない、住居に近接した空間が形成されている。^(注9) ここが、共有の広場としての機能を持っていた可能性が強い。

土器分布で、大形で高密度の集中をみせるのは、住居跡覆土としてのP04、P038、P041であり、他はいたって散漫な分布状態が主体を占めている。この覆土遺物は、他では見られない顕著な接合関係を有している。のことから、一括投棄に近い状態で比較的短期間に形成された集中域として性格づけられる可能性が大きい。即ち、この住居が廃絶された後に形成されたことは確かである。その外の土器集中が、これらの住居での居住期間内にしだいに形成されていったものとするとき、両者の間に時間差が存在することになろうが、これを証明する有力な手がかりは得られていない。ただ、土器の型式的様相では、1号住居跡床直遺物とそれ以外の土器集中を構成する土器とは時間差を認定し難く、一方、1号住居跡や2号住居跡の上層遺物では、やや新しい様相を呈する土器の出現頻度が高まる傾向にあるのも事実である。この点の積極的な評価が許されれば有利であるが、この場合、この住居廃絶後に土器を投棄した集団の生活拠点の存在を求める必要があり、残された問題も多い。^(注10)

以上をまとめると、

- 1) 土器集中区域は、基本的には廃棄の場としての性格を示している。
- 2) 廃棄によって輪郭付けられる空間は、住居周辺での最小活動領域の外郭を示す可能性が強い。
- 3) 大形高密度の土器集中は、住居跡覆土にみられ、住居廃絶後に形成されたものである。
- 4) 住居跡覆土の集中は、他の集中とは性格を異にし、時間差を持つものと推測される。

ということになり、土器のみによっては、活動舞台の景観はまだ漠然としたものでしか知ることができない。しかしながら、集落内における基本的な空間利用の一様相を、推測させうる分布形態を示しているも



のとして評価されよう。

b. 石器の分布

石器も土器と同じようにある一定のまとまりをもって分布しており、その石器の集中区域は、殆どが土器集中区域との重複関係を示している。分布の主体は、石器製作に係わる剝片とその石核であるが、それらがその場に遺存する背景については、土器とは異なる観点での解析が必要である。剝片石器が使用から廃棄にいたる前段階として、〈石材の遺跡内搬入→石核整形→目的剝片の生産→剝片への二次調整→石器として使用〉という原則的な工程が遺跡内でくりひろげられる。従って、土器とは異なり、使用・廃棄にプラスして、製作時に伴う遺物の遺存が設定されるわけである。石器製作に際しては、目的剝片の生産に伴って多量の調整剝片や不要の剝片が生じる。石器製作の場の殆どは、そういった不要副産物が必ず生じるということを認識したうえで成立していたはずである。即ち、土器片の集中は廃棄によってのみ成立するのに対して、剝片の集中する石器製作の場は、そこから製品の持ちだしを終えた時点で、遺棄状態のままで廃棄の場的な性格をもってくる場合が多い。このようにして考えてみると、土器集中の形成された区域内で、石器製作を何とする剝片集中が展開されるのもうなずけよう。

また、礫石器については、本遺跡の主体は剝離調整の必要な石錐である。石錐は自然礫を用いていることから、その製作に伴う剝片類の現地調査段階での認定は困難であった。しかしながら、その素材となりうるような法量を有する搬入石材に着目することにより、剝片分布を補うような成果を生み出すことができよう。

以上のような性格を念頭に置いた上で、これらの分布様態を類型化して把握すると下表のようになり、その各類型の分布は第74図～第76図のようになる。

遺物集中類型（第74図）			
類型	集中構成		
類型 1	P011+FT19, P013+FT9+11, P028+FT12, P030+FT13, P039+FT16, P041+FT18		
類型 2	P018+PB6, P016+PB11, P06+7+PB10, P035+36+PB8		
類型 3	P02+FT1+PB1, P04+FT2+3+4+PB2, P05+FT5+PB3, P09+10+FT7+PB4, P012+FT10+PB5, P037+38+FT15+PB9		
類型 4	FT1, FT8, FT14		
礫石器集中類型（第75図）			
類型 A	PB1, PB6, PB10	A'	
類型 B		B'	PB4
類型 C	PB2, PB7	C'	PB3, PB11, PB5, PB9
類型 D	PB8		
剝片石器類集中類型（第76図）			
類型 X	類型Y以外のすべて		
類型 Y	FT3, FT8, FT15, FT18		

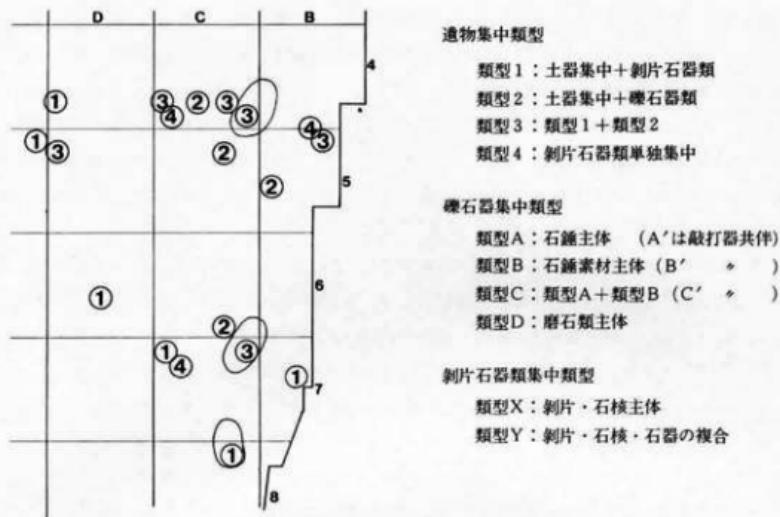
この類型化から看取される傾向をまとめると、

- 1) 石器の巨視的分布はまず、1号住居跡の存する北西半部と2・3号住居跡の存する南東半部に二分される。
- 2) 類型3のように全てが混在し、尚かつ明確な重複関係を示すのは、住居跡覆土で把握されたPO4とPO37・38に重複する一群で、その外の大部分は土器集中の一画を占有する場合が多い。
- 3) 碓石器集中の分布では、北西半部への著しい偏在傾向がみられる。類型的には、石鍤完成品主体の類型Aが1号住居跡の周囲に分布し、もちろん製作用の敲打器の伴出はない。一方類型B・Cになると、その分布は土器廃棄の場で展開した剥片類集中と同様の在り方を示し、殆どが敲打器を伴うか、これを作った集中に隣接する位置にあり、製作跡の色合いが強い。
- 4) 類型Dは、磨石類とその素材になりうる法量をもつ自然礫を主体とするものであるが、2号住居跡に隣接したPB8一ヶ所のみである。そして、3号住居跡周辺に至っては碓石器類が著しく減少する。
- 5) 剥片石器類集中では、殆どの集中が石器製作跡としての理解が可能であるが、類型Yのように、本来はその場から持ち出されるべき石器が多く含まれる集中も存在する。そして、その類型は特に住居跡覆土において形成されていると指摘できる。

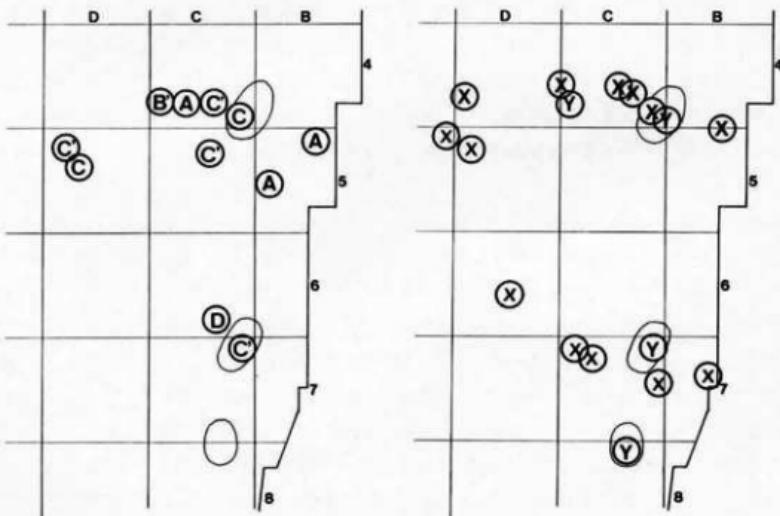
3. 集落の構造

以上のことから予測されることを整理してみたい。まず、住居跡覆土で捉えた遺物集中であるが、全ての遺物が著しい混在状況を示しており、また通常の石器製作跡では伴うことの少ない完成石器が際立って集中することが判明した。このことは、この場の活用が他の集中とはやや異なる状況下でなされたことを示唆しているのではなかろうか。即ち、土器分布の項でも指摘したように、多くの遺物集中が集落を営んでいた期間内に継続的に形成されていったのに対し、住居覆土の集中は、その住居廃絶後の生活者が集約的な廃棄の場として活用したものという考えを補強するようと思われる。吹上バターンに対する批判を度外視するわけにはいかないが、この点を結論付ける有力な手がかりを得ていない。ただ、1号住居跡に隣接する4号集中は、堅穴状遺構を伴うものであるが、この床面直上出土の剥片や石核・石器と同一母岩の剥片類が1号住居跡の覆土から検出されており、接合関係も有している。そして、注目すべきことは、1号住居跡出土の剥片が理表皮中心の石核調整剥片で、4号集中検出剥片との間には、製作作業工程上の明確な時間差が設定できるのである。この遺構を生活跡として積極的に評価することが許されれば、非常に有力な手がかりとなろう。また、2号住居跡では重複関係を有する可能性が指摘されており、後出の住居跡は貯蔵穴を持たず、規模も縮小するものと推定されている。覆土遺物の形成過程については、今回検証の及ばなかった部分が多く、これらのことから、この集落の構造を考えるうえで、まず住居跡覆土遺物集中を除外して解析してみるものとする。

遺物集中は遺跡内で環状を呈した分布形態を示しており、廃棄の場として集落内最小活動領域の外郭を占有している。住居は、その環状分布の北西端と南東端部に位置して、中央には広場としての空白部を介



第74図 遺物集中類型分布



第75図 磕石器集中類型分布

第76図 剥片類集中類型分布

している。石器分布をみると、1号住居跡から南西方向にのびる集中群と、それに平行して2号住居跡から南西方向にのびる集中群とに二分される。ともに、土器廃棄の場を剥片石器製作の場として活用している。剥片石器製作に伴う遺物は、剥片約3,500点、石核124点と膨大な量にのぼる。これに反して、石器点数は81点と乏しく、未製品を除外すればさらに減少する。遺跡内で製品の遺存が少ないと聞いては、使用に伴う消耗度にかかってくるが、それにもしても極端な差と言わざるを得ない。他の遺跡での単一期における実態が不明確な以上、通有の傾向と言えるかどうか疑問であるが、集落間分業の可能性も考慮しておくる必要があろう。^(注13)

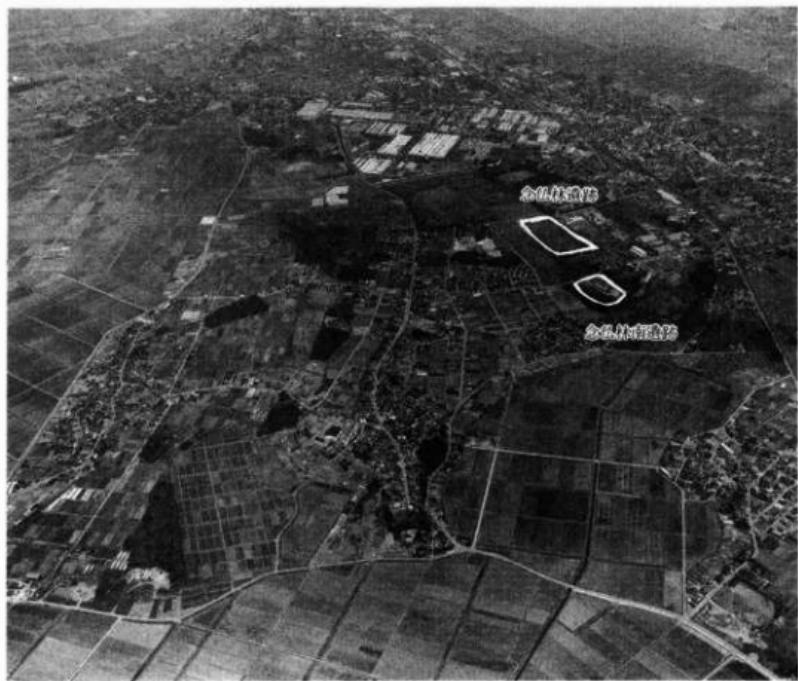
礫石器では、その組成的主体をなす石錐の分布が北西半部に量的偏在傾向が認められる。その完成品は1号住居跡の周辺に分布し、素材と製作用敲打器を持つ集中は、剥片石器類と同様に石器製作跡的な展開を見せている。また、1号住居跡床面には、自然疊に第一次調整を加えた石錐の集積地点が形成されており、この住居の居住者は、漁撈活動を生産基盤としていたことが容易に推測される。従って、石錐分布の片寄りから、北西半帯の遺物集中が、この住居を拠点として形成されたとする見方を補証するものとなる。また、一方で、磨石類及びその素材の集中が2号住居跡に隣接する位置にのみ認められる。さらに、3号住居跡に至っては、疊石器類を殆ど伴わず、その周囲で剥片石器製作のみが展開している。2・3号住居跡では良好な床面直上一括遺物を欠いており、これらの住居を同時共存とする積極的根拠を欠いているものの、集落内での分業体制の一端を想像することも許されよう。それぞれの住居の台地上での占拠位置と、予想される分業の在り方が合致する点は、偶然であろうか。ただ、せいぜい2~3棟で構成される一集落内で、完全分業が成立していたとも即断はできない。季節にもとづく生業主導権の分掌も仮定としては成立し、より実像にせまった分析結果が得られたように思う。それでもやはり、本遺跡での生産活動の主体は、漁業であったと考えられる。疊石錐に対する根本的な解釈の差はあるものの、渡辺誠氏が言うように、網漁業は内湾性漁業形態の代表であり、本遺跡の立地や自然環境、遺物の分布やその組成のすべてが、漁業依存型としての集落の景観を支持しているように思われる。^(注14)

4.まとめ

以上述べてきたように、本遺跡の遺物分布の解析を通して、集落内での場の機能や占地形態を明らかにすることができた。さらに、本集落の生産活動の主体を内湾性漁業に求め、想像の域を出るものではないにしても、集落内での季節的分業体制の存在にまで言及したことは、遺物のドットマップ化の有意性を証明したものと思われる。また、本遺跡において展開した生活の痕跡が、時期的にさほど長期にわたるものではなく、一時期の集落構造を端的に示すような、集約された好資料であったことも幸いした。しかしながら、それでも尚、証明しきせない多くの矛盾点も存している。今回の分析では、ドットマップの資料化を充分に得たとは言えない。特に、剥片石器の製作については、接合作業によって人間の移動を時間的前後関係で証明しうる最高の資料を提供するもので、この点の分析が及ばなかったことは非常に残念である。ただ、このドット資料について、今後も継続して必要な分析がなしうる好材料であるという点で、重要な意義を含んでいるように思う。また、他遺跡での分布論的考察が進んでいない現状では、全てが推

論的となるのも否定できない。一方、集落単位での性格となると、周辺遺跡の調査例が乏しいため判然としないが、当該期並行の集落の発見例は、県内全般でみても極めて乏しい。しかし、本遺跡の立地条件をみれば、背後に丘陵を擁して周囲は渾に囲まれる広大な台地という、格好の生活の場であったと言える。南西側に隣接するB地区では、A地区よりやや古相の様相をもつ土器が検出されており、そして谷を隔てた南東部の念仏林南遺跡では、さらに古相の土器が検出されている。これらは全て中期前葉にあたる中での微妙な変化であり、同一集団の集落の移動があれば、一集団が生産領域を確保して成立していた可能性もでてくる。これらのこととは、今後のセトルメントという視点での考察にかかっており、この渾周辺は極めて魅力的なフィールドと言えよう。

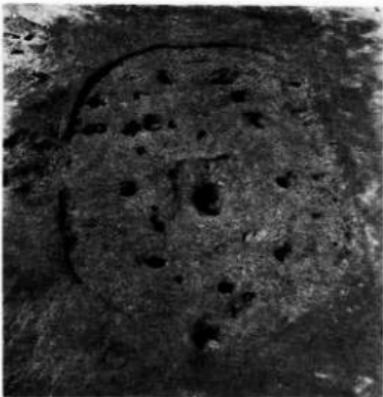
- 注 (1) 橋本 正 1976「堅穴住居の分類と系譜」『考古学研究』第23巻第4号 考古学研究会
(2) 神保孝造 1976「田調査の成果 2 道構」『富山县福光町・城端町 立野・原遺跡群 第四次緊急発掘調査概要』富山县教育委員会
(3) 注(1) (2)に同じ。
(4) 松岡達郎・中田清彦・横山英介 1977「埋石跡考」『考古学研究』第24巻第1号 考古学研究会
(5) 麻生 優 1969「原位置」論説説』『上代文化』第38輯
1974「原位置」論の現代的意義』『物質文化』No.24
(6) あえて文献の列挙はないが、ミミズなどの動物性土壤擾乱、木根等による植物性土壤擾乱、周永河現象下におけるクリオタベーションやソリフラクションを考慮した自然的土壤擾乱等が指摘されている。
(7) 第Ⅲ章2節2)でも述べたが、床直であってもドット化したものについては、床直実測遺物平面図から分離表示してしまった。資料提示方法の不徹底をおわびしたい。
(8) 小林達雄 1974「縄文世界における土器の発展について」『国史学』第93号で詳細な検討がなされている。また田中英司・青木秀雄 1979「第3節 出土状況と遺物分布」「風早遺跡」庄和町風早遺跡調査会では、遺跡内で遺物が遺存する原因として、1. 製作の過程、2. 使用の過程、3. 祭祀的行為の結果、4. 廃棄行為の結果、5. 自然的効力が及んだ結果、の5種を想定している。そして、分布状態の分析から少なくとも、大略「居住型」か「自然型」かの認識が得られるとしている。
(9) この点について筆者は、先土器時代遺跡においても、遺物分布の在り方の分析を通して、全く同様の状況を把握している。
(10) 小林達雄 注(8)文献を中心に提唱された、いわゆる「吹上パターン」にもとづく現象である。
(11) 「吹上パターン」についての検討は数多いが、山本阿久氏が的確にその問題点を指摘し、再検討を加えている。山本輝久 1978「縄文中期における住居跡内一括遺存土器群の性格」『神奈川考古』第3号 神奈川考古同人会 ここでは、「吹上パターン」で解釈されたような廃絶住居と住居跡内一括廃棄土器との無関係さに疑問を投げかけ、むしろ「一括投げ込み時は、その住居の廃絶と重なり合うものであり、……(中略)……一括遺物は廃絶された住居の構成員が使用していた」可能性が高いとしている。この点について、本遺跡の住居跡では、その覆土中にやや新しい可能性のある土器が含まれているとしたが、実際のところ、遺跡における通例の混在状況と判断すればそれまでである。氏の論旨も同様に評価し、検討課題として受けとめておきたい。
(12) 注(10)に同じ。ただ本論では、住居跡覆土遺物集中と他の遺物集中との形成過程の差異に着目したのであり、「吹上パターン」に対する二つの解釈のどちらを求めるか、本論の主旨には影響ないものと考えられる。
(13) 集落間分業の存在とその意義については、後藤和民氏が的確にまとめている。後藤和民 1982「縄文時代における生産力の発展過程」『考古学研究』第29巻第2号 考古学研究会
(14) 注(13)の分業は、集落単位での規模においてこそ、相互補完的な生産力の維持がはかられると意義付けられる。この体制が集落内規模で存在するかは不明であるが、本遺跡の分析結果は仮説提示としては成立しよう。また、本遺跡の住居跡を仮に、時期差を持つもののいう評価をした場合、さらに異なる視点での好資料になると言える。
(15) C. T. ケーリー 1971「セトルメント・アーケオロジー」「信濃」3-2 信濃考古学会で「アメリカにおける最近の考古学の一潮流」として紹介された。このセトルメントを含め、集落研究の到達点は、後藤和民氏によってよく整理されている。後藤和民 1982「縄文集落の概念」『縄文文化の研究』8 社会・文化 雄山閣



念仏林遺跡周辺の地形（セントラル航空撮影）



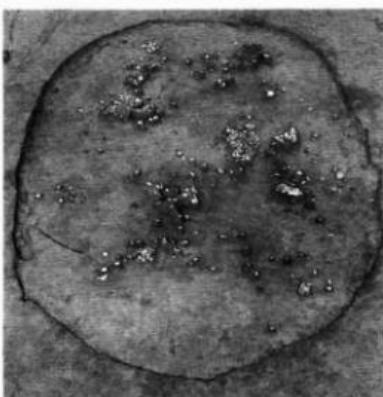
念仏林遺跡遠景（提供 石川県立埋蔵文化財センター）



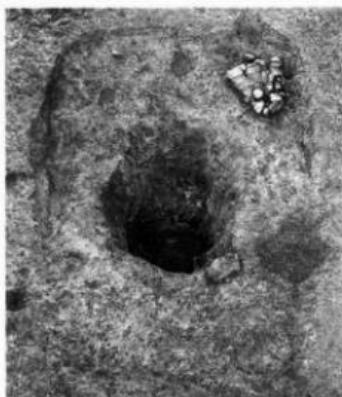
1号住居跡完掘状況



1号住居跡ベルト残存状況



1号住居跡遺物出土状況



1号住居跡 Pit



1号住居跡
発掘調査風景



1号住居跡土器出土状況（土器No1）



1号住居跡土器出土状況（土器No161）



1号住居跡土器出土状況（土器No212）



1号住居跡土器出土状況（土器No218）



1号住居跡
石鍛集積状況



2号住居跡完掘状況



2号住居跡遺物出土状況



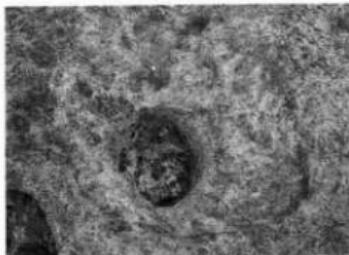
2号住居跡 Pid



2号住居跡 Pid



3号住居跡完掘状況



3号住居跡 Pid



4号遺物集中土器出土状況（土器No2）



4号遺物集中土器出土状況（土器No213）



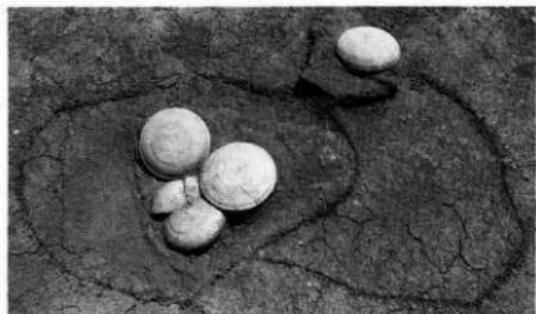
1号住居跡周辺（西方より）



3号住居跡周辺（北西より）



A地区遠景
(提供
石川県立埋蔵文化財センター)



C地区古墳時代土坑

6



1



2



3



6



5



4



7



8



9



10



11



20



13



14



15



16



17



18

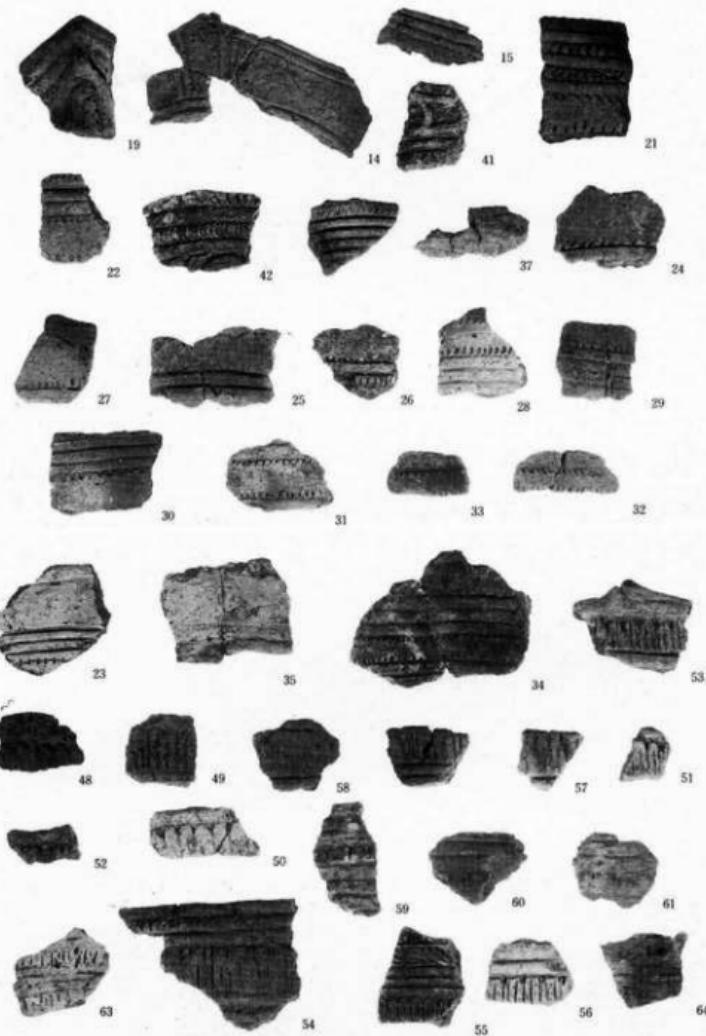


19

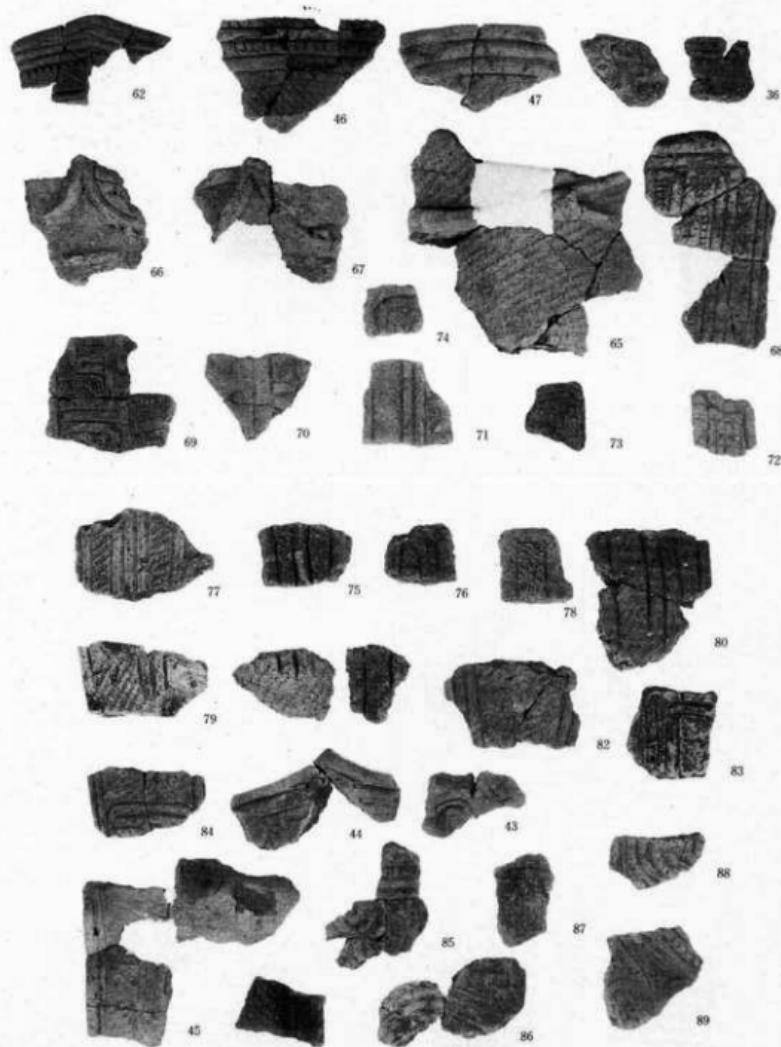


20

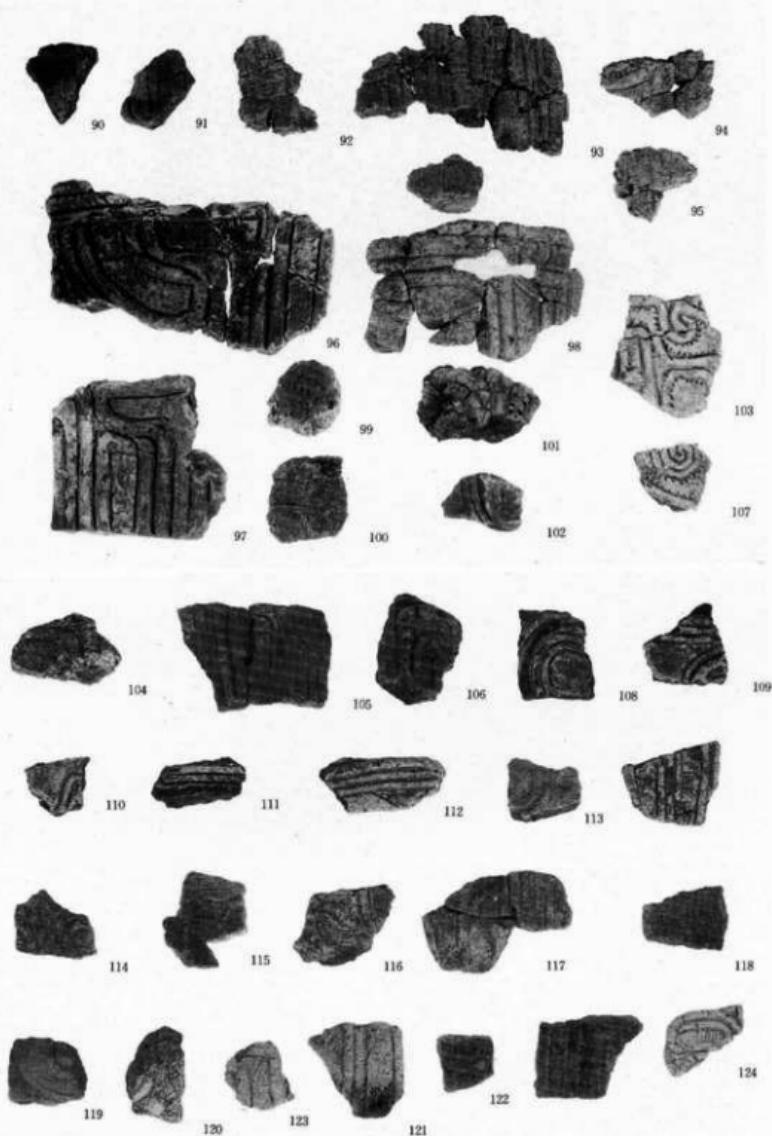
文様帶をもつ深鉢形土器



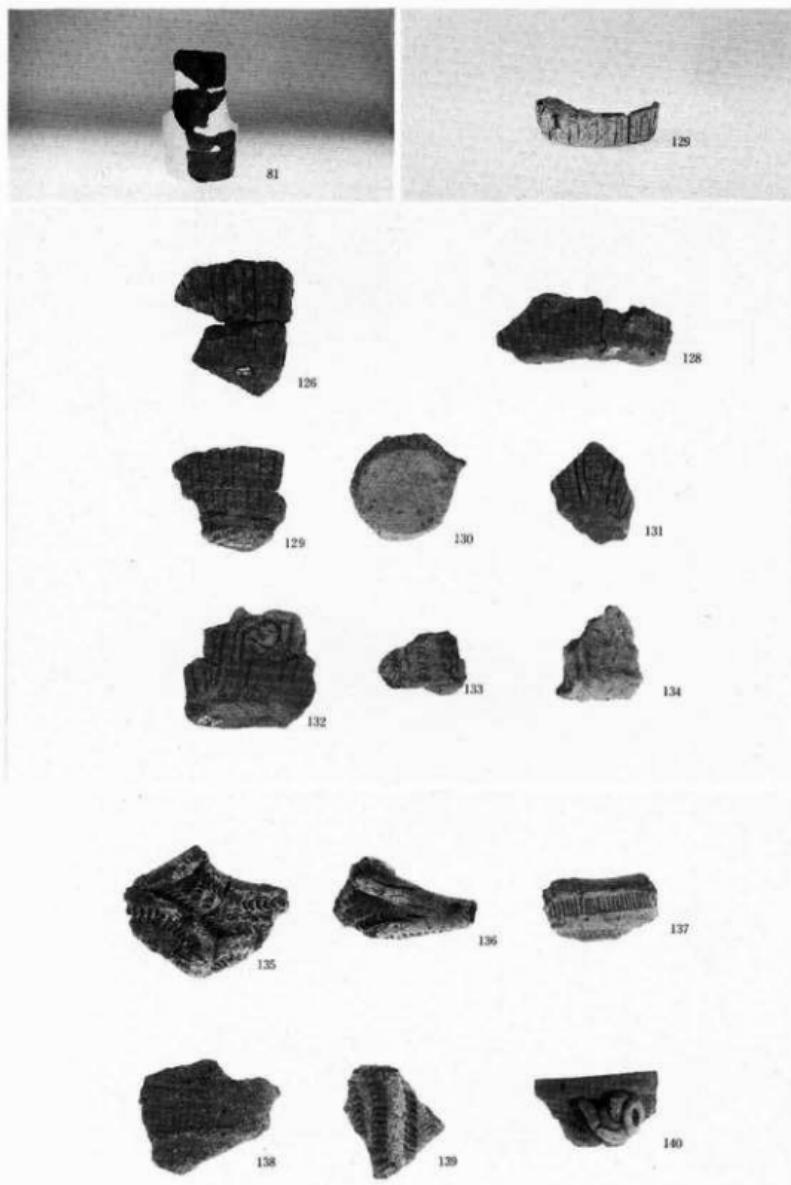
文様帶をもつ深鉢形土器



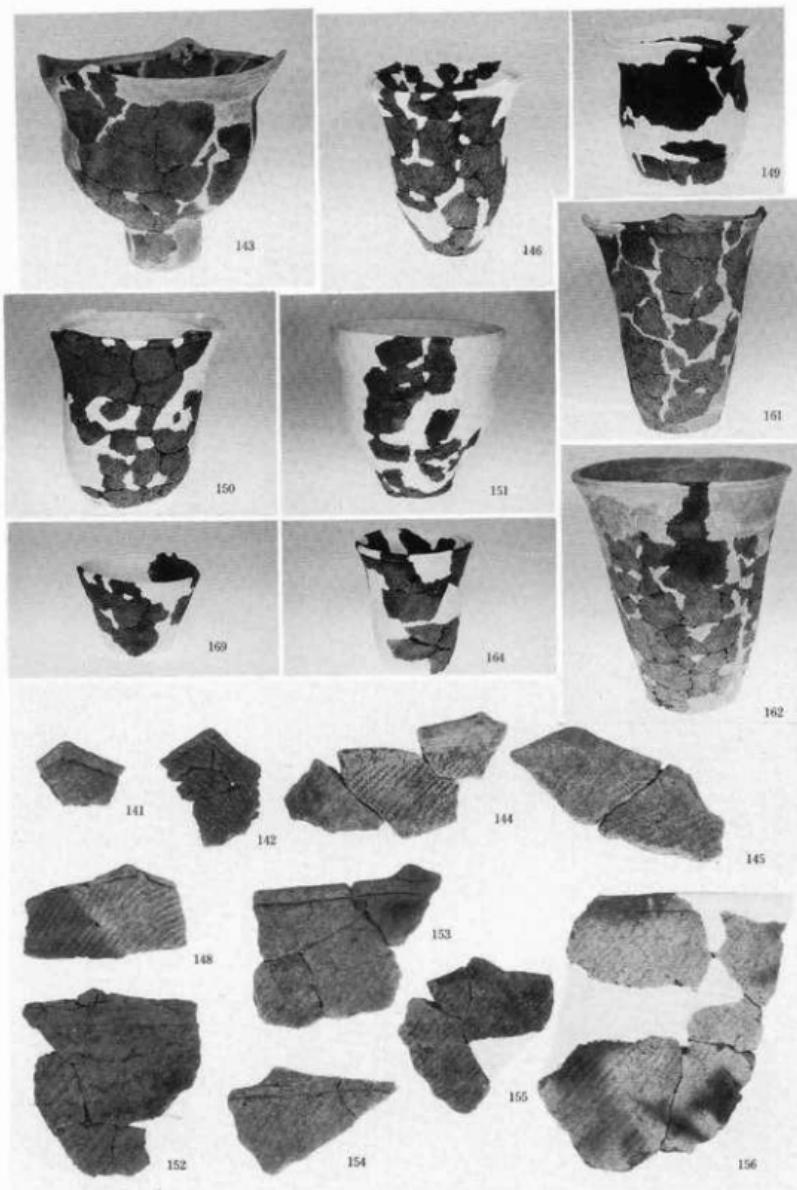
文様帶をもつ深鉢形土器



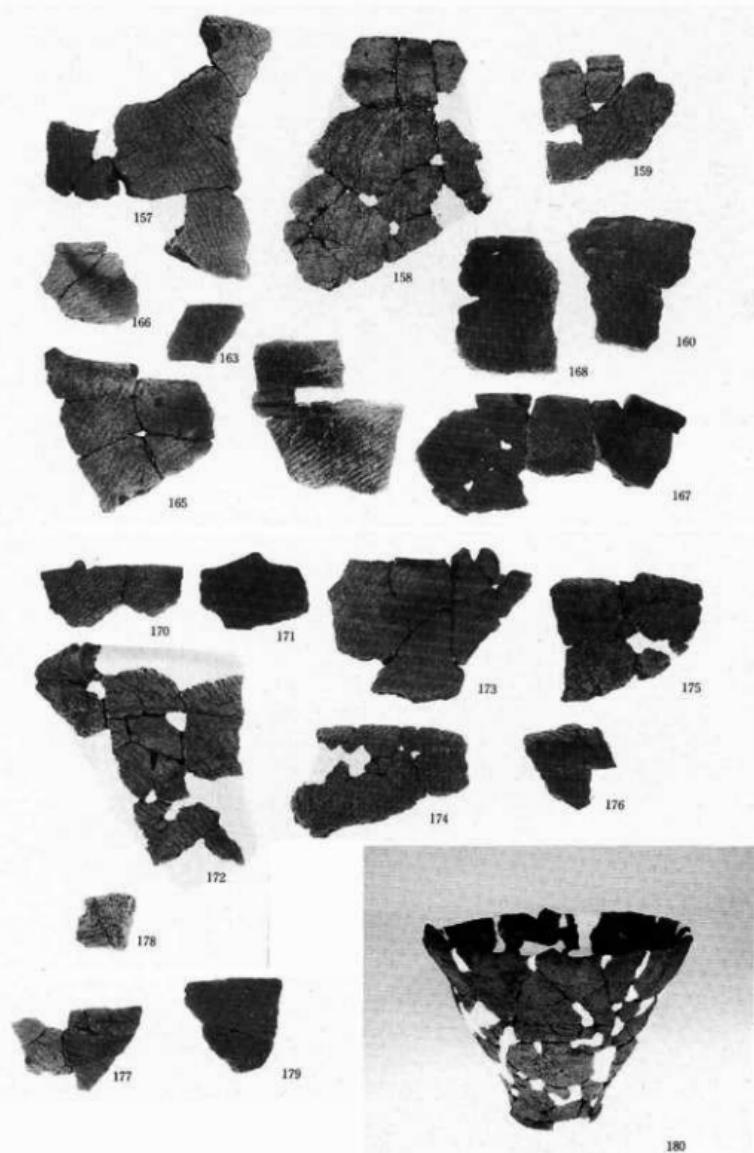
文様帶をもつ深鉢形土器



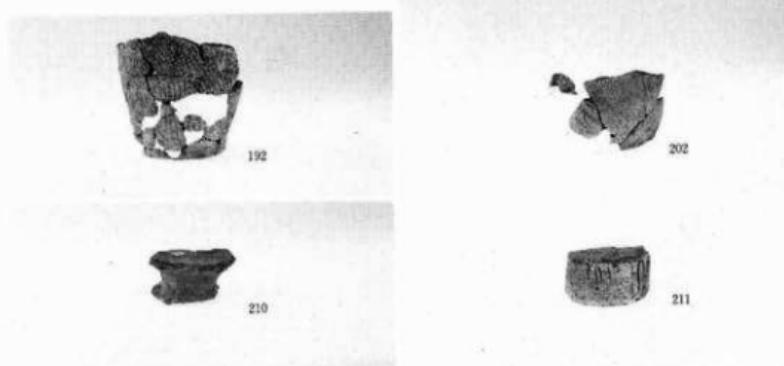
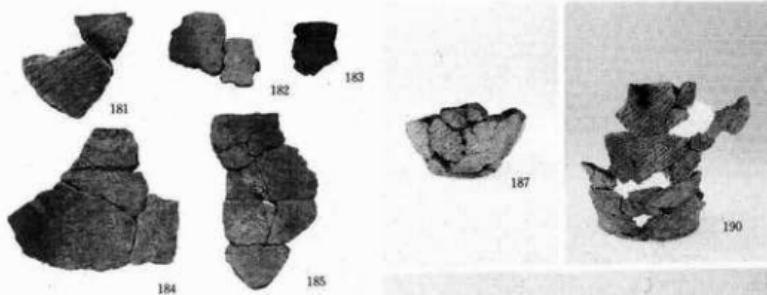
文様帶をもつ深鉢形土器



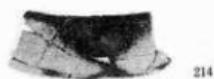
粗製深鉢形土器



粗製深鉢形土器



粗製深鉢形土器と底部付近の深鉢形土器



220

221

222

223

224



226

227

228

229

230

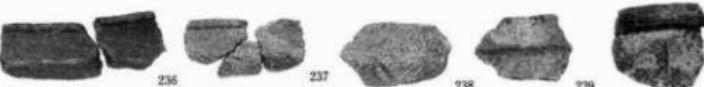


232

233

234

235

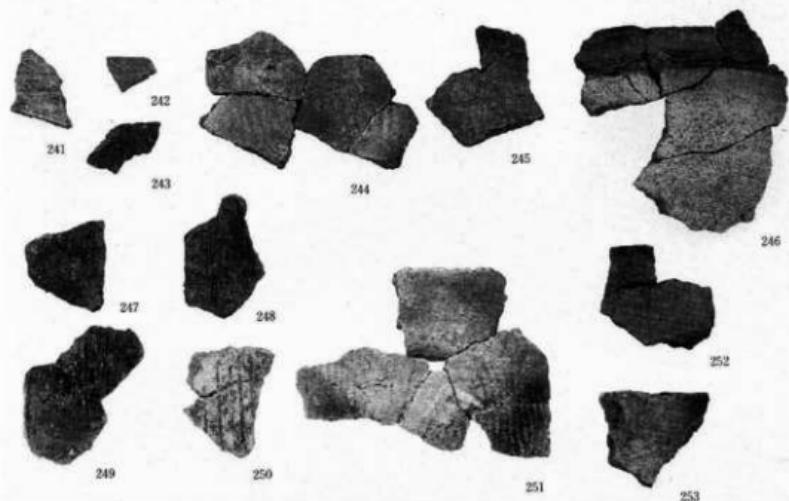


237

238

239

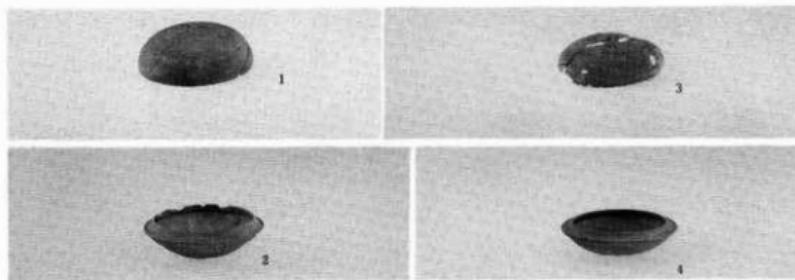
240



縄文時代後期の土器



土 製 品



古墳時代土坑出土須恵器



1

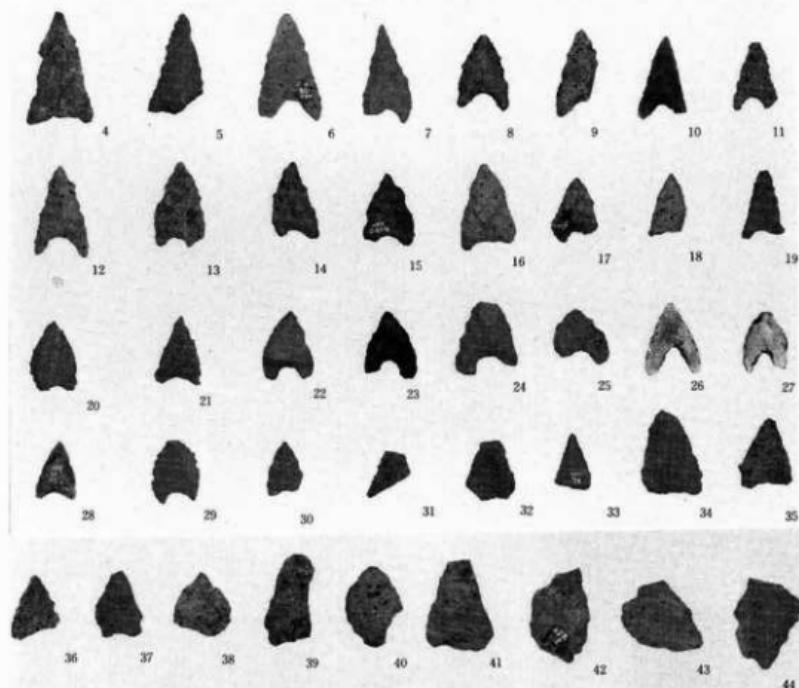


2

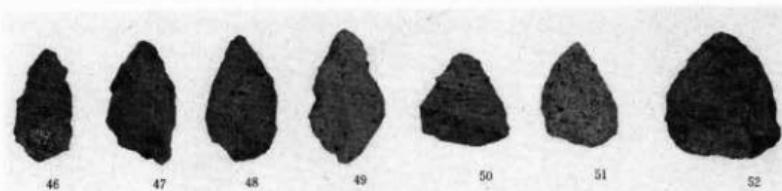


3

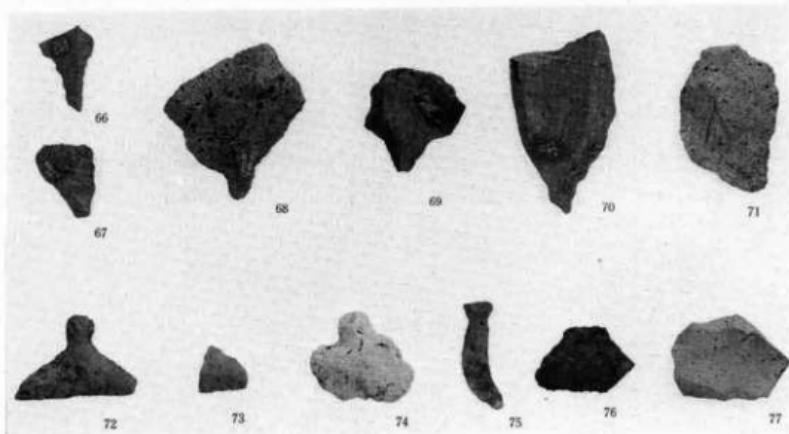
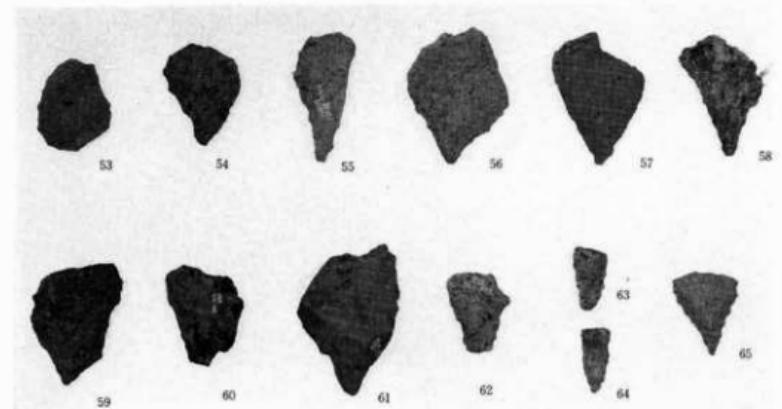
縄文時代草創期の石器（第54図）



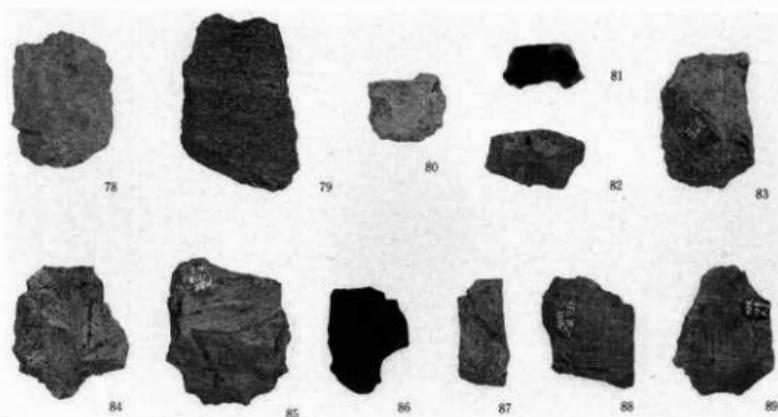
石鏃・石鏟未整品（第55・56図）



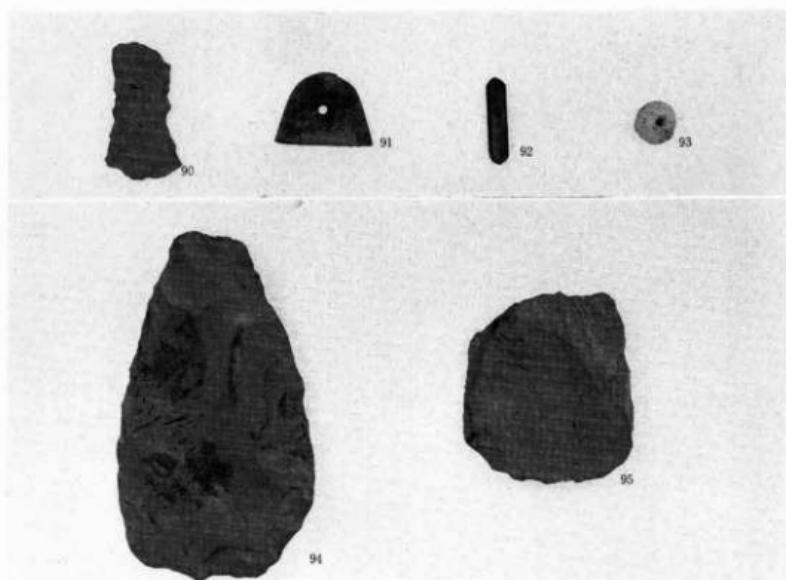
尖頭器・両面加工石器 (第56図)



石錐・石匙・スクレイバー (第57・58図)

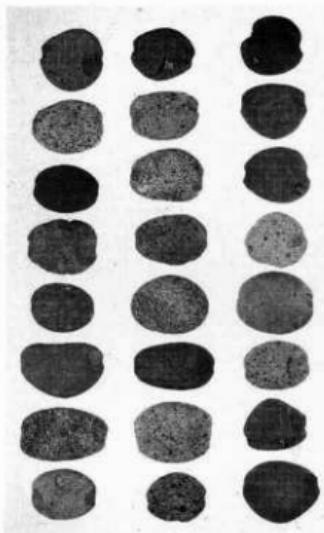


スケレイバー・鋸歯縁石器・楔形石器（第59・60図）

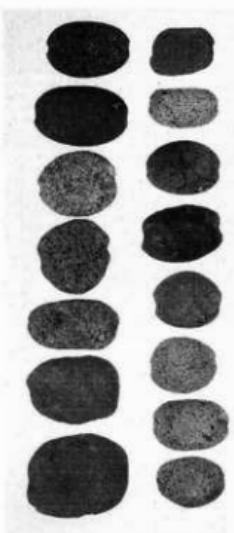


異形石器・玉類・石斧（第60図）

石 砺 (第63—65圖 112—158)



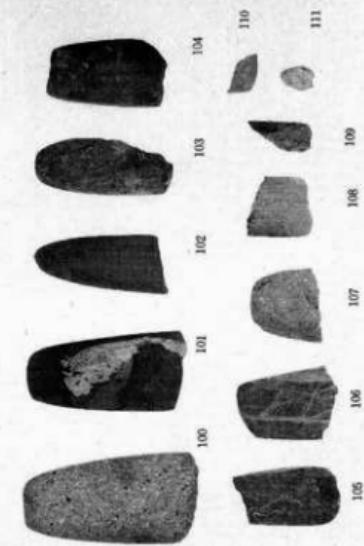
打製石斧 (第61圖)



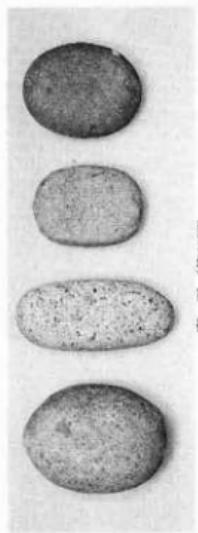
95 96 97

98

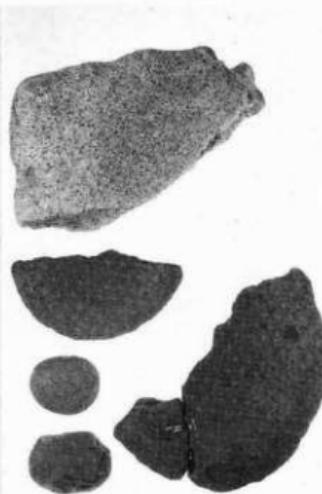
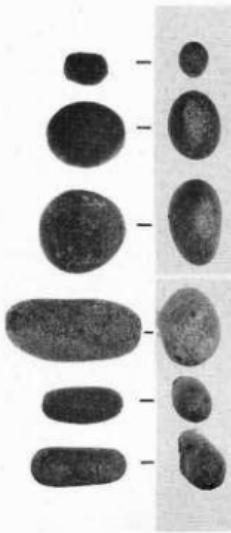
99



磨製石斧 (第62圖)



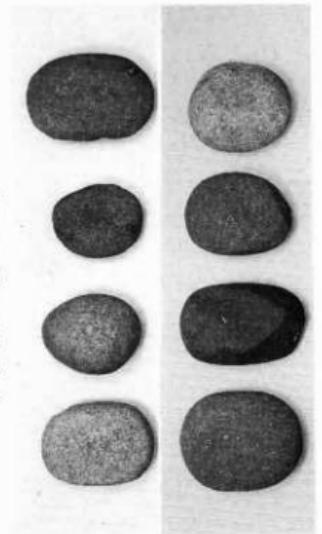
磨石 (第66圖)



敲打器・石皿 (第69—70圖)



石錐 (第65—67圖 159—189)



圓石・磨石 (第67・68圖)



213



214



215



216



217



218



219



220



221



222



223



224



225



226



227



228

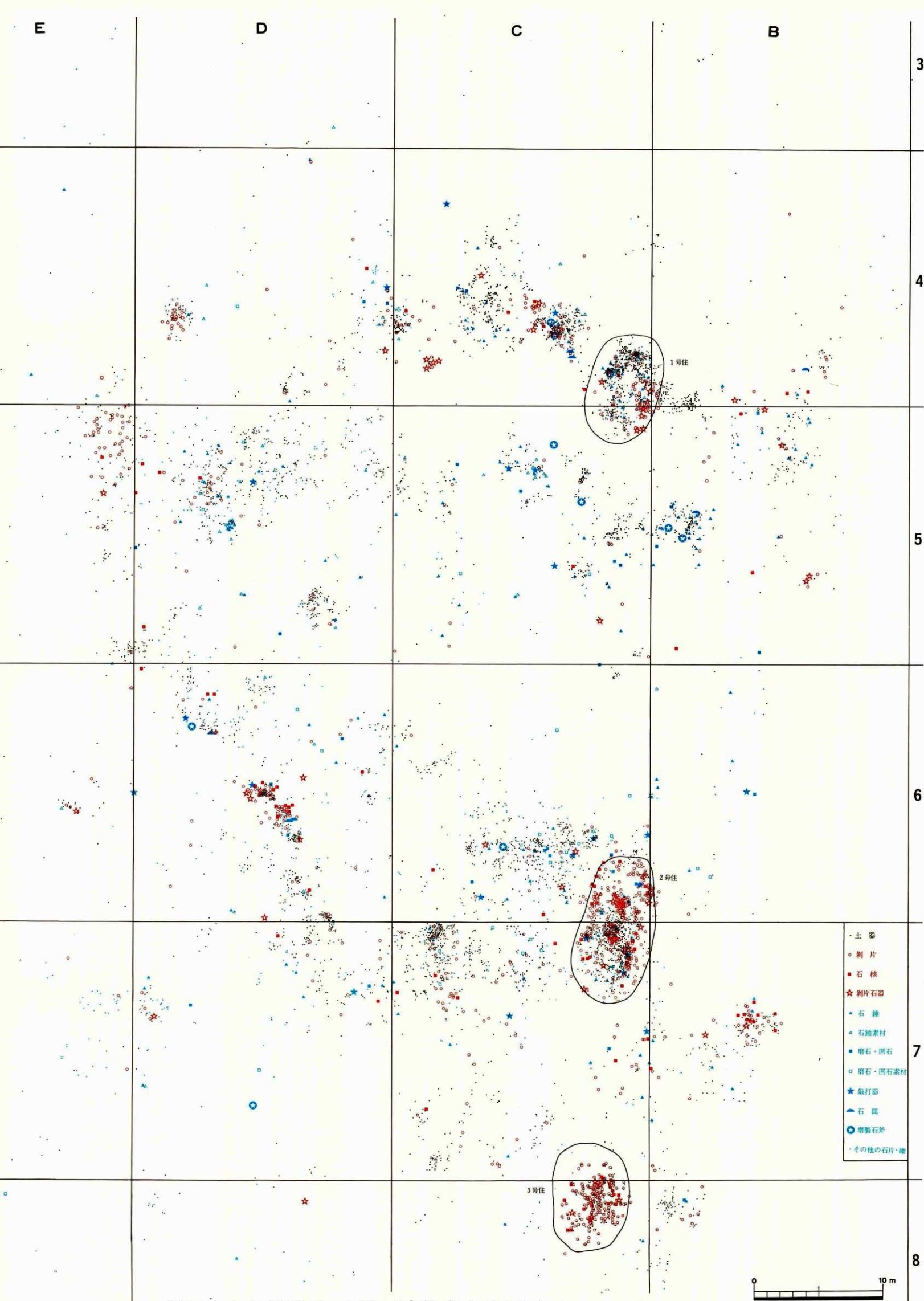


229

念佛林遺跡

小松短期大学建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

発行者 石川県小松市教育委員会
〒923 石川県小松市小馬出町91番地
TEL (0761) 22-4111
発行日 昭和63年3月31日
印刷者 アイワ印刷



付図 念仏林遺跡 A地区遺物出土状況図 (1 / 600)